

# 谷口研究室

## 61年度年間活動報告書

Vol. 4

甲南大学文学部

谷口研究室  
61年度年間活動報告書

Vol.4

甲南大学文学部

## 目次

I.	卷頭言	谷口 文章	— 1 —
II.	第十二回ゼミナール合宿（春季）		
	1. 日程		— 4 —
	2. 解説:遊戯療法について	谷口 文章	— 6 —
	箱庭の感想	小竹 代理子	— 8 —
	i 谷口ゼミナール旅行に参加して		
	ii ユング心理学の世界を読んで	江之口 二三代	— 9 —
	ユング的「自己」について	山田 美紀	— 11 —
	ゼミ合宿に参加して	山下 智実	— 13 —
	ゼミ合宿に参加して	川口 広子	— 14 —
	ゼミに参加して	辰巳 珠海	— 15 —
	「水俣病」について考える	小泉 さより	— 18 —
	今、我々は何をすべきか		
	——「苦海浄土」を読んで	大内 雅勝	— 19 —
	ゼミ合宿に参加して	呑海 友子	— 21 —
	学ぶことから行動へ	飯塚 陽子	— 22 —
	ゼミ合宿で得たもの	合志 由美子	— 23 —
	利己的個人主義と水俣社会		
	——「苦海浄土」より	藤田 清士	— 24 —
III.	第十三回ゼミナール合宿（夏季）		
	1. 日程		— 28 —
	2. 解説:奇形ザル問題		— 30 —
	猿を見つめることは自己を見つめること	植木 通博	— 32 —
	事実を残す	小竹 代理子	— 33 —
	サル社会から学ぶ人間の在り方	小泉 さより	— 34 —
	連作詩「小豆島」	合志 由美子	— 35 —
	小豆島のニホンザル	上野 純一	— 40 —
	ゼミ旅行随想	脇田 博代	— 41 —
	夏合宿に参加して	飯塚 陽子	— 42 —
	小豆島追想記	杉浦 薫	— 44 —
	1986 小豆島のサルたち	川上 義雄	— 45 —
	OPTIMIST	高木 敏宏	— 46 —
	サルと自然	万井 敏寛	— 48 —
	夏合宿の感想	山下 裕幸	— 49 —
	ゼミ旅行を終えて	古市 亮平	— 50 —
	奇形ザルを観察して	山下 智実	— 51 —
	ゼミ合宿に参加して	益田 浩子	— 53 —

ゼミ旅行に参加して	大内 雅勝	— 54 —
ゼミ合宿に参加して	呑海 友子	— 56 —
ゼミ旅行を終えて	西村 由美	— 57 —
私の小豆島体験	馬道 佳代	— 58 —
運営後記	岩田 哲郎・小谷 英子	— 60 —
IV. 授業の一風景		
ことばは沈黙に	北詰 由美	— 64 —
伊勢旅行の思い出	和田 浩一・迎 真弓	— 67 —
奇形ザルと私たちの問題（「いのちと自然」より）	谷口 文章	— 69 —
V. 卒業論文・研究生論文・ゼミナール論文要旨		
カント「人倫の形而上学の基礎づけ」における道徳性概念について	房安 雄司	— 72 —
九鬼周造の『「いき」の構造』をめぐって		
——日本文化における「さび」を中心に——	小竹 代理子	— 75 —
禅思想と自律訓練法		
——安定した精神のあり方をめぐって——	植木 通博	— 79 —
「気」と日本人についての考察	合志 由美子	— 81 —
人工知能について	脇田 博代	— 83 —
人間存在の二重性	飯塚 陽子	— 86 —
「近代的豊かさ」からの脱却	能丸 耕太郎	— 88 —
数学の中の確実性	和田 浩一	— 90 —
VI. 研究室活動概要		
(i)「ヒュームとスミスの会」研究発表	谷口 文章	— 94 —
(ii)「第4回箱庭セミナー」研究発表	谷口 文章	— 97 —
(iii)深層心理研究会公開講座（ユングレターより）		
第1回 報告		— 101 —
第2回 お知らせ、報告		— 103 —
現実幻想 ～宮澤賢治「銀河鉄道の夜」をめぐって～	小谷 英子	— 106 —
三島由紀夫「豊饒の海」に寄せて		
——意識・無意識。そして夢——	石田 智子	— 108 —
(iv)講義概要		— 110 —
VII. 61年度ゼミ活動報告		
		— 112 —
VIII. 編集後記		
		— 113 —

## I. 巻頭言

甲南大学文学部 助教授 谷口 文章

この1年を振り返ってみれば、さまざまなドラマがありました。研究会発表、講義、ゼミ、合宿等多くの実り多い研究や教学の機会に恵まれました。中でも特筆すべきことは、私の研究室で「深層心理研究会」主催の公開講座が開催されたことでありましょう。この研究会は哲学をベースとして、前の勤め先である国立奈良工業高等専門学校で、私の研究室の公開自主ゼミナールから端を発し、次にユング心理学を中心とした心理学研究会として継続され、甲南大学に転任してからは自宅で「フロイト研究会」を行ってきました。その成果が公開講座として結実したわけです。その目的は哲学や深層心理学を中心に文学、社会科学等の分野も含めて学際的に討論する場を提供し、いわゆる従来の狭い哲学から脱皮を計り、また一見すると理論的に整合性を保っているが、実はその理論に盛り込めなかった日常の人間の行動における微妙な要因についても汲み上げるため象牙の塔以外の領域で活躍されている現場の意見を聞く必要性を感じたからです。そのような主旨の下に、日本ユングクラブの協賛を得て、昭和61年7月5日には森 茂起講師（甲南大学）により「夢分析」、昭和62年1月17日には氏原 寛教授（大阪市立大学）による「ユング心理学をめぐって」の講演を御願いし、私たちの研究会の充実に大きく貢献して頂きました。今後半年に1回の割合で、公開講座を行う予定です。

また、3月のゼミナール合宿は1年間のまとめとしての研究発表会、7月のゼミナール研修旅行では、従来からの実践的課題である「奇形ザル問題」をさらに深めるために、好広真一助教授（龍谷大学）を迎えて日本ザルの観察指導をして頂きました。御協力を賜りました森先生、氏原先生、好広先生には深く感謝する次第です。

多くの出来事のあった1年であっただけに時の過ぎるのは本当に早いもので、研究室のリーダーシップをとってくれた4回生の諸君はあと一ヶ月で学生生活を終えようとしています。ゼミ、合宿、報告書作成、コンパ、そして人生の悩み等で苦楽を共にしたことが次から次へと思い出されます。これから温室の生活ではなく、何の防御もない荒海へ旅立とうとする人たちの未来に対して、心からよき出発であることを祈っています。最後に、ゼミ幹事の岩田哲郎君、小谷英子さん、会計の高木敏宏君、山下智実君、呑海友子さん、報告書編集長の川上義雄君、公開講座運営委員の井上友雄君、益田浩子さん、またVTRの記録・編集委員の和田浩一君、そして他のゼミ生諸君、1年間本当に御苦労さまでした。

（3月1日 記）



昭和60年度 卒業式

## II

### 第十二回ゼミナール合宿（春季）

## 第12回ゼミナール旅行研究発表会のお知らせ

厳冬の折、皆様御健闘のことと存じます。今年も1年間の努力の成果を発表する恒例のゼミ旅行の日程を下記の通り計画しています。

皆様の多数の御参加をお待ち申し上げます。

甲南大学文学部 谷口研究室  
昭和61年1月31日

~~~~~ 記 ~~~~~

1. 目的 : ◎研究発表及び討論会 (VTR使用)
2. 日時 : 3月7日(金)~3月9日(日)
3. 宿泊地 : 関西地区大学セミナーハウス  
神戸市北区道場町生野字ロクゴ 318-2  
☎(07956)-4-4391
4. 集合場所 : 国鉄宝塚駅 改札口 午後11時集合
5. 費用 : 15,000円 (5,000円を前金としてお送りください)
6. 携帯品 : 寝具、洗面具、その他。



7. 研究文献：哲学系 「エミール（第3編）」ルソー（岩波文庫）  
心理学系 「ユング心理学の世界」樋口和彦（創元社）  
教養系 「苦海浄土・わが水俣病」石牟礼道子（講談社）
8. 申込方法：費用は一万五千元です。うち五千元を前金として下記へ2月25日迄に申し込み用紙といっしょにお送りください。  
画590-01 堺市宮山台4丁9番23号  
脇田 博代
9. 問い合わせ：ゼミ旅行幹事  
脇田 博代 ☎0722-97-1064  
合志 由美子 ☎0798-52-5102  
谷口 文章先生 ☎07712-3-9464

----- キリトリセン -----

第12回ゼミナール旅行に前金5,000円を添えて申し込みます。

参加者氏名： \_\_\_\_\_ 印

住所： \_\_\_\_\_

電話： \_\_\_\_\_

大学名／勤務先 \_\_\_\_\_

## 解説：遊戯療法について

——箱庭療法とフィンガー・ペインティングを中心として——

谷口 文章

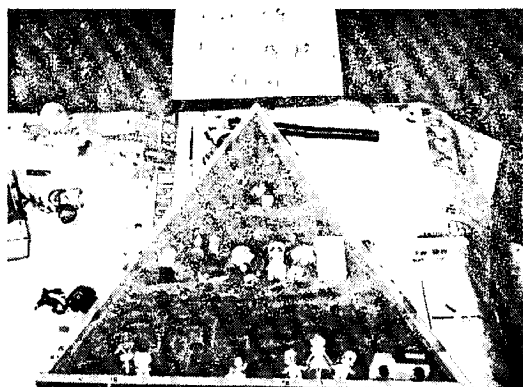
人々が思いもかけない行動をするのは、意識的な意図だけではなく、いわゆる人間の深層に存する無意識に内在する葛藤に原因があると考えられる。そのような葛藤を解消するための一つの方法として遊戯療法があり、中でも代表的な箱庭療法とフィンガー・ペインティングを私たちは、この合宿で体験した。

箱庭療法はすでに何度か紹介し体験もしてきたが、それは小宇宙である箱庭という空間で砂に直接接触して作品を造る過程において、クライアント（患者）の自己治癒力を最大限に賦活させる技法である。すなわち、現代ではあまり接することのできなくなった「砂」に直接接触することによってクライアントの治療的退行現象を促し、無意識の象徴が投影された自己の作品を客観的に観ることによって意識化され、自己治癒力が強化される。そこで自然の大宇宙に健全に接続する契機を見出すことができるのである。具体的な治療場面の展開は、箱庭療法セミナー86'（第4回）で私が発表したレジメ（本報告書別項）を参照してほしい。

ローエントフェルト(M.Lowenfeld)によって考案された箱庭は、内寸 57×72×7cmの大きさのものであるが、私たちは新しい試みとして、57cmを一辺とする正三角形や、原寸の1/4の大きさのもの、またありあわせの箱の内側に水色をぬったものを用意した。従来の箱庭の規格は決まっているが、むしろ自由な大きさの箱を選び、その中の作品を観察することによって、クライアントの心理状態はより明確に推測できるだろうと考えたのである。さらに、自己治癒力が衰退しているクライアントは大きな四角形の箱庭に対処する力がないかも知れず、サイズや形にこだわらない心の現われ方も興味深いと考えたためである。この新しい試みが成功するか否かは、今後の経過をまたねばならないであろう。



標準的作品



変形箱庭（三角形）

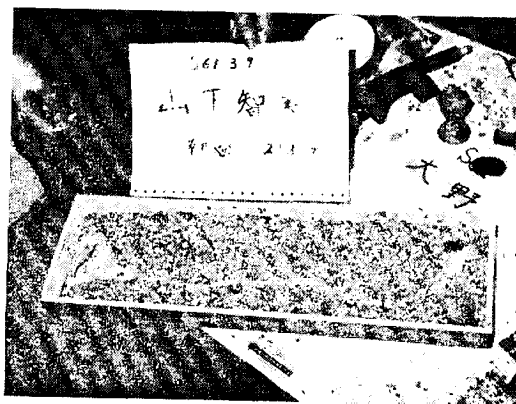
今回は全般に健全な学生が体験をしたのであるが、彼らも内的エネルギーの力動性を自覚できたのではないと思われる。

フィンガーペインティングは、「シンボルと原型研究会」（甲南大学総合研究所研究チーム）での岡田康伸先生のヒントから実習してみた。

絵画は、夢や錯誤行為のように、意識と無意識が混沌として表現される。このフィンガー・ペインティングは筆を使って描く絵とは異なり、非言語的情動の舞台が容易に展開される。なぜなら、箱庭と同じように絵の仕上がりの得手、不得手にとられることなく、端的に無意識の世界が現れるからである。方法は5人～7人ぐらいのグループで一枚の絵を指（フィンガー）で描いていくのであるが、時には協力し合い、また他の人の絵の領域を侵したりしながら、完成されていく。グループのプロセスにおける、いわばエンカウンターグループ的人間関係と、それを繋ぐ集合的無意識の躍動が、投影されることになる。個人の無意識的イメージが、単に私的なものに留まらず、共同体的感性も経験される。すなわち、個人的無意識→集合的無意識→個人的自覚というプロセスではなく、個人的無意識→個々人相互の無意識の葛藤→集合的無意識→社会における個人的自覚というプロセスが促進されると考えられる。そしてその完成した絵を鑑賞することによって、一種の内的なものの、絵画的言語化が実現され、体験者は「すがすがしい印象」を獲得することになる。

岡田先生のヒントから、出来上がった作品をハサミでそのグループのメンバーが切り刻み、新しい台紙の上にのりづけし、さらに別の作品を協力して作った。これは内的情動が生な形で発露した最初のものとは相違し、楽しいものが作られる傾向があった。一種の補償作用が働き、後半の作品はグループの統合が行なわれたと考えてよいであろう。

以上のようにして、私たちは箱庭療法やフィンガー・ペインティングによって、日常では自覚しない世界を垣間見ることができたのであった。



変形箱庭（手ごろな箱を使用して）



変形箱庭（1 / 4）

## 箱庭の感想

甲南大学 文学部 四回生 小竹 代里子

「自分の中の汚れたドロドロしたものが流れる様に洗われていく。」——  
これは、ある人の作った箱庭を見た時感じたことである。そこには、箱庭療法の際なされる制作者の能力・可能性・エネルギーの把握などの目的とは無関係の、箱という限られた小世界でありながら、しかも私達の生きている場をも包み込む広がりがあった。

私は箱庭を実際に見るのも、作るのも今回が初めてである。ここではその体験を内省と感想を交えながら書いていこうと思う。

箱庭を作る順番を待っている時、大きな貝が目にと止った。「あれを土台に富士山の様な山を作りたい。」大きいサイズの箱（それは 72×57×7センチの普通のサイズのものであったが、谷口先生は新しい試みとして、小さいものや三角形などの箱庭を用意されていた）を手に入れて、貝と砂そして砂利で作った。今思えば、他に適当なオモチャなどがなかったらと捜せば良かったとも思うが、その時は無彩色の山を作りたかった。荒廃したからではなく、落ち着いた存在感あふれるものとして。

噴火口を作る時など童心に帰っていたと思う。自分でも不思議だったのは、噴火口に砂利を入れたくなかったことである。「土台の貝を外気に触れさせたくない、覆いたい。」そう思った。噴火口を半分程埋めることで私の気持は落ち着いた。

精神状態も、作る前と後とでは変化があった。いくらか攻撃的であった心情が丸くなっていた。箱庭の効果の一つ（カタルシス作用）が実感できたわけである。

先生の分析はとても意外だった。「女性性」を指摘されたからである。意外だったというのは、指摘されて初めて気付いたのだが、私がある時作った箱庭には自分の女性性よりもむしろ男性性（アニムス）の表現の意図が少なからずあった様に思うからである。

指摘された女性性と噴火口を埋めたくなくなった感情とは何らかの関わりがあるのかもしれない。何れにせよ自分を見つめるのに良い、そして楽しい時間だった。

サイズや形の異なった箱庭を私は使わなかったのだからわからないが、もし使用していたなら 72×52×7センチの箱庭があまりにも広く知られているので「そ

れとは違うものを作っているのだ」という構えがその時生じるのではないかと思う。また、私の場合「山を作りたい」と思った時点で、小さいサイズや三角形の箱庭ではフラストレーションを生じてしまってカタルシス作用どころではなかっただろう。

今までは箱庭のサイズに疑問を持つこともなかった私であるが、三角形などの箱庭によって、既成の事実に対してもっと広く自分の目を持たねばならないと気持ちを新たにした。箱庭療法に対するこの試みは重要かつ興味深い問題であると思う。

自己表現の行き着くところは「実在の表現」であろう。冒頭で述べた私の感じは真実在に出会ったことによって生じたものと私は思う。私の意識は「箱庭」から「実在」へと移っていった。

#### I 谷口ゼミナール旅行に参加して

#### II 「ユング心理学の世界」を読んで

回生看護学院 六期生 江之口 二三代

#### 谷口ゼミナール旅行に参加して

看護学校で谷口先生の授業を受講し、心理学に対する堅苦しく、難かしいものという印象がだんだんくずれだした。そして授業を通して自分自身でも気づかなかった内面を考えさせられる事もあり哲学・心理学が興味深くなってきた。それに、看護学校では体験できない事でもあるから、このゼミ合宿に参加してみようと思った。

合宿の内容は学生の研究発表と、箱庭、フィンガーペインティングであった。研究発表では、途中からの参加のため、十分聴く事は出来なかったが、一つの課題に対する各学生の見方の違いからいろいろな考え方が出てくるものだった。発表では少し私達には難かしすぎて、他の学生の様にそれに対し質問する事が出来ず申し訳なく思うと同時に意見の交換がどんどんなされ、充実していく雰囲気は圧倒された。その雰囲気を感ずる事ができた事も、良かったと思う。箱庭やフィンガーペインティングでは、各個人の個性というものがある。頭で考えるばかりでなく、実際に自分の手を汚し、何かを自由に創作するという事は、隠れている本当の自分を表面に出せる機会である。そしてその後、何故か心が洗われたような気持ちになる。大人になれば、そういう機会が少なくなるのは残念な事だと思った。

フィンガーペインティングをした後、学生との間に全く初対面のこだわりがなくなり、又それぞれが自分自身に対し、前向きに物を考え始めたと感じた。人間は自分の事でさえよくわかっていない場合が多い。私達も看護婦として働き、患者さんのベット・サイドに立つ時、自らの事でさえよくわかっていないのに、その人の事をケアしようとしている。「自分を好きにならなければ、人を愛する事はできない」という様に、自分を知ろうという努力もせずに、人の事など、とうてい理解する事などできるはずがないと思う。こだわりのない仲間というものも、そういうところからできてくるのではないかと思った。それが、箱庭療法やフィンガーペインティングを体験して得たことだった。

「ユング心理学の世界」(樋口 和房著)を読んで

ゼミ合宿に参加した後、やはり心理学に対する私の興味は変らなかつた。しかし、私は、単に人間の心理というものが、行動や、表情、会話、夢などから分析していくと、新しい発見ができるということだけでなく、心の本質についても興味がある。心理学を専門的に研究するなら、そういった事から始めなければならぬのだろうが、この本を読んでも、意識や、無意識、自我、自己といった関係がユングに十分なじんでいないせいか、今一つわかりづらいと感じた。しかし、基本概念として出てくる人間の「ペルソナ」というものが、年齢を重ねていくごとに、はっきりしていくこと、そしてそれが、一人のパーソナリティへと発展していくことは、一応理解できる。又、コンプレックスを、全く持たない人はいないと思うが、それがどこから生じてくるのかがはっきり自分でわかっている人もいれば、他方、無自覚に感じている人も多いと思う。人間の無意識の中で、何故それがコンプレックスというこだわりとして感じられるのか。自分でも不思議と思う場合が多い。人から見れば、たいして問題でもないのに、自分にとってはコンプレックスとしてのこだわりが生じて来るという事がままある。

他に夢分析では、私自身よく夢を見る事が多い為、興味があつた。睡眠中は無意識の部分が現われてくるという。自分ではそれ程気にとめていないつもりであつたことも、夢に出てくると、やはり気にしていたのだろうかと思返すことがある。無意識が変装して意識に変わるということであろう。

そして、夢の論理を他の分野にあてはめると、童話の深層心理では、大人の心性が子供の心性となって現われ活躍する。大人の自我防衛がはずれ、忘れさられ、深層に埋もれていた子供の自由奔放な心が躍動する世界が童話の世界で

あろう。大変興味深く思った。

小学生の頃、よく自分で、童話のようなものを書いた。最近それを読み返す事があったのだが、その頃なにげなく書いていたことが実は家族、両親に対する、理想像というか希望の様なものを含んでいたと思うし、自分を認めてくれる人を探していた所があったのではないかなどと、感じる所がある。それは自分が書いたものを、自分なりに解釈したのだけれど、実際今まで私はグリムやアンデルセンなどの童話を、それ程、意味あるものとしてとらえていなかった。それだけに、分析によって、こんなにおもしろいものが解釈できるのかと思った。

他にもこの本の中で、意外とわかりやすく書かれている所もあったのだが、やはり理解に苦しむ所が多くあった。そのの所を、もっと、わかる様になれば、心理学というものが今以上に興味深くなってゆくだらうと思う。この本を一度読んだだけであるが、もう一度じっくり読み返してみようかと思っている。

### ユング的「自己」について

甲南大学 文学部 三回生 山田 美紀

「自己」というのは、ユング流に言うと、意識と無意識を含めた、人格の全体性の中心である。自我が意識の中心であるのに対し、自己は自我とともに無意識をも含み、単なる意識と比較できない無限の広がりをもって両者の中心に位置している。

ところで、ある個人が心的な分裂や不統合を経験している際に、それを統合しようとする心の内部の働きの現われとして箱庭などでは、マンダラ模様が生じることが多い。このようなマンダラの象徴が生じることによって意識的には分裂の危機を感じ、あるいは強い不統合性を感じて解決策もなく困っている人が、心の平静を得て新たな統合性へと志向していく個性化の過程を見ると、人間の心の内部にある全体性と統合性へ向かう働きの存在、自己治癒の力の存在を感ぜずにはおれない。つまり、それは自然の側からの自己治癒力の企てであり、意識的な反省からではなく、自己の本質的な働きから生じてきたものであると考えられる。

神経症など苦悩が現われるとき、意識がこの意味を認めないで抑圧し、排除しようとする、無意識の補償作用が働いて、夢や妄想などになって意識に侵入することがある。無意識はそれ自身「自律的」「相補的」なので、意識を含めてバランスをとろうとする。そこに元型的象徴として、マンダラ模様が生じるのである。

ユングによると、人間の中に働く魂という生ける真理は、初源の「一」という世界から、シャドーの発生による「二」の世界に対立が生ずることによって入り、それが、アニマ、アニムスとシャドーのからみあいでの動的な「三」の世界へと次第に入りこんでいく。そして「四」の象徴の完成へと導かれる。マンダラは、四のシンボリズムがみられ、ユングの心理機能の四タイプなどもその例であって、人格の全体性を表示しようとしている。幾何学的要素を内含しているマンダラには数のシンボリズムがあり内的世界を形成している。内的宇宙というのは決してでたらめな混沌ではなく、いわば神の意志によって正確に運行されていると考えられるのである。

人間は、自己を完全に実現すべく、現実を吟味しながら、意識を次第に拡大し、影を統合し、アニマ、アニムスの段階を通過して、完全な自己が成就した状態に至るのである。しかしながら、その自己実現の過程は、できることならばさげたいと感じられるほどの苦難の道である。それは、自分の劣等な部分と直面し、それを統合することであり、内的な世界だけで追求されることは考えられず、内的な発展は外的な関係とも関連づけられていく。つまり、自己実現ということは、自分だけのことではなく、他の人々とのつながりにおいて有することができるのである。そして、外界との接触を失うことなく、しかも内界に対しても窓を開くこと、近代的な文明を消化しながら、古い暗い心の部分とのつながりをもととしなければならないのである。

現代の近代化された文明の中で自己を見失わず、疎外感を味わわないでいることはむづかしいと思う。文明の発達による危機はあらゆる形で出現している。緑が失われ公害がおきることは身体的側面だけでなく精神的な面も脅している。もし、我々が公害や戦争がおきても何も感じなくなったらどうなるだろう。その時にこそ自我だけでなくそれを支えている自己をも強化することは大切だと思ふ。もしうまく成功すれば、現代文明を生きる我々は自我と自己との相互的な対決・和解を通じて、自己実現の道を歩むことができるのではないだろうか。



## ゼミ合宿に参加して

甲南大学 法学部 一回生 山下 智実

今回、初めてゼミ合宿に参加して、大学内外のいろいろな人の意見や考えなどが聞けたことは、とてもいい経験だったと思います。

また、フィンガーペインティング、箱庭療法などを経験できよかったです。フィンガーペインティングでは2つのグループに参加しましたが、そのグループの構成メンバーの個性がはっきりと現われていたと思います。1つのグループにはわりとおとなしい人が集まって、女性が多かったためか出来上がった絵はきれいでおとなしく、普通の絵でした。しかし、もう1つのグループでは構成メンバーが全員男性で、個性の強い人の集まりだったので、前回とはかなり違ったものになりました。たとえば、ある人がきれいな絵をかいていたら、それを汚ない色で滅茶苦茶にしてしまう人や、つめで画用紙をひっかく人などで、絵の具を2ケースも使ってしまいました。その結果、完成した絵は画用紙ばかり重く、何を描いてあるのかよくわかりませんでした。他のグループのフィンガーペインティングを見ても思ったのですが、それぞれのグループによって個性がはっきり現われるものだなと思いました。

箱庭療法で、私が使った箱庭は小さな箱庭で、土のかわりに小石が入っていたので、何を作るにも少しやりにくかったです。でも、初めは何を作ろうかと考えながら、作っていましたが、だんだん作業を進めるうちに夢中になって作っていたような気がしました。その結果、完成した箱庭は簡素なものでした。先生に「とても、おとなしい作品だ」といわれました。他の人が作った作品を見て、先生が「この作品からは……が感じられる」とかおっしゃっているのを聞いて、その作品を作った人を見てみると「なるほど、こんな性格だな」と思うこともありましたが、その人の意外なところも出ていたような気がします。でも、今度箱庭をするときは大きな箱庭で、土の入ったものでしたいです。

今回のゼミ合宿では心理学的、哲学的ないろいろな物の見方、考え方があるのだなと思いました。すこし内容が難しいなと思うところもありましたが、ゼミ合宿に参加出来、とても勉強になりました。

## ゼミ合宿に参加して

回生看護学院 六回生 川口 広子

私は、今回初めて、ゼミ合宿に参加しました。回生看護学院の学生で参加したのは私達が初めてです。学院での哲学、心理学の講義は、谷口先生の受け持ちです。哲学の講義も楽しく、興味を持っていたし、心理学の講義が始まったところで、ゼミ合宿とはどんな事をするのだろうという期待と、心理学の理解につながるのではという思いに押され、勇気を出して参加する事にしました。

学院の行事のため二日目より参加したのですが、今までにこの様な機会はなく、貴重な体験であったと思います。

他の参加者の方々の研究発表、ビデオを通して水俣病が社会に及ぼした影響、その結果に対して考えられるべき対策についてのグループ討議、谷口先生のお話等がありましたが、私はすべて受動的な態度で終わってしまった。しかし皆さんの積極的で真剣な様子に感動しました。看護者である私は、心理療法に適用される箱庭療法に関心を持ちました。当日、実習する事はできなかったのですが、学院の授業ですでに実習していたのです。その授業中、見学している間は漠然と、箱庭というのは、砂の上にオモチャを置き、自分のイメージを単に表現するもので、どこに心理療法を含むのだろうかなどと考えていました。けれども実際に体験して自分で土にふれて自分の世界を土やオモチャで作上げていく楽しさを味わい知らず知らずのうちに夢中になってしまいました。作っていく過程の中に抑圧されていたものが表れ、心の中を形どっていく、これがカタルシス効果なのでしょう。

無意識的な象徴の投影である遊戯療法、まさにそう思う事ができました。先生が土にふれる事に意味があると言われていましたが、自分なりに、無意識の世界を形どり、客観的にとらえる事ができたと思います。先生に箱庭から推測される心理状態のコメントを頂きました。怖さと興味とが一体になった様な気持ちで聞いていました。私はオモチャは使用せず、砂と木だけで作り上げた素朴なものだったのでみんな、「びっくりしたわ」等と感想をもらっていました。今でもやはりあの様な物を作るだろうかと考えてみても、やはりやってみないと分からないと思います。先生と治療者のコミュニケーションの中で生まれる信頼関係も一つの効果ではないでしょうか。自己の心の動きが行動の一つ一つである事を改めて認識しました。子供の頃砂で、現実の物にたとえて作るなどして遊んでいましたが今は全く土にふれる機会がありません。土が人間の心の

底辺、土台の様なものと、つまり人間の深層心理と深いつながりを持つ事が箱庭を体験してみて分かりました。

次に水俣病が及ぼした社会問題についてですが、途中参加のためこのグループ討議には参加できず、谷口先生とみなさんの討議から考える事しかできませんでした。

それは文明のために犠牲となった水俣病患者の人々の話だったようです。その原因は大量生産へつなげるため、労力の削減、質より量を考える利益第一主義にあると思われます。社会的傾向として必然的に生じる問題だったのかもしれませんが。生産者の利益追求の方法、さらに商品が手許に届くまでの流通機構等に消費者は目を向け、関心を持つ様働きかけねばならないでしょう。

自然が破壊されてから気付いた時には、もう手遅れなのです。科学的真理に捕われやすい私達ですが、実は自然の営みの中から抽象されて科学的考え方が生じてくる事を忘れてはならないと思います。

ゼミ合宿に参加して、みなさんと同じ時間を過ごし、いろいろな事を学びました。それは自己実現への第一歩になったのではないかと思います。そしてこれからは、いろいろな出来事を通して自己探求していこうと思います。二日目の夜にみなさんとお話する機会があったのですが、協調性に欠ける私はみなさんに十分に近づく事が出来ませんでした。機会があれば勇気を出しみなさんの輪の中に入りたいと思っています。

#### ゼミに参加して

回生看護学院 六期生 辰巳 珠海

私達看護学生にとって、ゼミ合宿は縁遠いもので、ゼミ合宿とはどんなものだろうという興味を持ち、参加させていただいた。いろいろな方達の発表を聞かせてもらい、理解しにくい部分などもあったが、それなりに勉強になったと思う。哲学や心理学を専門に研究されている方達ばかりで、何もわからずにボーッと聞いている事もあった。しかし、いい体験になったのではないと思う。

3日間のゼミ合宿だったが、私達は途中から参加して中途半端なような気がし、残念であった。その短い参加期間の中でも、箱庭療法の見学・フィンガー

ペインティングの実施などが体験できた。私は箱庭療法を体験できなかったが、いろいろな人達の箱庭を見る事ができた。本当に、人それぞれの箱庭がありみんな個性的であった。自分の感情や心理状態、その人の性格などが表われ、先生の分析を聞く事も勉強になった。後に、私達も先生の心理学の授業で箱庭療法を経験する事になった。実習してみて感じたことは、心理状態を分析し、また治療することだけでなく、自分の手で砂に触れ、箱庭を行なっている間は一瞬でも何もかも忘れ熱中する事が理解できた。それが現代の人間にとって大切なのではないかと思う。毎日忙しい中で、ギスギスとした干からびた心を忘れさせてくれて、童心に戻るような気がした。

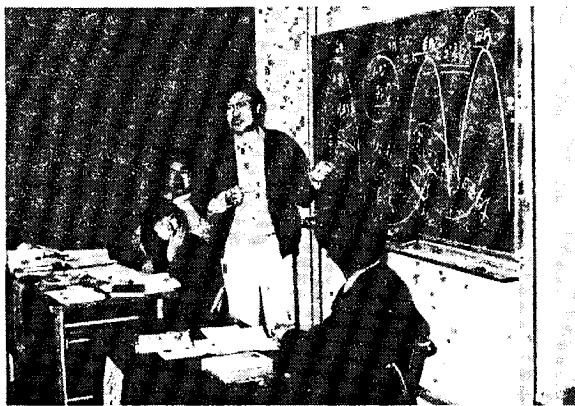
またフィンガーペインティングも初めて体験する事ができた。何人かのグループを作り、画用紙の上に自分の指で好きなように絵の具を用いて描いてゆく方法であった。これもまた絵の具が指に直接に触れ、その冷たい感触と共に画用紙に指を自然と動かしていた。最初は、グループ員が好き勝手に指を運び、グチャグチャになって、色彩がどろろという問題ではなく、とにかくメチャムチャになってしまった。本当に、こんなものでいいのだろうかと不安に思った。あとは画用紙を乾燥させ、はさみでもって好きなような形に切り、再び画用紙にはりつけてゆく作業だった。出来上がったものは、他のグループに比べて少々、雑な所もあり、性格が表れていると思った。しかし、この一連の作業の中で、箱庭療法と同様に、何もかも忘れて無心に何事かを行なう事の大切さを知ったような気がした。絵の具が、直接に指に触れたあの感触を今も覚えている。次回、機会があればもう一度、実施してみたいと思っている。

ゼミ合宿の心理実習についての感想を述べてきたが、次に「苦海浄土一わが水俣病一」（石牟礼道子著）を読んだ感想について書いてゆきたいと思う。

公害という言葉は、誰が作ったのか？まさしく人間が人間に加えた害である。加害者でもあり、被害者でもある人間自身である。哲学の講義の中でも、「海よ母よ子供らよ」というビデオを観賞した。今まで、水俣病という公害を代表する病気だというぐらいの認識でしかなく、漠然とした知識しか持っていなかった。しかしビデオを見て、水俣病の症状を知りショックだった。ねこが狂ったように動きまわる姿、それが人間にまで及ぶのである。今まで、このような本を読む前やビデオを見る前は、自分には関係のない事だと思っていた。しかし、水俣病を知った今、自分は今から何をすればよいかを考えてしまう。

いうまでもなく水俣病だけでなく、環境汚染から生じる公害問題は他にも色々あるだろう。人間には誰しも人間らしく生きる権利を持っている。人間らし

くとは、どういう事なのか？健康で毎日を平凡でいいから生きる事が、人間にとって一番幸福なのかもしれない。でも、人間は欲望の多い動物だから、限りなく欲望を追い続けるのだと思う。人間が人間として生まれた以上、誰もが人間らしく生きれるように、少しでも改善してゆくことが大切だ。私達健康人が、水俣病について、もっともっと知識を深め、世の中の人に知らせてゆく義務があるのではないかと思った。



合宿風景



質疑応答

## 水俣病について考える

竜谷大学 文学部 二回生 小泉 さより

水俣病は、今なお解決されていない。――

私は、今回のゼミ旅行を前にして石牟礼道子氏の『苦海浄土』を初めて読んだ。これは決して問題告発の書ではなく、患者自身の心の叫びの書であった。私はこれによって大いに衝撃を受け、ここで水俣病について云々することをたいへん恥かしく感じた。というのは、自分自身が日頃環境問題についてあまりにも無関心であり、この瞬間まで自らの問題として強く感じる事がなかったからである。しかし、これからの課題として水俣病について考えていこうと思う。

人間が大きな恩恵を受けている海をけがし、人間の命を、魂を、奪ってしまった水俣病。チッソの町、水俣は利潤を追求するあまりに尊い命を……。水俣病発生以来、その患者たちは病苦、経済的不自由、そしてチッソに加担した県や市民からの実態的・心理的迫害を受け、孤立的な立場にいるという。その背後には、患者と行政との厚い壁や市の死活問題などが見られる。また、その責任は単に実際の加害者であるチッソだけにあるとは言い難く、政府も発生から12年後に公害病として認定していることからその被害拡大や救済の責任を問われねばならない。さらに、認定において行政の基準のきびしさや狭さから患者を切り捨てている現状には早急な改革がなされなければならない。たとえ水俣病には多面的な解決への取り組みが必要であり、それははなはだ困難な問題であるとしても、そのような立場を患者に与えているところに水俣病の本当の苦しみを味わってはいない、当事者ではない私たちの無責任な態度が見られると思う。やはり私たち一人一人が自らの心に痛みを感じなければ、その解決をみることは困難である。そして、日本の経済・文化的発展のうらでこのような問題が残存しているということを国民として恥ずかしく思わねばならないと考える。

このように、公害の原点ともいわれる水俣病は、単に一地域一企業の問題ではないということを痛切に感じたのである。これは明らかに人災であり、その被害者たる患者にとって当時の環境のもとでは当然帰結する結果であった。しかし、彼らにとってそれは到底予期せぬ事実であって、拒む余地のない事実であった。私たちの日常生活には、このような危険が潜んでいて、それらがいつ、どのような形で現われるかわからない。誰もが、その加害者となる、あるいはその被害者となり得る可能性をもっているということを自覚しなければならぬのである。私が『苦海浄土』を通じて水俣病について考えていくうえで最も

驚いたのは胎児性水俣病の存在である。これらの子どもたちはこの世に生をうける前に既にその苦しみをうけていたのである。健康のありがたみを一度も味わうことなく……。その上その事実を認められずに生を奮われてしまった子どもたちさえいるのである。そのことを知ることによって、私は、平凡な日常に流されることに甘んじ、過ぎ去った歴史的事実としてとらえていた水俣病が実は未だ解決されていなかったこと、さらにその事実を無関心にとらえすぎていることに対して自責の念にかられずにはいられない。そして、現在かかえている種々の問題の中で特に環境問題について今後認識を深めていこうと思う。

この世に生をうけた一人として。

今、我々は何をすべきか

「苦海浄土」(石牟礼道子著)を読んで

甲南大学 理学部 一回生 大内 雅勝

「“水俣病”とは？」この質問を私を含めた今の若者に、投げかけられたならば、「高校の社会科の教科書に載っていた公害病の名前だ。」としか答えられないだろう。今から三十年余り前に起った水俣病は、歴史の一コマに過ぎないほど、我々の中で風化してしまっているのである。平和な漁村を襲った水俣病の本当の苦しみを、この「苦海浄土」を読むことで、私は、いくらか知ることができ、他人事ではないと、関心を持つ様になった。

水俣病とは、昭和二十九年から熊本県水俣地方において発生した四肢の痙性失調性麻痺と言語障害を主症状とする疾患で、原因は、チッソ水俣工場が排出した有機水銀に侵された魚介類を大量に摂取したことによる、有機水銀中毒である。日の前に落したタバコが拾えない、立ち止まろうとしても足が勝手に動き出す。その症状の悲惨さは筆舌に尽くせないものであるが、その上に彼らを苦しめたのは、村八分という精神的苦痛であった。原因もわからぬまま伝染病とされてしまったのだ。又、チッソ水俣工場に対して抗議すれば多くの従業員が彼らに白い眼を向けた。そしてやっと重い腰をあげた行政が行った事といえば、認定患者という、勝手につくり上げた基準で患者を色分けするだけのことであった。認定されなかった者は、補償を受ける道を閉ざされてしまったのだ。そして彼らは、働く場所である、八代の海も奪われ、働くための健全な身体も奪われ、世間から追い出されてしまったのである。二つの現実、我々は、過去のこととして背を向けてはならないと思う。まだ、水俣病訴訟は終わってないのだ。

発生後三十年、水俣病は新しい局面を迎えている。それは水俣第二世代と呼ばれている胎児性水俣病の患者が、成人する様になったことである。外に排泄できない胎児は、母の体内に居る間に有機水銀中毒となり、生まれながらにして水俣病に侵されていた。生活環境が健全でなければ、母体が健全でなくなる。母体こそ唯一の生活環境である胎児は何の防衛もできずに生まれてくるしかない。つまり彼らは、環境破壊が我々の将来の世代を健全に世に送り出すことができないということの、まさに生き証人なのである。その彼らが今、生きていくために働く場所も無く、そして教育を受けようと思っても満足に受ける事さえできないのである。それも我々と同じ世代の若者が……

今、私達は、水俣病を教訓に何を考え、どのようにしなければならぬのだろうか？

今の日本の企業は利潤追求のために、環境に対するは二の次である。しかし、私も卒業後企業に就職し、結婚して子供を養育する必要に迫られたなら、諸々の公害工場の従業員のように、やはり企業の方針に従って働かなければならぬだろう。しかし、子供たちが安心して暮らしていけない環境をつくりだしてしまったならば、それは本末転倒である。ではどうすべきか？非常に難しい問題ではあるが、まず我々は現実を知らなければならない。自分さえ直接的な被害を受けなければ、現実には背を向けていけばよいとは思えない。我々の豊かな環境がどんどん破壊され、誰もが水俣病のような、悲惨な出来事にまきこまれても不思議でない時が、すぐそばにまで来ているのだ。そして、このような現実を知った人々は、他の人々に訴えなければならないのではないかと思う。より多くの人々が知り、考え方の流れを変えることが出来るかもしれないのだから。がむしゃらに利潤を追求したり、科学技術を進歩させたりすることに知恵を使うだけでなく、我々が生きていく上で、我々が何をしなければならぬかを考える時が来たと思う。



ディスカッション



## ゼミ合宿に参加して

甲南大学 理学部 一回生 呑海 友子

理学部的な立場からのみ物事を考えるのではなく、色々な角度から見れるようになりたいと思い哲学を選択しました。しかし VTRを見た後の討論で、私の考えてもみなかったようなことを他の人は一生懸命考えていたり、私には賛成できない意見が出たりして、まだこんなにも色々な考え方、感じ方があったのかと思いました。なかなか討論をするという機会が少なくなっている今日此頃、少人数制のためもあり自分の意見も言え、それについての他人の意見も聞けて楽しい体験でした。ただ時間が一本の VTRにつき三十分程度しかなく、もっと言いたかったり、聞きたかったことが中途半端のままになってしまったのが残念でした。

「苦海浄土」(石牟礼道子著)を読んで感じたことはありましたが、先生から発表者にされた質問にはすごく考えさせられました。そして何となく読んでいて、どうしても他人事としか受けとれなかったことが、自分と隣り合わせの事だったのだとつくづく感じました。又どうして自分は他人まかせだったのだろう、もっと自分にもできる事はないかと思いました。考えつかずくやしい思いをしています。これからも目を背けたくなるような色々なことも見て、少しでも自分が役に立つよう、せめてできなくてもそのことを忘れないようにしていきたいと思います。

私は有機農業についてたいへん興味があります。又農薬のかけすぎや野菜の形の規格などについて消費者がもっと知識をつけないといけないと思います。農薬のかけすぎについても農家の方で考えておられる方もいるようですが、実現するのは難しいようです。私は沢山の消費者に私達の食生活がたいへん汚染されていることをわかってもらいたいのです。そして生協のように安心して食べれる店がもっと沢山あるようになってほしいのです。でも、そのことを言うと先生に「色々政治がらみがあってなかなかうまくいかない」と聞いてショックでした。政治は国民のためにあるのに…。今まではただ私の理想をしつかりとさせるだけの日々でしたが、今度からは、それをどのように現実にかせるかが問題となってきた訳です。何から手をつけていいのかいっこうにわかりませんが、色々なことを試してみようと思っております。

## 学ぶことから行動へ

甲南大学 理学部 三回生 飯塚 陽子

突然、来春からはこのゼミに参加してみようということを決め、まあ、まずは顔あわせ程度にと軽く考えてゼミ合宿とは何をする所なのかもよくわからないままフラフラと飛び込み、来てみて、思わずみんなの真剣さに驚きました。話は聞けても質問もできず、ただうなずいてしまうだけで終わる自分が情けなくなりました。

今、ふり返ってみて何が印象的なのかと、考えてみますと、確かに、初めて経験した箱庭はどことなく楽しく、どことなく無気味で、妙に心に残っています。

でも、今の私には、あの“奇形ザルは警告する”のビデオの後、みんなで討論していた時の自分がなんとなく少し空しく思い出されてしまいます。なぜ空しく感じてしまうのかといいますと、初めてこういう事実を知ったなら、自分の中に確かに大きな進歩を見出せると思います。でも、何度か、一般の哲学の授業等で聞いて知っていた私には、特別新たな驚きもなく（いくつかはありましたが……）ただ、このままではいけないとまたくり返し強く思うだけでした。確かに、意識するのとしないのは格段の差があり、個人々々の意識の問題が結局のところ一番重要だろうとも思います。しかし、このままではいけない、何かしなくては……と、あの時強く感じていた私なのに、結局、何もできないままで自分の無能力さ、小ささを存分に知る羽目に陥ってしまいました。そればかりか、自分の所で生産したりんごは食べないというりんご農園の農夫の人に怒りを覚えたはずの私なのに自分もその立場に置かれると似た様な事をするんだらうと、ふと流されてしまってるのです。環境破壊はいけない、緑を守りましょうと言いつつ紙を無駄に使ったり、合成保存料や着色料はいけないといいつつ、そういった物が入ってるアイスクリームやジュースなどをうれしそうに食べている。農薬はいやだ、といいつつ虫食いのあるものは避けたいと思う。そんな風に考えていくと、本当にえらそうにいえないなあつくづく感じてしまいます。それでもやっぱり、農薬問題にしても環境破壊についても、このままではいけないと思ってしまうのです。でも私は、思うだけで何もできないままです。しかし、本当に私は何もできないままだったらうかと反省してみますと、確かに小さい事ではあるけれども、いくら見かけが良くても、着色料のついた物とついていない物とではついてない物を選ぶようになりました。そしてこれからも、このようにずっと問題意識をもち続けていけば、少し

ずつでも変わっていくと思います。本当にいい物を選べる目に変えていくには、しっかりと事実を知った上で危機意識を持ち続ける、この心にかかっていると思います。だから、小さいけれど私にできる事は、常に問題意識をもち、それを生活の中に取り入れていく事と、一人でも多くの人にこの事実を知らせる事だと思います。

私たちが、今このような自覚をしたという事は、本当に大きな意味を持ちました。このような問題は、私たちだけでなく、次代にも続く問題である事を常に頭に入れて行動していかななくてはならないと痛切に感じます。

### ゼミ合宿で得たもの

甲南大学 文学部 三回生 合志 山美子

第十二回ゼミナール合宿において、私は思い知らされた。自分が如何に、心で感じたことを言葉で表現する訓練ができていないかということ。

合宿中、何本かビデオを見せていただいたが、一本のビデオを見終わり、画面が砂嵐のようになったその瞬間にいつも、空な眼と、開いたままの口と、真白な頭の中とをかかえ込んだ私が出た。——この後、また討論会だ。嫌だなあ。

ビデオを見て、何も感じないわけではないのだが、自分が何をどう感じたのかよくわからない。頭の中に感想のかけらが散乱して收拾がつかない。討論会では、とにかく最初は何も言えないので、「先の方と同じです。」とごまかして、とにかく人の話を聞いた。聞いているうちに「あっ」と思う言葉に出会うことがある。一つ——また一つ——やがて、私の頭の中にぽっかりあいた穴が少しずつ少しずつ埋まってゆく。おそろおそろ自分の意見を述べてみる。まだ足元が緩く、けつまづくこともあった。他の人たちが、ずっと高次の話をしておられるのに、聞くだけでおろおろしていることもあった。ときには強くなりなづき、ときには、みんな自分とあまり歳もかわらない人ばかりなのに、何故そんなに深く読みとることができるのだろう、などともうろうと考えながら、時間が過ぎ、私は私なりに討論会を渡り終えた。

討論会は私にとって恐怖と緊迫の場であったが、一つだけうれしいこともあった。それは、「続・奇形ザルは警告する」のビデオの後の討論会のときである。自慢気に笑をたたえて「自分は食生活に水準を設けている。」と言った人

がいた。何かかと思っただけ聞いてみると、彼は、とにかく、合成保存料、合成着色料、発色剤、乳化剤等々の添加物が含有されている食品や、その他自分が有害だろうと認めることのできる食品は口にしないということであった。私はそれを聞いてとてもうれしくなった。「自分と同じ人がいた！」まるで異国の地で、友人と出会ったかのような気持ちになった。そして、もっと消費者が商品に対する知識を深めて、彼が「水準」と表現したものを、少しでもいいから、より多くの人たちに持って欲しいと強く願わずにはいられなかった。

私はこの合宿において、普段仲間内でしか通用しない、多元的状况を一挙に処理してしまうような言葉を使い過ぎ、会話における表現力が衰えてしまっているのではないかと反省させられるとともに、これまで自分が、学んだことを少しでも実践にうつそうと努力してきたことに対して、新たな確信を得ることができた。

## 利己的個人主義と水俣社会

——石牟礼道子「苦海浄土」より——

甲南大学 理学部 三回生 藤田 清士

### 序文

「苦海浄土」を執筆した石牟礼道子氏は、その現場に身を置き、「あねさん」と呼ばれて人々から親しまれているが、その為、彼女の行動自体が全て公害告発の運動イメージとなり、健全な社会を回復しようとしながら、かえって現実の自己保全重視の社会によって、彼女の執筆活動に影響をきたすという事態まで生じた。

この様な公害の社会的摩擦は、私企業における利己主義のみを打ち出した悪しき個人主義の増長によるものと考えられる。以下には、その事を中心として、「水俣病」を生み出した人間社会を考えてゆきたい。

### 本文

急速な経済、産業発展のつけとして、さまざまな公害病が、昭和25年から45年にかけての20年間に表面化した。水俣病（熊本県）、第二水俣病（新潟県）イタイイタイ病（富山県）等がそれである。

人々はこの事態にどのように対処していったのであろうか。金銭感覚に鋭敏な工場幹部にとっても、体裁だけを繕った役人にとっても、これらの出来事は「他人事」でしかない。以前に、イタイイタイ病の病源を解明した医者が、「

私は一介の町医者です。」という歌い文句を揚げながらマスコミに便乗している姿をある本で読んだことがある。どの公害病の場合も、取り巻く「社会」に属する人達のエゴイズムは共通しているのである。このような社会の中で、生と死の境をさまよう患者自身やその家族は、心身共に追いつめられていき、ある人は狂信的宗教家となったり、人間不信に陥った人も続出した。また、水俣病という限界状況下であって、「哲学」せざるを得ない人間の姿も、「苦海浄土」に描れていた。それは、短絡的に性善説や性悪説のどちらを支持するかという論理的過程をたどるのではなく、むしろ真理を求めようとする態度に近いように思われた。

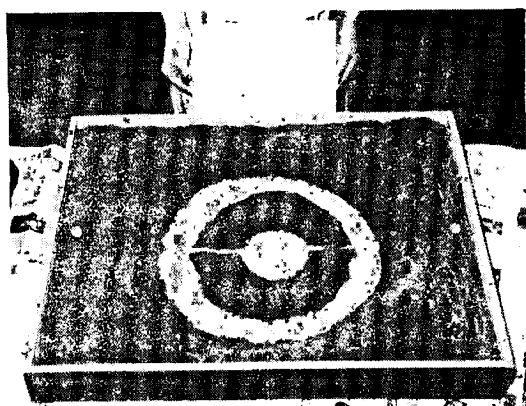
ところで、行政の抜本改革がすぐに水俣病などの公害対策の改革につながるものであろうか。残念ながら現実にはそれ程容易でない。というのも、これは社会構造のエゴイズム、ひいては個人のエゴイズムに起因しているからである。つまり、個人のエゴイズムを抑制できない社会構造——個人の自己保存の原理が投影している私企業の構造——が結局は一市民としての個人に戻ってくるといふ際限の悪循環が行われているからである。フランスの文化人類学者レヴィ＝ストロースは、「日本人は一般に言われているより、もっと個人主義者だ。」と述べていたが、欧米の確立された個人主義と異なった、個人のエゴイズムを過剰に黙認するという、悪しき個人主義を日本社会は続けてきたと言えるであろう。「水俣病は文明と、人間の原存在の意味への問いである。」と言われるように、エゴイズムとしての個人主義による人間破壊について、我々は改めて問い直さなければならない状況に立たされているのである。

## 結論

水俣病の町は著者自身が書いている通り、「地域社会を結びつけているわが農漁村共同体」として、その存在が牧歌的で前近代的な世界であると考えられ得る為、問題が叙情的で地域的なものに留まり、「苦海浄土」による告発が単なる一地域の現象で終わってしまい、我々自身の問題として受け取られない可能性がある。しかし、我々の生命が依存する地域的共同体が直面する、この長期的問題は単純な反近代主義の地盤で対処しても解決しきれず、水俣を取り巻く社会構造の全ぼうと、それを構成している官民の立場とに内在している利己的個人主義の動きを解明する事が、現在、我々にできる最大限の考察であると思うのである。



箱庭作品の解説



マンダラ的象徴



個性的な作品



内奥のエネルギー



フィンガーペインティングの風景



フィンガーペインティングの後半の作品

### III

## 第十三回ゼミナール合宿（夏季）

### 第13回ゼミナール旅行研究発表会のお知らせ

木々の緑も深まり暑さが感じられるようになりましたが、皆様いかが御過ごしでしょうか。今年の夏もまた、谷口研究室ではゼミナール旅行を下記の通り計画しております。奇形ザル問題・日本ザルの生態・チンパンジーと人工言語をテーマに過去、淡路島モンキーセンター・愛知県犬山市モンキーセンター・京大霊長類研究所の訪問を行なってきましたが、さらに理解を深めるために今年度は好広真一先生（龍谷大学助教授）に小豆島（寒霞溪～銚子溪）の現場にて、観察指導（数・個体識別を学び、年齢構成・奇形個体の枚挙等を行う。）及びレクチュアをお願いし、また討論会などを行なう予定です。奮って御参加ください。

甲南大学文学部 谷口研究室  
昭和62年1月26日

~~~~~ 記 ~~~~~

日時 : 集合 7月12日(土) 甲南大学正門前 8:00  
神戸港中突堤 9:00  
7月14日(月) 姫路 19:00

携帯品 : 着替、運動靴、常備薬、学生証、参加残金、保険証のコピー  
洗面具、水着、双眼鏡、記録ノート、その他

研修先 : 小豆島 寒霞溪から銚子溪

参考文献 : ニホンザル奇形問題研究会編「奇形ザル」 (汐文社)  
和田一男「野生日本ザルの世界」 (講談社ブルーバックス)  
アライン・アモン「チンパンジーの言語学習」 (玉川選書)  
華山謙「環境政策を考える」 (岩波新書)  
ランガー「シンボルの哲学」 “第三章サインとシンボルの論理”  
(岩波)



スケジュール：7月12日（土）夜、卒論中間報告を行ない、13日、14日は観察及び討論を行なう予定。

宿泊地：香川県土庄町田井 民宿ひとみ荘  
☎ 0879-67-2422 （12日、13日とも同民宿）

申し込み方法：費用は二万八千円です。うち8千円を前金として6月30日までに申し込み書といっしょにお送り下さい。  
〒659 芦屋市浜芦屋町 6-22 岩田 哲郎

問い合わせ：ゼミ旅行幹事  
岩田哲郎 ☎0797-22-2009  
小谷英子 ☎06-831-0630  
谷口文章先生 ☎07712-3-9464

~~~~~（キリトリ）~~~~~

申し込み用紙

第13回ゼミナール研修旅行に、前金8千円を添えて申し込みます。

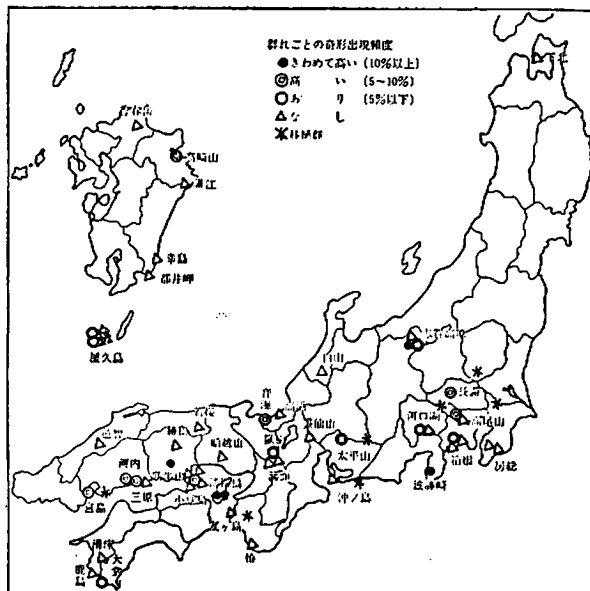
氏名  
住所  
電話  
大学名・勤務先

環境汚染・破壊の問題は、一般教養の私の哲学における実践的課題であり、それを実際に「奇形ザル」に焦点を絞って活動したのは昭和58年の淡路島モンキーセンターを訪れたのが最初でした。その経過は、淡路島自然史博物館協会の会報第4号「いのちと自然」（1986年12月1日本報告書の別項参照）に拙稿を記載しましたので省略しますが、その継続として今年の夏7月12～14日にかけて小豆島のサルを観察・調査してきましたので、ここに御報告します。

今回は、ただ奇形ザルを観察して精神的衝撃を受けて、現実の社会に対する反省を促す哲学的価値転換を狙うだけでなく、専門に研究をされておられる好広真一先生（龍谷大学助教授・生態学）に御協力をお願いして、観察眼を養い調査するという科学的な手段を選びました。好広先生は、「奇形ザル—野猿公苑からの報告—」（汐文社）の編集等もされ、永年奇形ザル問題を追求されてきました。今回私たちは、スライドを使用した講演討論による奇形ザルについての現在の位置づけや観察・調査の方法等を学びました。単なる書物の知識や、また訓練を受けていない観察だけからは得られない、貴重な体験をすることができました。

ここ数年、各地の奇形ザルの発生率が低下しているらしく、小豆島でも新生児には奇形は観察されませんでした。しかし、それは何によるのか。例えば餌の種類を変えたり多くしたりすることで、一時的に現象が潜伏しているのかもしれない。人間と同じ食べ物を摂りながら、発生した奇形ザルは観光資源としては困るということで、テクニカルな次元において根本的原因が一時的に抑さえられているために、一般市民の眼から見落されることになるとしたら、それは大変なことだと思います。もしそうであるなら、あからさまに奇形が発生しない現在のサルの状況は、ある意味で人間のそれに近似してきたといえるでしょう。なぜなら人間の場合、障害の発生が潜伏しており、むしろ慢性毒性が問題となりつつあるからである。一見すると健全な新生児も、その背後には流産の増加傾向があり、そのため健全な新生児ばかりが生まれ、障害児は生まれていないと錯覚されている事実も忘れてはならないでしょう。要するに根本の原因追求を厳しい眼で追い続けていかねばならないと考えるのです。

追記：好広先生にお願いしていました小豆島についての原稿は、ネパールでのサルの生態調査のため次回報告書に記載する予定です。

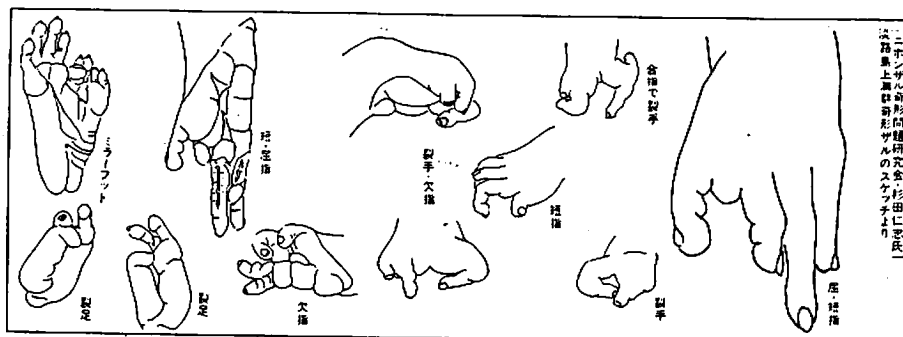


全国奇形出現状況

(ニホンザル奇形問題研究会「奇形ザル」P. 75)

| 頻度<br>(奇形出生率) | 群れ   | 出生  |       |      |         | 現生  |       |       |      |
|---------------|------|-----|-------|------|---------|-----|-------|-------|------|
|               |      | 奇形数 | 総数    | %    | 調査期間    | 奇形数 | 総数    | %     | 調査時  |
| I<br>(>10%)   | 淡路島  | 39  | 130   | 30.0 | 1969~77 | 11  | 94    | 11.7  | 1975 |
|               | 志賀島  | 18  | 118   | 15.3 | 1963~75 | 5   | 37    | 13.5  | 1973 |
|               | 波牛山  | 66  | 542   | 12.2 | 1955~77 | 12  | 95    | 12.6  | 1975 |
|               | 波勝山崎 | 8   | 66    | 12.1 | 1972~75 | 20  | 162   | 12.3  | 1977 |
|               |      |     |       |      |         | >10 | 約100  | >10.0 | 1977 |
| II<br>(5-10%) | 高尾山  | 2   | 25    | 8.0  | 1970~77 | 1   | 32    | 3.1   | 1977 |
|               | 河内島  | —   | —     | —    | —       | 4   | 45    | 8.9   | 1963 |
|               | 宮原山  | 12  | 155   | 7.7  | 1963~76 | —   | —     | —     | —    |
|               | 小豆島  | —   | —     | —    | —       | 3   | 52    | 5.8   | 1964 |
|               |      |     |       |      |         | 34  | 650   | 5.2   | 1976 |
|               |      |     |       |      |         | —   | —     | —     | —    |
| III<br>(<5%)  | 高志山  | 122 | 3,126 | 3.9  | 1965~77 | 67  | 1,749 | 3.8   | 1977 |
|               | 崎賀島  | —   | —     | —    | —       | 1   | 35    | 2.9   | 1977 |
|               | 屋久島  | —   | —     | —    | —       | 2   | 215   | 0.9   | 1977 |
|               | 河内海岸 | —   | —     | —    | —       | 1   | 約300  | 0.3   | 1976 |

出生総数および現生総数中の奇形個体の割合  
(同上, P. 76-77)



ニホンザル奇形問題研究会「奇形ザル」P. 76-77

## 猿を見つめることは、自己を見つめること

文学部 研究生 植木 通博

早いもので、淡路島モンキーセンターにコータを訪ねてから三年の月日がたちました。あのとき、私たちはあまりに多くの猿が奇形であることに驚いてしまいました。そして、奇形の猿たちが不自由な手足を器用に使いながら、他の猿と同じように懸命に生きている姿に心をゆさぶられ、「これは、猿だけの問題じゃない。なんとかしなければ」と思いました。

ところが、このような貴重な経験をさせていただきながら、この問題を解決するために自分が何をすべきかということが、ずっとわかりませんでした。「何か行動すべきだ。」と気持ちはあせるのですが、何をしてよいのかわからないまま、しだいに「僕には、何もできないのではないか」という無力感に陥ってしまいました。

三年後、僕はあいかわらず大量生産された加工食品を毎日のように食べていますし、カップラーメンは今も大好きです。野菜や果物も、残留農薬に対する不安を感じながらも、仕方がないと半分あきらめて食べています。

そんなわけで、この奇形猿問題をどうとらえ、どう対応していくべきかというのを、もう一度考えてみました。

今回のゼミ合宿を終えて、一番強く感じたことは、餌づけされた猿たちは、いろいろな意味で、私たち人間の立場を代弁してくれているのではないか、ということです。たとえば、自給自足すべき食糧を得ることを忘れたというところは、分業化の進んだ人間社会のようです。与えられた穀物をむさぼり食う猿たちの姿は、複雑化した社会で、加工食品に依存して生きている私たち自身のようです。他方、奇形猿も仲間から同じように扱われている「原始的な」猿社会は、ささいなことで差別し、異った者を排除しがちな「発達した」人間社会のアンチテーゼでもあると思います。

このように考えていくと、奇形猿も単にモルモットとしてとらえるのではなく、彼らの生きている姿そのものをとらえていかねばなりません。だから、奇形猿問題は、単に生物学的・医学的な問題ではなくて、「いかに生きるか」ということを、猿たちの姿を通じて私たちに問いかけている人生論的哲学の問題でもあると思います。

僕は、これまで奇形猿問題を解決するためには、社会に対して何らかの働きかけをしていくしかないと思っていました。しかし、この問題を「生き方」の問題としてとらえると、外部になにかを求めるより、まず自分自身がいかにす

ればよく生きることができると考えるべきだという考えに至りました。このことに気がついた時、僕の心の中にあった、何かをすべきだという「あせり」や、何もできないという「無力感」がうすれ、気持ちがずいぶん楽になりました。

奇形猿の発生は、原因がはっきりしないまま減少しつつあるそうです。でも僕は、自分のよりよい生き方を模索するための大切な鏡として、奇形猿問題を見つめ続けていかねばならないと思いはじめています。

### 事実を残す

甲南大学 文学部 研究生 小竹 代里子

「たいそうハードな合宿だったなあ。」これは参加者全員の共通の感想だと思ふ。

好広先生の御指導のもと、サル个体数の数え方・年齢の見分け方・奇形の種類など教えていただき、実地に調査を行なったわけだが、『奇形サル—野猿公苑からの報告』が著されるまでの地道で根気のいる仕事を垣間見たと思ふ。

銚子溪の野猿公苑は規模の大きい動物園のようであった。公苑のあちこちに、「優しいサルの国」とか「ボスサル悪太郎」などの看板が立てられている。「害虫」「役虫」などと自然界にまで善悪を作った人間は、それを当然のことに様にここにもあてはめていた。

観察のあい間、私は後輩からキャラメルをもらった。「わっ、ありがとう！」と受け取って、ふと回りを見ると、サル達がどんどん近づいてくる。あまりにしつこいので、キャラメルを一つ投げた。それをサッと取った若オスの後をボスらしいのが猛スピードで追いかける。結局ボスが取り上げてしまった。『サルを見て人間本性を探る』（杉山幸丸著）の一節を思い出す。「たしかにリングが一個だけあれば、相手を押しのけてでも自分がとろうとしますが自然環境の中に相手を押しのければ自分の利益につながるような場はあまりないといってもよいでしょう。」(P.44) これに対して、疑問がわからないわけではない。しかし、「ふんだんにはいわないまでも、生活範囲の中に広く食物すなわち要求物が分散していて、その許容限界よりは低い生息密度で」(P.56) 生きており、「あまりにも静かで、近くに群れがいても知らずに通り過ぎてしまいそう」(P.54) な野生のサルと、「キャラメル一個」という特殊な状態を作られ大騒動する餌付けザルとを重ね合わせるとき、印象に残る一節である。

銚子溪は、奇形ザル発生率の高い所の一つと言われている。奇形ザルを見つけた観光客が口々に言う「あ、奇形だ。かわいそうになぁ。」そして子供たちに「見てごらん。かわいそうに。」と呼びかける。なぜ、自分の中に自分の問題として採り入れないのか。合宿に参加する前に見たビデオで、「餌付けをやめれば奇形ザルはいなくなる。」と食糧を管理するある政府高官が言っていたが、その『臭い物にふた』的態度も単に問題から視線を逸すにすぎない。

「今年、奇形ザルは生まれていませんよ。」という公苑管理者の説明に、私は「本当だろうか」と、0才のサルには特に注意した。実際、私が見た子ザルには奇形はなかった。そうこうするうち、私にはサルの視線に対する反応がとても興味深く思えたのである。町中の道を歩いていると猫やスズメと出会う。視線が合っても合わなくても、ある距離以上近づくと逃げていってしまう。ところが、サルは視線が合っている間は身構え・逃げるが、視線を合わさずにユッタリ・ノッタリ歩いていれば、サルの背中と私の足が擦れ合う程近づいても動こうとはしない。例外は、子ザルの手足を見つめる私の視線に反応する母ザルだけであった。

寒霞溪ではサルこそ二匹しか見ることができなかったが、その代わり久し振りに胸一杯、山の香を吸い込んだ。枝づれ・水の流れ・木漏れ日……。ところが、風景を楽しんでばかりもいられない。地雷（馬ふん）があちこち転がっているからである。道々、好広先生に草木のことも教えていただいた。

「奇形ザルがいた、という事実を残すことを自分がしなければ誰がするのか。」好広先生が態度で示された辛抱強さを、私達は日常においても忘れてはならないと思う。事実は現在（いま）の積み重なりである。「事実を残す」その重みを肌で感じた。

#### サル社会から学ぶ人間の在り方

竜谷大学 文学部 三回生 小泉 さより

今回のゼミ旅行においてサルをあらたな観点から見たことは、人間を、もっと言えば自分を、見つめ直すことになった。私は、これまで幾度か日本ザルの生態や奇形ザル問題について学ぶ機会を得てきたが、今回生態学の見地から奇形ザルを研究しておられる好広先生の調査に同行させていただくことにより、現代社会のかかえている問題をあらためて考える契機を与えていただいた。

まず私は小豆島の銚子溪自然公園のサルたちと出会い、そこで好広先生から調査のオリエンテーションとしサルの性別・年齢の見分け方を教えていただいた。最初、私は性別はともかくとして年齢まで断定できるものかと思った。また、もともと動物が苦手である私は、サルに対する警戒心を取り払うことができなかつた。しかし、2日目からの本格的な調査に参加したり、個別に観察することによって前日に抱いていた疑問や危ぐも徐々にうすれていった。そこで今まで動物園のような枠の中でしか見ることのなかつたサルに対する見方が大きく変化し、そのことはとりもなおさず人間の在り方を考えることになった。その観察の最初の段階ではサルたちの性別や年齢を判断するのに精一杯であったが、次第にそのサルの表情や行動についても注意することができるようになった。もちろん時々発するサルの声は何を意味し、それに伴う行動がどういうものかということまで考え及ぶことはできなかつたが、ある程度個別的な観察から全体としてのサル社会というものをとらえることができたと思う。

しかし、ここで忘れてはならないのが奇形サルの存在である。私は2日間の観察を通じて数頭の奇形をもったサルと出会い、そこに、これからの人間の姿を見るような気がした。

奇形サル問題は、その奇形の原因として与えられた餌に付着している残留農薬が最も有力に考えられているのだが、このことは次第に私の中で私なりに問題化してきた。つまり、この問題には一人一人の意識改革と根本的な社会の改善が必要であると痛感すると同時に、私自身何からこれに取り組みればよいのか考えあぐんできたのである。私にはまだまだなすすべが見つからないが、少なくとも今回のゼミ旅行の貴重な体験をもとに今後この問題に取り組んでいきたいと思う。この問題は決してサル社会の中だけの問題ではなく、人間自らの問題であり、人間は自然の中で生かされている存在であることを忘れていてはいけないのである。

最後になりましたが、今回のゼミ旅行に際してたいへん御懇意にいただいた好広先生および谷口先生、さらにゼミ旅行に参加された皆様に心より感謝致します。

連作詩「小豆島」

甲南大学 文学部 四回生 合志 由美子

虎

スペイン王よ

マントを召されよ

そして短剣も

動物園には

中風病みの虎がいます

でも王族です

見れば見るほど痛わしい

(マリー・ローランサン「小さな動物誌」より)

プロローグ

海は静かに灰色の空を映し

港は船を迎え入れる

その後ろで

森はこんもりと繁り

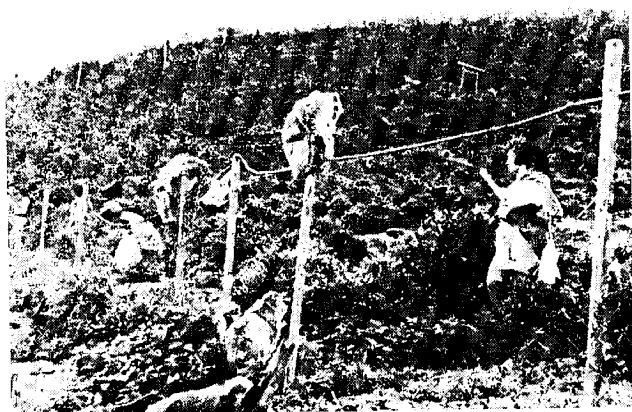
背(せな)に隠れる子らをかばう

息をころして

その緊張の中に足を踏み入れる

人間は ひとりぼっちで

いろんなものとたたかっている



銚子溪



ア・イ・ロ・ニ・ー

「ゴミ箱にゴミを棄ててはいけません」  
何故なら 清掃を生業とする人の生活を  
脅かすからです

「水質汚染防止のため石けんを使いましょう」  
などと寝言を言っているのは  
バスのアナウンス 機械の声だけ  
洗剤屋の家族を飢えさせるわけにはいきません

「健康のため吸いすぎに注意しましょう」  
煙草の箱の文字が  
うすら笑いを浮かべています

「核を廃絶することはできません」  
それは モラルや 価値の問題を越えて  
経済の問題だからなのです

やさしい猿  
一日中 彼らの関心事は  
けんかと 今日の天気と 食べること

—やあ また変なやつらがやって来た  
四角い煙を吐く箱に乗って来て  
決して上まで登って来れない  
おかしな群れ—

握った手には  
何が隠されているか知っている  
とつとよこさねば実力行使  
禁断の味 南京豆!!  
垂れさがった腹をかかえて  
無気力な彼らはグルーミング

そんな彼らを人は呼んだ  
やさしい猿・・・と!!

奇形

その曲がった肢で  
不器用に歩む  
その裂けた手で  
我が子をかばう

あなたたちを  
こんなところに追いつめたのは  
私たちです  
あなたたちの飲む水を  
汚したのは私たちです

私たちは  
一生懸命働くけど  
私たちは  
一生懸命お金を稼ぐけど  
私たちは  
一生懸命 愛そうとするけれど・・・

私たちの心を  
こんなにゆがめてしまったのは  
私たち自身です  
おそらく



奇形サル（裂手、裂足）

みどりいろの向こう側に  
やぶの中からじっと見つめる  
小さな め  
心うかがう みどりの め  
ちょろりと戻る母の胸  
乳房くわえてあまったれ  
そっとふり返る  
みどりの め

子どもたちは  
母親だけが世界でないのに気付くころ  
風がささやき 花が誘う  
細い手を伸ばして  
花をむしり  
小さな顔をくしゃくしゃにして  
白い花びらをほおばる  
風にふるえて寄り添った  
よその親に振り払われ  
あわててさがす  
優しいぬくもり

仔ザルは見つめる  
仔ザルは求める  
仔ザルは気まま  
仔ザルは感じる  
仔ザルは飲む

君たちを輝かせるのは  
ちから  
おそれ  
それは 生きているって  
ことなのさ

会えてよかった  
会えてよかった  
まあるく 深い  
碧の眼をもつ 君たちに

## 小豆島のニホンザル

甲南大学 理学部 四回生 上野 純一

蒸し暑い季節、梅雨の晴れ間をぬって寒霞渓と銚子溪に行きました。両地とも日本の有名な観光地で、高崎山を代表とする野猿公苑の様にニホンザルの餌付けと景観で、ツアーの停留所にもなっている所です。

特に銚子溪のニホンザルは、観光目的のために、当地の極狭い範囲に定着させられ、今日も餌付けでまかれた餌を拾い続けたに違いありません。初めて彼らを見た時、「人間の観光のために生きている、この生物にどんな主体性があるのか」と考えました。私は、人間が決して彼らのために思っているのではなく、ある種の暴力を与えていると感じたのです。

小豆島での日程の終了もせまり、既に夏の太陽が焼けつく日差しを送っていました。最後の観察のために餌場に登りついて腰を下ろしていました。その時、猿と餌と観光客の間に座り込んでいて、地面近くの別の世界に入ったような錯覚を覚えたのです。ぼんやりと、四つ足で動き回る毛玉のような猿と、二本足で驚異的に、しっかりとした足取りで移動する人間とを眺めていました。焦げるような日のなかで眠ったかもしれませぬ。茶色の毛玉を目で追っていました。一ヶ所に座り込んで黙々と餌を口へ運んでいるもの、二本足の後について回るもの、ケンカしているやつ、怒っているやつ、傷ついているやつ、・・・そんな毛玉を眺めているやつ

彼らは、本来のニホンザルの生き方をしているとは言えません。だからと言って、これで主体性を失っていると言えるでしょうか。彼らは、彼らなりの仕方では生きているように思えます。それが、どんなに他人に嫌悪感を起こさせるような仕方でも、です。人間に餌をねだり、強要し、一転、放って置いてくれと、威嚇する。彼ら自身は、決して観光目的で生きているのでは、ないのです。

彼らは、ペットではなく、まして友人でもありません。それなのに、彼らは、私に心和む一閑暇を、与えてくれるのです。

たとえ、彼らが、とらわれの身であっても、種の異った生物が、同時に顔をつきあわせ、コミュニケーションすることが重要な事ではないかと感じました。そこでは支配する側や、支配される側といった定式的な分類など、なくそうと思えば、すぐにでも取り去ることができるでしょう。

## ゼミ旅行随想

甲南大学 理学部 四回生 脇田 博代

今年度のゼミ旅行は昨年度に引き継ぎ、日本ザルの生態と奇形の出現を探りに小豆島へ出向いた。銚子溪と寒霞溪の二箇所が観察場所である。

まず私たちは銚子溪に到着した。そこは小高い山に囲まれ、たいへん環境の良い場所だった。門をくぐり、坂道を登ってしばらく行くと、公苑管理者の小屋にたどり着く。私たちはすでに好広先生にサル年齢の見分け方と個体数の数え方を、船中のオリエンテーションで教えて頂いていたが、実際にサルを目の前にするとなかなか識別が出来ない。皆、好広先生のご指導に耳を傾け、それぞれの年齢の特徴を目で感じることに努めた。

私がこの群れの中に立って一番に感じたことは、サルどうしのヒステリー気味なけんかのことである。「キーキー」と歯をむき出して威嚇し、あるものは逃げ惑い、あるものは人間に立ち向かう。私はその場に居続けることができそうになく、耳をふさいで座り込みたくなった。大きなサルが小さな小ザルを追い掛け回し暴力をふるう。子ザルは恐ろしい形相で逃げ、叫び狂う。弱い者いじめが公然と行われているかのようにさえ見える。こんなに空が青くてこんなに緑がきれいなのに何故・・・？

飼育係の人が出て来られた。彼は言う。「サルに対して愛情はあまり必要でない。少しでも甘くすれば付け上がるだけだ。人間がサルよりも上であることを力で示さなければならない。」彼は、自分が歩くとサルが皆、ささっと飛び退いて避けることを得意気にやってみせてくれた。飼育係としての試行と経験による結論であろう。が、悲しい思いがした。

群れの全体的にヒステリーな症候は、密度が大なことにも原因があるだろう。三つの群れに分かれていることが余計に狭さを感じさせる。

この群れのもう一つの特徴として、随分太ったサルが多いことがあげられる。しかも普通の太り方ではない。妊娠したわけでもないのに三段腹になっており、歩くと地面に擦るために、腹が擦りむけているサル。母ザルの垂れ下がった腹にしがみついているために、母ザルが歩くと頭が地面に擦り、ハゲになっている子ザル。滑けいとしか言いようがない。好広先生の説明によると食べ過ぎが原因である。それでもなお足元には食べきれずに余ったエサが一面に敷かれている。野生動物にとって当然、コントロールできるはずの基本的なことが、何故このサルにはできないのだろう。ヒステリックなキーキー声を聞いているうちに、愛情もなく、狭さゆえの欲求不満を解消するためには“食べる”しかないのかもしれないと思った。かわいそうなサルたち・・・。

銚子溪では胸を締めつけられるような思いをしていたが、とても良いことに  
出くわした。少し疲れ、カメラを抱えて座り込んでいるところ、後ろからフワ  
ーッと抱きつかれた。そして背後から私の髪をかきわける。「あっ、グルーミ  
ングされている。」という同輩の声に驚いてか、しばらくもすると離れていっ  
てしまった。何ともいえない暖かい気持ち。エサをねだる時の手ではない。も  
っと、やさしいものを包み込むような気配。グルーミング、それは体を清潔に  
するためとノミ取りの効果、そしてコミュニケーションと愛情表現に通ずる。  
そうか、私が思うほど、ここのサルたちに愛情が欠けていたわけではない。そ  
う思って辺りを見直すと、たくさんのサルが抱き合っている。手足に奇形をも  
つサルも、もたないサルにとっても器用な手つきでグルーミングする。サルたち  
の間に、「奇形」という観念はない。グルーミングをする方もされる方も気持  
ちよさそうだ。エクスタシーを味わっているかのように見える。もう一回して  
欲しいな……。友人といっしょにサルたちに背中を向けて座って待ってみたが、  
だめだった。しかしこの一度きりの小さな驚きと感動は忘れることができない。  
互いのスキンシップが失われつつある今、人間にもこのグルーミングという習  
性があれば、世の中の人皆、優しくあたたかになれるかもしれない。そんな想  
像をした。

#### ゼミ旅行に参加して

甲南大学 理学部 四回生 飯塚 陽子

今回の夏のゼミ旅行は、小豆島へサルの観察に行くことになりました。もと  
もと、小さい時から動物が好きで、見ていてあきることのないおもしろいサル  
には興味をもっていった私でした。ですから、特に今回の小豆島のサルの観察は  
とても楽しみにしていました。

そして、行ってみての感想といえば、まず、夜遅くまでの発表と五時半起き  
という驚異の世界の中で、私達のする事は同じ所にずっと立っていてサルの数  
を数えたり識別したりと一見とても地味な内容であり、何よりも根気とサルへ  
の愛着が最も必要なものだという事が痛感されました。それと同時に、好広先  
生のサルへの愛着とそれから来るこの根気と体力とを思わず尊敬するばかりで  
した。

一見とても地味な内容にも感じることもありましたが、しかし、よくよく観

察すると、そこにはいろんなおもしろいことが起こっており、思わず自然とサルたちの行動に、ほほえましさを感じたり驚いてしまったりしてしまいました。特に、小ザルたちの行動や顔つきには見ているにあきがこないものがありました。ボーッとしていると、ただの識別に終わってしまう作業の中ですが、サルたちの世界にほんの少し入ってみると（私にはわからないことだらけなのですが）、なぜか、とても楽しくなっていました。そのくせ突如としておこるギャーギャー、キーキーとうるさいサルのなき声にはいつも驚かされ、おびえていました。

最初にここに来て驚いたのは、とてもサルの数が多く皆太っているという事と、道の途中に立ててある看板の内容、そしてえさまきのおじさんのサルへの態度でした。彼の態度にはサルへの愛情といったものはほとんど感じられなかった事が予想外の事でありショックな事でした。人間本位の看板の内容やこのようなおじさんの態度から感じられるのは銚子溪のサルは商品化されてしまっているということ、まず人間がいて次にサルがいるといった感じでした。そして、そこはサクもなく自由に行動ができているようであり、とても行動が縛られているようにも感じました。反対に寒霞溪のサルは、餌付けされているにもかかわらずほとんど姿がみられず、自由に行動ができ、自分たちの本来の生活をしているように感じました。でも、これもただの勝手に思い込みで、サルにとっては餌にありつけられたらそういう事はどうでもいい事かもしれません。

それから、ここでは奇形ザルに対しても、ほとんど何の問題意識もないという事が少し残念な気もしましたが、実際、奇形ザルの数が少なく、最近生まれた小さいサルにはみられないという事からかもしれません。でもここでほんの少しでも問題提起をしたなら、たくさんの人たちに、知っておくべき事実を知らせることができ、そして、それにより危機意識をもつことにもなるのに、と思いました。でもそういう事は、やはり経営上隠すべき事の方に入るのだろうと思うと何か世の中の矛盾のようなものを感じてしまいました。でもやはり、それは自分たちのためにも一般の人々により多く知ってもらわなければならないように思われます。

二泊三日という短い期間でしたが、たくさんサルをみる事ができ、その観察の方法を学べた事、本当に好きでなければできないことだという事がわかった事、好広先生の研究に対する真剣さをみれた事、みんなと楽しく過ごせたこと等々、本当にいろいろとありがとうございました。

## 小豆島追想記

甲南大学 文学部 三回生 杉浦 薫

私にとって、奇形ザルは初めてではなく、あの“三年前の淡路島”があったので、二回目でした。谷口ゼミの旅行はと言えば、二回目で、二度共、奇形ザルにあたったことも喜ぶべきことなのでしょうが……。また三年の間に、何か変化があったのでしょうか……。

奇形ザルの発生原因は、農薬のかかった餌による餌づけだという説が強いとされています。サルのことだからと、人ごとなどとは思えません。農薬が、サルはともかく、人体にも悪いことは当然といえます。私たちをとり巻く複合汚染……私たちは現に、公害病という代償を、支払ってきました。ここで、自然という原点に戻って、時々見返さなければならぬことがあるのでしょう。科学の進歩で、増々便利になりつつあり、心がぜいたくに慣れてしまっていて、またそれがあたり前になっている。ただのパッションを重視したあまりに“文明の副作用”を、どう償いましょうか。

ここで“成長か、環境か”という二者択一の困難さに悩まされます。世の中は、我も、我もと利潤追求による肥大化が行われていく。それを全く否定してしまうと、時代遅れなのですが……。目先のことにとらわれて、本質的な何かを忘れている。虚像の多いことを、この年になってやっと、わかりかけたところでは。高度経済成長が“ある意味での貧困さ”をもたらしているのは、悲しい現状です。こういう“公害”を見て見ぬふりをして、すませられる“こと”ではないな、と思いました。

奇形ザルの支障のある動作は、痛ましかったですね（奇形という言葉も差別用語のようで、あまりよくないと思いますが……）。奇形ザルの方が、痛ましい分、かわいく感じられました。奇形ザルの気持ちが、知りたいと思いました。サルの、あのあどけなさに対照的な、問題の深刻さ……それが何だか私の頭は考えることよりも「鑑賞」することになってしまった旅でした。



小豆島、銚子溪のサルたちを ご覧になったことがありますか？ それはもうでっかいのなんの、まるで“ぶた”か“いのしし”とでも言いましょか。あのでっかい体で体当たりされたら、襲われたら、なんて考えただけでサルに慣れていない僕たちは尻もちをついてしまいそうです。普段僕たちが頭に描く野生のニホンザルのイメージは、林の中に消えていく、木々の間を身軽にジャンプする、ときには温泉で、あるいは雪の中をひたすら歩く、等々、いろいろありますが、まあ、だいたい腰がキュッとしまり精かんささえ覚えてしまい、そんなものではないでしょうか。それなのにこのサルたちは、まるで大砲の玉のように丸く『ゴッ！ゴッ！ゴッ！』と駆けてくる。お腹を地面スレスレに垂らして歩く。脂肪と脂肪とのシワでノミなんてかるくつぶせそう……。ある種の醜ささえ感じてしまったのです。（これは、太っているからというだけではありません。）

1956年 ここに93頭のサルが確認されました。サルたちは野山を自由に駆けることがまだまだできました。しかし、30年の間に人間は、人間の暮らしをより良くするために、便利にするために、野山を切り開き、家を、畑を、道を造りました。そして、邪魔者のサルたちは餌づけによってひと所に集められました。すなわち、野猿公苑ができたのです。これを利用すれば（観光客相手に）お金儲けができます。一石二鳥という具合です。サルたちは何もしなくても人間によってエサを与えられ、天敵（野犬など）からは守られます。これは、ある意味でサルたちの生活も便利になったと考えてもいいのではないのでしょうか。そしてサルたちは、どんどん増え続け、今では1000頭近くにもなっています。サルたちが10倍に増えたのに、その生活場所は 10分の1に、いえいえ、そんなものではないんです。随分せまくなっているのです。すなわち猿口密度とでもいいまいしょうか、それが非常に増加したわけです。当然せまい場所に押し込められて黙っているサルたちばかりではありません。これだけの数のサルの中には決められた空間から外に出ようとするものがあります。でも、サルが少しでも人間の生活区に入っていこうとすると、人間は鉄砲で驚かして外に出さないようにして、できるだけ人家から離れたところに追いやりました。サルたちはせまい空間で生きねばならないのです。もともとサルたちの生活場所であった山野を切り開き、自らの生活を便利にした人間。しかも行き場のなくなったサルたちをお金のために利用した人間は、「畑を荒すサルたちを悪いやつらだ」、「今度はひどい猿害だ」、「野猿公苑があるからいけないんだ」、と言います。

それに対して、サルたちは何も言わずに生きています。当然です。言葉を知らないのですから。しかし、生きています。サルは人間の『思うとおりの物』ではないのです。人間様につかかってくるのは「悪いサル」とされ、毎日何台もやって来る島の観光局のバスからはき出される人間様のお相手をする「よいサル」だけがもてはやされる。人間の与えるエサのため。サルたちは太りました。母ザルが子ザルをお腹にしがみつかせて運ぶとき、子ザルの背中は地面とこすれてズルムケになってしまいます。ノイローゼになって我子のペニスをしゃぶる母ザルがいます。毛をわけもなくむしるサルがいます。昔のおい茂った林の跡を残し木々は立ち枯れてしまっています。この裸の山が一層サルたちの生活を人間の目にさらしているのです。

このサルたちを見ていると 現代社会に生きる管理された、主体的自由を失った人間に似ているところが多くありそうな気がしてしまいます。それも、悪いところばかり目につきます。「怖がるな！サルを教育せよ！けとばしてでもいい！甘やかせるな！人間にはむかわせるな！」そんな管理の仕方を正しいと思っている人がいるなら、自分をもっとみてほしいと思うのです。

## O P T I M I S T

甲南大学 理学部 三回生 高木 敏宏

銚子溪。多く峰の集まった、起伏が目立たないところにサル達がいる。一見してまず気付くのは、草木のない土の露出している部分があったり、木の葉がなく茶色い幹の裸出している木があることだ。山でありながら、土砂採掘場でも山火事でもないのに山の一部分がはげているのである。ここには餌場に導く一本の道があるが、その入口からもはっきりと見えるほど目立つ。その道を登ると半壊し、錆付いた小屋が柵に囲まれたゆるやかな斜面に横たわっている。さらに登って餌場に着くと、コンクリートでできた、しかも黒ずんで、汚物がしみついている建物があり異臭を放っている。餌場となる広場には、鉄製のおり、池、わずかな草木、黒縁眼鏡の管理人、そして一面に黄土色の地面。そこに、多いときには何百頭ものサルがいる。サルが跳びまわったり、観光客がいる時ならにぎやかで良いが、静かになると、この辺りは荒廃した町の情景に似て、何か寂しくなる。

寒霞溪。たくさん生い茂る草木や樹木の葉が、あらゆる空間で交錯し、個々

の区別なしに一面の緑という風景にしている。その中に幾筋かの登山道が通っている。この餌場はその登山道の途中にあった。たくさんの小麦がばらまかれていたが、サルは見当らない。20分ぐらい休憩して、やっと一頭、遠くに姿を見せただけであった。緑が頭の上をさえぎり道は暗いが、たくさんの動植物が混在しているのをよく観察することは結構楽しいものである。

この二つ、つまり銚子溪と寒霞溪は完全に対比を成している。陽の当たる峰と暗い谷、たくさんのサルと少ないサル、はげた山と繁茂する緑、人間による管理と自然。

人間による管理。銚子溪では完全な餌付けがなされている。管理人が播く小麦をサル達はせわしく拾い上げ、食う。たくさんのサルが三つの群に分かれ、小麦を食べる。一頭ずつ見ていると、餌場では3分の2以上の時間を摂食行動に費やしている。しかし『餌付け』という言葉に注意してほしい。というのは、管理人が与える小麦などの食物しかサル達は食べていないという誤解を招き易いからだ。餌場にいないサルは、木に登り葉や芽をちぎって食べている。木に登っていないサルは地面を被っている草木を食んでいる。中には土を口の中に運ぶのもいる（土にはミネラルが含まれ、それを摂取しているらしい）。サル達の主要な食物は与えられた小麦なのかもしれないが、葉、草なども栄養源としている。

私たちは、「奇形サルを考える」という深刻な問題を抱え込んでこの合宿に臨んだのだが、私はサル達を見て拍子抜けをしてしまった。なんと、サル達はのん気に、昼寝したり食事したりしているではないか。ある雄サルは木の上に登って、葉をちぎったり、あっちこっち見たり、私が同じく木に登って木ゆすりしても全く無とん着。陽気がいいせいか、グルーミングをしてもらっているサルは本当に気持ち良さそうである。奇形サルがいなかったわけではない。軽度から重度までの奇形サルが少なくとも十頭以上いた。しかし、奇形サルも同じように呑気で、見たところ平和そのものの表情をしていた。

管理人のおじさん。サルに餌を与え、観光客にサルの扱い方を説明する。「胸を張って足をドスドスンといわせて歩け。そうすればサルはおとなしくなります。」彼が歩けばすごいものである。サルは飛び退き警戒する。この時、サルには緊張感が浮かぶ。他のサルが怒ってもあれほどの恐い表情はしない。ボスサルが怒っても同じである。人間が与えたものは餌だけでなく、この様な圧迫も少なからずあるだろう。

奇形サルの発生。この原因をはっきり言うことはできないが、今、一番有力

な説ならあるだろう。しかし今がそれでも、時が経てば新しい考えがでてくるかもしれない。永遠に答なんか出てこないかもしれない。いや、答を追究すること自体が即、良い結果につながるとは限らないと思う。みんなが奇形ザルを開んで、形状が何々だと判定する、それでデータは集まるだろう。しかし、そのサルはみんなから悲しみや、哀れみを含んだ視線を与えられて、何も変化がないであろうか？できれば「何か変だな」と感じることなく他のサルと同じように呑気に暮らして欲しい。それに奇形ザルも減ってきている。状況は良くなったのだ。ある何かが働きかけて・・・。

#### “Hasten Slowly Optimist”

今まで述べてきたことは楽天的かもしれない (Optimist: 楽天主義者)。呑気な顔して生活できればと思っているなら楽天的だろう。みんなは言うだろう、楽道家はよくないと (Hasten: せき立てる。せかす)。

### サルと自然

甲南大学 理学部 三回生 万井 敏寛

小豆島のサルを見に行くのにあたって、奇形ザルに関して改めて考えました。奇形は餌づけに原因があるのではないかとされています。農薬に疑いがあるため、我々の生活全体を見直さなければならない問題に発展しつつあります。

そもそもサルに何故餌づけが行われるようになったのでしょうか。サルが民家の近くまでやって来て、農作物などに被害を与える。その解決策として餌づけし、サルを特定の地域にとどまらせ、かつ観光用に見立てられ、人間の管理下に置く。このように人の住む社会にサルの侵入をくい止め、なおかつ地域を潤す観光の資源となっています。餌づけが行われた理由を述べてきましたが、それが行われる以前にもサルの体がむしばまれていたことがあります。「奇形ザル」(汐文社)によれば、志賀高原のC群の中に餌づけが行われる以前に奇形ザルが存在していました。また、皮膚に湿疹や内臓に異常が見うけられたのが多々あったことが書かれています。このことは彼らのせい息する森林そのものの環境の悪化に起因しています。サルが民家の近くまで来て、農作物を荒すのもそこに関係しています。

少し前までは、サルやシカなどの野生動物が民家の近くまで来ることはありませんでした。森林の再生能力を全く無視した大規模な木の伐採によって、人

間が自然の中に侵入していきました。森林が荒廃したまま放置され、観光によってさらに拍車をかける。自然は、一度破壊するともとはもどらない。動物が追われて、民家までやって来て農作物を荒す。自らの原因で引き起こしたのにもかかわらず、動物が増え過ぎたのだといって捕殺する。人間を中心として考えてばかりいるので、このようなことが行われる。野生動物は自然の中に生きています。動物の中の人間は、自然環境そのものを変える力を身につけています。いつのまにか人間が、自然を支配しているのではと「うぬぼれて」いるのではないか。自然は今でもすべての生物に恩恵を与えています。自然を変える力をもっているからこそ、人間の立場からばかり考えるのではなく、他の生物の立場からも考えるべきである。我々は、今まで高度経済成長の中、経済成長そのものが生活を潤すものとばかり考えてきました。成長そのものが我々の生活を豊かにしたことは否定できない。しかし、良い面ばかりに目が行って、悪い面について考えることを忘れていたのではないか。自然科学が万能な現代の世の中、根底の中にいつしか人間は自然をコントロールできると信じています。そのような面ばかり見ていると、失われていく本当に大切なものが失われ、すなわちしみが自然界に生じ、その結果人間社会に及ぶのではないか。自然を人間に調和させていくのではなく、人間が自然に調和していかなくてはならない。

### 夏合宿の感想

甲南大学 法学部 三回生 山下 裕幸

サルの生態調査というのは、いうまでもなく自然科学的方法論によるアプローチである。人文科学である哲学のゼミにとって、この方法論を用いることは、どのような意義があったのだろうか。

奇形サル問題は谷口ゼミが以前から取り組んでいる重要な日本の社会問題の一つである。しかしながら、この問題に取り組んでいる者は末だ数少ない。それにもかかわらず一方で原因の一つといわれている農作物への世間の不安も近年高まっていることも事実である。この不安の本質はなんだろうか。

これこそ現代の開発至上主義社会に対する世間の不安に違いない。合理主義に貫かれた現代社会では、過当競争のあまり人々に利益をもたらさずの科学技術が深刻な社会問題として我々の前に露呈した。このことにより、「人間」や「自然」や「社会」の調和の重要性を再認識したのである。そして理想論に

留まらずに我々はこの調和を実践していかなければならないのだ。さて人間の  
ための科学技術を創造するには今までと違った価値感が必要である。哲学はその  
礎、その助けに不可欠なものとなる。無論、哲学を通して我々はしかるべき  
要請に答えていく努力をしなければならぬことも事実である。いかにそれが  
抽象的で難解な課題であってでもある。

ところで今回のセミ合宿でどのような成果を得ることが出来たであろうか。  
とかく知識だけになりがちな社会問題の探求は、現物を見聞きすることによっ  
て、問題意識は明確化され各人の理解を深めることになる。特に今回は、指導  
に竜谷大学で生態学を専門とされている好広助教授があたられ、本格的な生態  
調査を経験することが出来た。

「人間」を研究する哲学のゼミが、このような「自然」の研究を体験するこ  
とは大変に意味をもつと考えられる。何故なら自然と人間の調和も科学的な観  
点をも含めて身をもって知ることになるからである。無論その認識はまだ十分  
なものではないかもしれない。

現地での好広助教授の粘り強い調査には、どの学問にも通じるであろう厳し  
さを痛感させられた。真の調和を求めるならば、人間も自然も徹底的に知ろう  
とする努力を怠ってはならないことも知った。真の調和の実現は、かならずし  
も容易なものではない。

哲学を学ぶ。事実を知る。人間を知る。自然を知る。  
大変有意義な合宿であった。

ゼミ旅行を終えて

甲南大学 文学部 三回生 古市 亮平

僕は今回ゼミナール旅行に初参加しました。目的は小豆島でのサルの調査観  
察です。

谷口先生がその準備として講義中に持って来られた奇形ザルの写真集を見ま  
した。それはひ弱な感じがしたのですが、実際に当地で観察してみると、普通  
のサルと同じように力強くすばしっこく生きているように感じました。

小豆島には、餌付けされたサルの群れが居ます。僕が小豆島で観察した奇形  
ザルは4、5頭だったのですが、後で友達に聞くと30数頭は居たのだそうです。  
僕が見た奇形ザルは裂手や欠指・裂足でした。

今回、調査のため同行して下さった好広先生は、奇形発生 of の大きな原因の一

つとして、餌の残留農薬を挙げておられます。一方、公苑の管理人は、血縁の近いサル同士で交配する事によるのだろーと言われました。僕はどちらかの説のみでなく、両方の相乗による「餌付け血縁交配」なるものではないかと勝手に推測しています。

さて、現代の日本人と餌付けされたニホンザルは、同じ様に、農薬と化学肥料を使って作られた食物を食べています。それにも拘わらず、サルに、餌も原因の一つと思われる奇形が多いのは何故でしょうか。人間はそのような食物に限らず、多様なものを食べているために発現が少ないのかも知れません。先ほど書いたように、自然界では、僕はたった一つの原因からそうした結果が起こるとは考えないようにしています。

欠損型の奇形には、短指のような軽度のものから欠肢のような重度のものまで、形態的な連続性が認められます。又、裂手・裂足型は代表的な形態で、頻度も高いようです。四肢奇形には、短指・欠指・半肢・欠肢のような欠損型から分枝状の欠損型の変形、多指、ミラーフットのような重複型まで、極めて多様な変異性がみられます。農薬によっても放射能のように、遺伝子が切れたり結合したりするのもかも知れません。又、耳介変形、へそヘルニア、尾の欠損などは少ないようですが、四肢奇形個体に四肢以外の奇形もみられるそうです。僕は実際にへそヘルニアのニホンザルも見ました。そのサルを見たのは、個体数の観察をした時で、一度に多数のサルが走って行ったため奇形かどうかの判断が難しかったです。

人間にとって善かれと思って作った物が、逆に人間を苦しめています。まず大事な自然が壊され、動物が毒に犯されてから気がつくのでは遅過ぎます。各自が進んで何かをしなくては行けないと、今回の旅行の後、考えさせられました。

### 奇形ザルを観察して

甲南大学 法学部 二回生 山下 智実

7月12日～14日に小豆島にゼミ旅行に行き奇形ザルの観察及びサルの個体数の調査をおこなった。

最初に好広先生からサルの識別の方法を教えていただいたが、あまり自信はなかった。しかし、何時間もサルを見ていると、徐々にサルの識別にも慣れて

きた。そうしてサルを見ていると、よくにらみあったりケンカをしたりして、無秩序のようであるが、サル社会にはある一定の秩序のようなものによって成り立っているように感じた。体が大きく強いサルや体が小さく弱いサルがいるけれども、弱いサルだからといっていじめたりすることはなく、集団の和の様なものがあるように思えた。たとえば、奇形ザルが仲間からグルーミングを受けていたことだ。普通グルーミングはしてもらったら“お返し”をしなければならない。奇形ザルは手足が不自由なのでグルーミングをすることができないのに、仲間外れにされることなく、群れの中で生活している。また、奇形ザルがボスザルの近くでエサを食べていても、ボスザルは寛大な態度をとると聞いた。このように、サル社会では弱いサルを集団全体が助けているように見え、人間もサル社会に学ぶ所がたくさんあるように思う。

今回の観察では、寒霞溪と銚子溪という二つの野猿公苑に行ったのだが、前者には奇形ザルは発見されておらず、後者のみに奇形のサルがいるというのは不思議だった。銚子溪はどちらかといえば観光地化されており、サルの食べるエサのほとんどはピーナツ・大豆・小麦などの食品だった。寒霞溪の方は山の中にエサ場が一つだけあり、そのエサ場にもあまり依存していないようだった。寒霞溪と銚子溪では、環境的な違いや食べているものの違いなどによって奇形の発生に違いがあるのではないかと思う。

また、銚子溪にあった「日本一やさしいおサル」の看板や「悪いサル」の看板は、営利に役立つか役立つまいかという人間の勝手な判断によるものだと思う。

今までに人間は自分達の利益のために自然や野生動物などを犠牲にしてきた。このような自然への“付け”は必ず人類に返って来ると思う。サルの中に奇形が発生しているのは人間の代りに発生したようなもので、いわばサルは人間の身代りになっているのだと思う。だから、サルが人間の身代りになってくれているうちに、人間と自然とが共存していくことの大切さを、もっと多くの人々が知らなければならぬと思う。



## ゼミ合宿に参加して

甲南大学 理学部 二回生 益田 浩子

今回初めてゼミ合宿に参加した。奇形ザルについては谷口ゼミで討論され続けてきたし、個人的にも動物の生態に興味があるので、とても楽しい旅行だった。

小豆島に着くや、すぐ銚子溪にむかった。私はそれまで野猿公苑に行ったことがなかったので、深い山中の様な所を想像していたのだが、見通しのよいなだらかな丘だった。高い木は一本もなく、全て猿が食べつくしたという。なる程、この広さではとてもこれだけの猿を養いきれまい、そう思ったが、実際には餌付けされて十分な数の猿がいた。しかし一定の空間において個体数が増加しすぎると、環境抵抗という環境との摩擦が起る。奇形ザルもその一つかもしれないとふと思った。

観光資源でもある猿は餌付けされている。際限なく食べ、醜悪な程肥っていた。かばんやポケットを探っていると、何をもらえるのかと周囲に猿が集まってくる。菓子の包みを見せると威嚇して奪おうとする。猿の目の前で包み紙で大豆をくるんで放り投げると一斉に追いかけた。もう「野猿」ではない。用いのない動物園の猿である。

あくる日には寒霞溪にも行った。ここは観光のメインが紅葉であるためか、自然がそのまま残され、一・二匹現われただけの猿には「野猿」の風格があった。しかし、人間の観光というエゴの結果から醜く肥った猿と、人間のエゴからそうならなかった猿とを比べて安どを感じた。それも人間のエゴにすぎなかったのだ。人間である私が猿と向い合っていることの意味を考えずにはいられない。

研究対象として、観光資源として、猿を餌付けしているのは人間だ。ある目的の為に餌付けするということは必要でなくなればその瞬間に放棄できるということを意味する。現に増えすぎた猿、すなわち不用の猿は射殺されている。ニホンザルに限らず、いろいろな動物の生態研究が熱心に行なわれている。が、それは本当に彼らのためになることだろうか。私達は環境問題の一環として奇形ザルに取りくんだが、小豆島で猿を見ることは奇形ザルの調査のためだけだろうか。猿の主体を無視したところに本当の研究・調査などないと思っただ。

まして観光に至ってや、野生を売り物にする一方、野生動物に手づからエサを与えようという矛盾した行為も売る。そして観光する側も、観光客も「自然もどき」に納得してしまふ。満足してしまふ。これは見落されてはならないこと

と思う。こういう風にマヒした感性が日常の至る所に見られ、その所産の一つこそが奇形ザルなのだ。

人間は求めてしまう。卓越した技術力を持ってすれば、それ程難しいことではない。そして手に入るものはどんどん貧欲に求める。都合の悪いところは切り取って、いびつになっても、あるいはそうなったことに気づかないまま、求める。欲望を先行させる余り、本質を見極めることが出来なくなってしまったのだ。自然がわからないままに、自然を守れるはずがない。気づくことの大事さを、改めて感じた。

その意味で、体験してみることの大事さも考えたい。私は小豆島の「野猿」を見ていろいろ考えさせられた。本からの予備知識もあったが、実際目にして感じたことは随分違った。また、あやふやな知識もまとまり、実感を伴ったものとなった。好広先生は自然について学ぶ塾を開いておられるが、そうした積極的な取りくみも、今日ではとても大切なことと思う。

今合宿は朝から晩までサルを観察し、夜は研修会・コンパと、大変ハードだった。私は何となく圧倒されて、おんぶにだっこで人の後ろをついていった感じだった。それが残念に思う。啓発される場所も非常に多く、また次の合宿にも、今度はもっと意欲的に、参加したい。

#### ゼミ旅行に参加して

甲南大学 理学部 二回生 大内 雅勝

今回のゼミ旅行は七月十二～十四日の三日間、小豆島の銚子溪・寒霞溪にて、竜谷大学好広先生のご指導の下に猿の観察を中心に行われました。

最初は今回のゼミ旅行の主旨があまりわからなかったことと、生態観察という極めて地味な作業と、銚子溪の管理人の無愛想さに閉口していたのですが、何回か観察を続けるうちに何となく興味を持てるようになりました。頭数の調査では、ただ単に数えるだけでなく、0才、2～3才、若オス、成人のオス、メスという具合に、体つき等で判別もしました。その判別法の中にはこう丸が赤くなっているオスは7才以上だという面白いものもありました。そして、長い間猿を見ていると、何となくただの猿には思えなくなってくるのです。いじめられている自分の子供を助けに来る母猿、食物の取り合いをする小猿、歩くだけで威厳のあるボスザル、まるで人間社会の縮図を見ているようでした。け

れどもそんなに人間に近い猿たちなのに、銚子溪での扱われ方はひどいものだったのです。「ここまでは良い猿のエリアだから餌をやって下さい」とか、「ここからは悪い猿のエリアだから餌をやらないで下さい」だとか、看板があり、管理人の観光客への説明の中には「人間は猿より偉いから、見下すようにすれば猿は何もしない」とかあり、全く人間の好き勝手にされているという感じでした。そもそも野生猿の餌付けが始まったのも、森林の保護や、研究や観光目的のために一ヶ所に猿を留どめるという人間の勝手な都合からであり猿の社会生活に人間が関与し、操作しているのです。そしてその結果、餌の残留農薬が原因と思われる奇形ザルが発生したのです。今回の調査では、銚子溪の三群のうちS1群では一体発見され、S3群（総数約300）でもかなりの奇形が発見され、最低十二体の奇形ザルが存在することがわかりました。そしてその特徴は若い3才以下の奇形個体がほとんど無く、4才、5才が各1頭で、ほとんどが7才以上ということ、また奇形はメスに多いということです。この結果は83年に好広先生が行われた調査とほぼ同じだということです。人間社会の縮図のように思われる猿の世界で、これだけの奇形が発生し、人間の奇形と猿の奇形との相関関係も、メカニズムはほぼ同じだと判断されている今日、我々が口にするものも彼らと同じものなのですから、奇形ザルの問題を我々自身の問題として、もっと考えなければならぬと思いました。

我々は、銚子溪の他に、小豆島で最も自然が残っているとされている寒霞溪にも行きました。猿は3頭しか観察できませんでしたが、寒霞溪の猿は、銚子溪のように、エサ場の近くに群を成しているのではなく、一応餌付けはされているものの、彼らの行動範囲は広く、野生の木の実などを食べ、補食的にエサ場のエサを食べに来る様です。管理の方法もなるほど、銚子溪とは異なり、人間と猿のつながりもうまくいっているように思いました。我々人間も、誰かに管理されるのではなく、自分自身で考えながら、自分達の生活を築いていかなければならないと思います。

今回のゼミ旅行では、生態観察というなかなか経験できないことをさせていただいて感謝しています。そして、誰に頼まれたわけでもない奇形ザルの調査を「今、自分がやらなければならないんだ。」と言われた、好広先生の情熱と粘り強さに自分の生き方の甘さを痛感しました。好広先生どうもありがとうございました。

## ゼミ合宿に参加して

甲南大学 理学部 二回生 呑海 友子

奇形ザルは写真やビデオで何回も見たので存在については驚きませんでした。むしろ障害をもっている他ザルと変わらず、仲良く生きていることが不思議でした。人間同士だと哀れみや同情の目で相手を見るのに、それがいいことです。相手のハンデを考慮に入れず、同等に扱うことはある意味で冷たいことでもあります。何かがあった時に見捨てていくのですから。動物の中には「弱い者は亡び、強い者が生き残る」という自然淘汰の法則がありますが、人間だけは「強い者は弱い者を助けて生きる」のだそうです。それが人間のヒューマニズムというものでしょう。そのような人間の尊厳こそが今まで弱い者を助ける基盤となってきたからこそ人類は生き残ってこれたのでしょう。

生活するために十分適しているとはいえない体で生き抜くには、それを補うだけの知恵や体力が必要です。両手が裂手の猿が、小麦をつまみにくいたためだ液を手につけ、ひっついてきたものを根気よく食べていました。これも、この猿が今まで生き残るための知恵なのでしょう。又、この猿にグルーミングをしている猿がいました。裂手の猿は手が悪いのですから、グルーミングしてもらっても、してあげることはできません。それなのにいつまでもグルーミングしてもらっていました。仲が良いのでうれしくなってきました。障害をもった猿でも他の猿と変わらず元気に生きているからです。私は奇形猿はもっと仲間はずれにされていたり、闘争的であったりするのかと思っていました。でも、どれが奇形の猿か調査するのに苦労するくらい他の猿と同じように元気よく生きていたのです。

飼育係の方が「奇形は飼料が原因かどうかはわかっていない」と説明していましたが、「奇形ザル—野猿公苑からの報告」（奇形ザル問題研究会編）では「飼料に限って奇形出生との関連性をみると、ミカン・リンゴ・大豆に強い関連性があると認められた」と書かれていました。これらの食品に含まれる農薬が原因ではないかといわれて長い月日がたちましたが、まだまだ研究が追いついていません。しかしそれでも予防・殺虫剤としての農薬が多く使われすぎていると思います。もっと最少限度の使用に限るのがいいのではないかと思います。

## ゼミ旅行を終えて

甲南大学 理学部 一回生 西村 由美

猿。私にとって何の関係もないものだと思い込んでいた。祖先を同じくするかもしれないその猿たちの警告が、今まで私の目には入らなかった。

「この辺りには悪い猿がいます」と予期しない看板が遠来の客を迎え入れている小豆島・銚子溪。周辺一帯の木々は、枝や葉がぼろぼろになっている。時折、けたたましい声とともに猿たちが私の目の前を通り過ぎた。うずくまってグルーミングしている猿たちも居て、一見平和な様子である。

「太ってるなあ。」本当におなか地面に擦れるくらい太っている。飢餓のためにどれほど多くの命が失われているか知れない国もあるというのに、おかしなことだ。「大豆や小麦を餌として与えているそうだが、ここでは食べ放題なのかしら？」などと考えながら、管理人小屋に行った。そこで私は意外な光景を見た。猿は管理の人を恐れているかのように、おどおどしているのである。必ずしも人間と猿との心の交流が見たかったわけではないが、「猿には餌だけやっていたらいい！」と思っている人間に、文字通り「管理」されているのを見て、猿たちは不幸であると感じた。そう、「餌付けそのもの」が、猿の自然の生活をこわすことのために成立する行為なのだ。そして、奇形ザル多発問題もそれに関係するらしい。

奇形ザル問題を考えるとき、最も重要なことは、「原因は環境か遺伝か？」ということであろう。小豆島にはもう一ヶ所、寒霞溪でも猿の餌付けが行われているが、管理はされず自然状態である。これら二ヶ所の猿たちは、遺伝的につながりがあるにもかかわらず、管理されすぎた銚子溪群のみに奇形ザルが発生している。なぜであろうか。

しかし、発生の原因についての問題はなかなか答えが見つからないものだ。できるなら、見て見ぬ振りをする方が楽なのだ。自ら難題をしょい込むのは、いやなものである。しかし、私たちは今猿たちの直面している危機を無視して平和な生活に酔いしれていて良い時であろうか。いや、本当に現代は平和なのだろうか。

自然の変化に敏感なハンディを負った猿たちは、何かを訴えかけているのである。今、私たちは知ろうとする心を大切にしなければならない。

“科学は人々の要望にこたえ  
人々の願いをかなえ、  
人類生命延長のために  
役立てられるべきものである。”

人々とは私たち自身なのではないだろうか。

### 私の小豆島体験

甲南大学 理学部 三回生 馬道 佳代

夏のゼミ合宿で訪れた銚子溪のサル群れは、一ヶ所に集めて餌付けさせていた。小豆島の自然において、管理体制に組み込まれた、飼育係と餌を与えられるだけの多勢のサルは奇異な存在であり、明らかに生態系の秩序はくずれていた。

サルの奇形と農薬についての因果関係は、まだ十分には立証されていないが、時間の問題である。現時点での人類（全人類に非ず）の利益を考えた場合、農薬の害云々については目をつぶりたいであろう。しかし、それは他の動植物にない「ヒト」特有のエゴイズムの傲慢さのあらわれである。つきることのない欲望のために、経済的な自己利益だけを見つめてしまうのである。生態系は自己回復機能を持っているが、その中に最近ではヒトは含まれなくなりつつあるようだ。自然界において、人間は異分子であり、ガン細胞のように厄介なものである。もはや野生でなくなった銚子溪のサル集団も同様の異分子であり、その姿は人間社会の縮図であった。彼らは「生きている」のではなく、「生体を維持している」という状態にすぎない。有り余るほど与えられた餌に縛られ、周囲に広がる自然に背を向け、惰性によって行動している生氣のない彼らの姿、生きるものとはそんなものではないはずである。人間によって侵されていく生態系をなしには、人間自身も生きられないことに、今、気付かなくてはならない。

—そのとき、僕をはじめみんなの心は、自分達が良い目的をもってこの仕事を始め、力を合わせて無我夢中で働いてきた。そして、それがついに完成したのだ、という喜びでいっぱいだった。そしてその瞬間、考えることを忘れていたのだ。つまり考えるという機能がまったく停止してしまったのだ。

(ファインマン著「ご冗談でしょう。ファインマンさん」岩波書店)

これは、ロスアラモスでの原爆実験が成功したときのファインマン博士の記述である。人類が誤ちを犯している時、どのような心理状態であるかを表していると思う。限定された範囲での目的を達成することに、私たちはある種の価値を感じる。しかし、マクロ的視点からその価値についての判断を下すことを忘れがちである。その結果生まれた大小の誤ちの一つが、原爆であり、農薬ではないだろうか。

地球上で「考える」ことのできるのは人類だけであるが、現代においては、ミクロ的で即物的な考えが主流となっている。これを批判する精神を持ちながら、私達も考え続けなくてはならないだろう。



銚子溪の朝

## ゼミ旅行運営後記

運営委員代表 岩田 哲郎・小谷 英子

今回のゼミ旅行（S61. 7.12～14）は、竜谷大学の好広先生にご指導頂き、サルの生態観察及び奇形サルの調査を行うという試みでした。準備段階から、移動にどうしても必要な車の手配や、観察時間に合わせた盛りだくさんな内容のスケジュール調整など、いろいろと頭を悩ますことがありました。一通りの準備も終わった出発直前になって、フェリーのチケット変更があり、旅行中もなかなか思うように進まないだろうと予感するできごとでした。

12日午前 8時30分に正門前に車 6台が集合しました。車の数をそろえるのに O.Bの方にまで無理を聞いて頂き、感謝しています。車は神戸港に向い、好広先生を今か今かと待っていました。そこへ現れた、登山リュック、地下足袋という重装備姿に、初対面の私たちは「スゴイ！」の一言でした。

船中では好広先生のオリエンテーションがあり、そこでサルの性別、年齢の見分け方、記録の仕方等、教わりました。サルの年齢で、2歳か3歳かと迷う時は「エイ、ヤッ！」と決めるそうです。好広先生のお話熱心に聴き入っているうちに時間はあっという間に過ぎ、小豆島の坂手港に着き、別組と合流しました。ここで、いつも忘れものをする Wさんが「フェリーに車を忘れて来た」という事があったとか、なかったとか……。

坂手港で昼食を取り、一路銚子溪へと向いましたが、道がわからず、遠回りしながらようやく着きました。途中あまり坂が多いため、ある車が煙を吐くというハプニングもありました。一通り見終り、旅館へと向いましたが旅館が道路に面していなく、探すのに苦労しました。やれやれ、やっと見つけたと思うと今度は、車 7台を駐車場に入れるのにクイが邪魔なので、これを折る作業をしなければなりません。谷口先生たち 3,4名でその作業にとりかかり、全員腰に異常もなくクイは折れ、車を駐車し、夕食を取ることができました。（先生はまだまだ若い!?)

旅館では討論会、研究生論文及び卒論の中間発表を行いました。平均睡眠時間 3時間の中、様々なエピソードが生まれました。卒論中間発表の途中、あまりのハードスケジュールのため、疲れてつい「コックリ、コックリ」している Y先生をビデオに撮った Wさん。ふすまを開けると部屋一面虫だらけで、ほりきで格闘してくれた Yさん。風る場から旅館の人だと思っ先生を呼んでしまった F先輩。朝食で先生が横に座って「これは、美味しいぞー。」と暗示をかけて食べさせようとしたにもかかわらず、ほとんど食べられなかった「拒食症」



のほく。そして常に注目をあびている F君は、何を考えていたのか風ろ場のせ  
んをぬいてお湯をほとんど流してしまうという偉業(?)を成し遂げました。

二日目、午前 6時に起床し、眠い目をこすりながら、銚子溪へと出発しまし  
た。生態観察は、オリエンテーションで教わった通りに、2メートル間隔に並  
んで、性別、年齢別に通過したサルの数を記録していきます。サルの方でも人  
間の好き嫌いがあるのか、サルの通る数が最低の人で 0、最高の人で150 頭と  
いう結果が出ました。観察中、いたずら好きの若ザルに後ろからスカートに手  
型を押しつけられた Bさん、頭から乗られた Mさん、握手していた Gさん、な  
ど楽しい情景が見つけられました。そしてすっかりサルの群れに同化していた  
Y先生の後姿。やはり研究者はこうでないとイケないですね！！

昼食後、今度は寒霞溪へと向いました。ここは緑が多く、眼下に広がる風景  
の素晴らしさに、皆睡眠不足もなんのその、ピクニック気分で急な山道をにぎや  
かに歩いていました。ここは、観光馬の通り道になっているらしく、気を抜い  
て歩いていると悲惨な目に会いました。しかしサルは一、二頭しか見かけず残  
念でしたが、ちょっとした気分転換で良かったと思います。ここではカメラ担  
当の Tさんが、レンズを落とし、山中を血眼で捜したのですが見つからず、あ  
きらめて車に戻ると、車の床の上に落ちていたという一幕もありました。

2日目の夜は谷口ゼミ恒例のコンパなのですが、出来たてのビデオォスライ  
ドを見ながらの討論会が白熱して、深夜 12時頃から始まりました。もう民宿  
の方も眠っておられて、スタッフは2つ先の港まで車を走らせて、ビールを買  
いにいく羽目になりました。一歩外へ出ると、信じられないほどの星が空にち  
りばめられ、天の川が薄すぼんやりと煙っていました。このまま砂浜へ行って  
一晩中見ていたかったです。お酒を飲んだり、星を眺めたり、大さわぎをし  
たりして、結局夜明けまでコンパは続きました。

さすがに3日目は谷口ゼミの強者たちも、ぐったりでしたが、谷口先生一人  
まだまだお元気でゼミ生一同感心していました。午前中の観察を終え、好広先  
生とは銚子溪でお別れしました。三日間ほんとうにお世話になりました。紙面  
をかりて、お礼申し上げます。

さあ、待望の海水浴です。が、その前に睡眠不足で疲れているので昼寝をし  
てから、ということになりました。ところが、皆ぐっすり眠り込んでしまい、  
とうとう泳ぐ時間がなくなってしまいました。「せっかく水着を新調したのに  
!」「女性の水着姿が見られるから来たのに!」とボヤク人もいましたが、大  
半の人は夢の中で泳いでいたことでしょう。

三日間、とてもハードなスケジュールでしたが、計画にとらわれず楽しく過  
ごし、事故もなく無事に帰ってくることができて良かったと思います。今回の

ゼミ旅行運営にあたって、会計の高木、山下(智)の二人をはじめ、多くの方々の協力があり、また谷口先生には様々な面でのご指導を頂き、深く感謝しております。

短い時間でしたが、好広先生とのお話し合いの中で、先生の研究者としての真剣な態度や、生きていくうえでの確固たるポリシーに触れることが出来、共感するとともに触発されました。また、同行して頂いたお陰で、今までゼミで、日本ザルの生態や奇形ザルについて追求してきたことが、具体化され、大変意義ある旅行でした。



好広先生の指導を受けて（寒霞溪）

## IV

### 授業の一風景

## ことばは沈黙に

甲南大学 理学部 三回生 北詰 由美

「ことば」とは恐ろしいもので、私は自分の考えを述べようとするが無口にならざるを得ない。それでも「ことば」を使わないことには、自分の考えをまとめることもできない。ましてや、他人に気持ちを伝えるには「ことば」は絶対に必要である。

弁舌拙くして、私の考えを友人に伝えられなかった時、その人から「説明ができないなんて、逃げでしかない」と言われ、大きなショックを受けた。確かに、思想は言語によって作られるのであり、説明ができない（ことばにできない）とは、誤魔化しであり、未成形の物質をこね回しているにすぎないのだった。己の混沌を云い得た時、自分の考えがわかるものである。ことばと思想は密着している。私たちは言語によって管理され、位置も意味も決められているのである。それ故、「ことば」の障壁は厚い。

たぶん私の想いは、常に私の内に有るのだ。それはずっと深い混沌の沼の中に沈み込んでいて、未成形の物質としてドロドロと練り込まれているのだろう。それを口の端に出そうと、ことばにしようとして汲み出すには大変な労力がいる。ドロドロとした混沌をさし出しても、相手には伝わらない。伝える為には整理し、秩序立てなければならぬ。言語化である。

しかし、たとえ易々と混沌の沼からことばを汲み出すことができたとしても、尚かつ障壁は消え去らない。

言葉は偉大な発明であった。それによって人間は直接行動に訴えることなしに、意志を伝え、問題を解決できるようになった。しかし言葉がいかに偉大であっても、根本的に人間への信頼、ひいては言葉への信頼がなければ、言葉は無力である。（三輪正「議論と価値」より）

どんなものにも人間の思考を通ず限り、「ことば」が介在してしまい事実を私は知っているのに、人間を信頼する為に、私はことばを信頼すべきだろうか。いや、ことばはあまりにも辛すぎる。

何故こんなジレンマに落ち込むのか。障壁が消えないのか。全ての概念は言語によって成っているが、言語で云いあらわせない「想い」もあるということだ。言語で云いあらわせない世界に属するものであるにもかかわらず、言語の論理や順序に無理やりあてはめようとしていたのが、誤まりだったのだ。私たちは言語から自由にならなければならない。

混沌の沼の底に沈んでいるのは、数々の風景、数々の詩、数々のことば、それと併に多くの想いたち。それらは音も無く深海に降り積もるマリンスノーの

ように、長い時間をかけてそこにたまったものたちだ。それらはゆっくりとこねられ、発酵しふくれあがっていく。

私たちは、言語化できるものだけを伝えても、満足できない。そこには想いが含まれないからだ。言語化できない想いこそを伝えたいと、人は生の中で自己表現の手段をあれこれと試しているのかもしれない。混沌の沼の底に沈んでいる、数々の言語化できるものたちとできないもの（＝想い）たち。この双方をことばだけによって伝えるのは至難の業である。そこで、言語化されたものに想いを込める作用が、絵画であり、音楽であり、その他一回性に徹することによって、絶対的時間の内に生き続けることができる芸術的創造作用である。それを成すことは全ての人の業からだろうか。

ことばの媒介なしに感情を表現する人、ことばなくして語りかけてくれる人を私たちはどれだけ求めていることだろう。そういう人にどれだけ安心を覚えることだろう。

ことばは沈黙に

光は闇に

生は死の中にこそあるものなれ

飛翔せるタカの

虚空にこそ輝ける如くに (A.C.ル＝グイン「ゲド戦記」より)

「ことばは沈黙に」これは「ゲド戦記」の「エアの創造」の第一行目である。この物語で主人公のゲドは寡黙な師オジオンから沈黙の尊さを学ぶ。「聞こうというなら、静かにしていなくては。」とオジオンは言った。ことばは沈黙から生まれる。沈黙から発せられたことばは、真のことばとして世界に力を及ぼす。話さないということは、伝えることがないということの意味しない。沈黙が支配する言語化できない想いこそが、長い時空間を越えて幾世代も伝わっていくものではないだろうか。

想いは人から人へと伝わり、単に伝わるだけでなく多岐発生する。一つの感動は多くの感動を呼び起こす。人はこの想いを伝えたくて生き、葛藤し、創造する。まさに、永遠のしっほを握まんがために、人の想いが限りある生の中に見え隠れするようだ。

一瞬一瞬の想いを伝えたい。

それは永遠であるはずだ。

瞬間の想いが永遠を駆けぬけるのであれば、私が死んでしまった後、私の想いはどこに行くのだろうか。死んで想いだけが残るのなら、この詩のように私も願う。

かわりにしんでくれるひとがないので  
わたしはじぶんでしなねばならない  
だれのほねでもない  
わたしはわたしのほねになる  
かなしみ  
かわのながれ  
ひとびとのおしゃべり  
あさつゆにぬれたくものす  
そのどれひとつとして  
わたしはたずさえてゆくことができない  
せめてすきなうただけは  
きこえてはくれぬだろうか  
わたしのほねのみみに

(谷川俊太郎「死と炎」)

沈黙は真だ。そこに全てが有る。ただ、そこに全てのものを見ることは難しいということ……。人は沈黙を聞くために、ことばを使う。長い長い道のりになりそうだ。



授業の一風景

## 伊勢旅行の思い出

甲南大学 理学部 四回生 迎 真弓  
和田 造一

私達卒業生は、二泊三日の予定で伊勢に卒業旅行に行きました。一月二十八日、難波集合で、近鉄特急列車に乗り込む。景色はだんだんと畑が多くなり、のんびりムード。少し雪が残っているところもありました。二時間ほどで伊勢に到着。昼食後、合志さんの知人のかたが、マイクロバスで、伊勢神宮、真珠工場へ連れて行って下さいました。伊勢神宮はとても広く、大きな木を見上げると、空に届かんばかりである。木々の中を歩いていると、何となく心が和み、久しぶりに静寂の中に入った様でした。外宮、内宮と回って、真珠工場へ。一階では、様々な真珠が所狭しと並んでおり、また、二階のお伊勢参り資料館には、お伊勢参りなどの様子を表した紙人形がたくさんありました。一つ一つ違っており、犬や猫までもが登場していました。見学が終わり、宿へと向います。部屋からは海が見え、なかなか良い宿でした。夕食では、この日帰る予定であった。F君が「十円玉」の為に残ることになり、場を盛り上げてくれました。九時頃まで、ワイワイやっていて、それから部屋で「大富豪」を夜遅くまでやり、とても楽しい一日でした。二十九日、二見浦へ。夫婦岩パラダイスで、海女さんの魚の餌付け、たくさんの魚、アシカショーなどを見学しました。そこには小さいけれど植物園もあり、木のオモチャで皆、童心に帰ってしばらく遊びました。夫婦岩は思っていたより随分小さかったです。午後は、ミキモト真珠島で海女さんの貝とりを見学しました。冷たい海面からヒューヒューという口笛が物悲しく聞こえました。ほんの数分でしたが、とても印象的でした。また、ここでは真珠の加工を順に説明して頂きました。色分け、穴あけ、糸通しなど思ったより大変手間のかかるものです。次はお待ちかねの、鳥羽水族館です。アシカショーは、「カン」と鐘をならす芸しか見れませんでした。しかし、お目当てのものは、バッチリ。ラッコです。ひっきりなしに頭や体をかいては、水の上でくるくる回る愛らしい仕草に、みんなしばらく見入っていました。いろんな魚たちを見て、鳥羽湾めぐりへ。この時、時間に遅れそうなので全員必死に走って駆けつけたのに、タッチの差で出航した後。ところが運良く乗せてくれる船が見つかり、いざ出航。船は我々しか乗っていなかったので結構自由に楽しめた。夕陽がとてもきれいに、海に映り、山に映りして、湾めぐりをより印象づけました。

三十日は松阪へ。松阪城跡あとでは美しい梅が咲き、眼下には松阪の町が広がっていました。ここに、なんと猿がいたのです。「谷口ゼミには猿はつきもの？」なんて思ってしまいました。松阪城をあとに、本日のメインイベントで

ある松阪肉を食べに郷土料理「北村」へと全員飛ぶように移動しました。

さすがに本場だけあってとてもおいしく（ちなみに神戸も肉の本場です。）  
焼肉のもくもくと立ちこめる煙の中、全員会話も忘れて黙々と食べていました。  
食事も終り、短い旅の思いでを胸に、私達は松阪を後にしました。

今回の卒業旅行で、三回生ながら参加して岩田君、村松君は旅行をより楽しいものにしてくれました。卒業旅行のみならず大学生活全般においてご指導して頂いた谷口先生には、この場を借りて卒業生一同心からお礼申し上げます。



伊勢にて



二見浦にて



# いのちと自然

第4号

1986年12月1日

事務局

〒656-04 兵庫県三原郡三原町市市423-1 (TEL.0799-42-1101)  
日本キリスト教団淡路三原伝道所内 (振替 神戸1-52086)

— 実践レポート —  
(第四回)

## 「奇形ザルと私たちの問題」

甲南大学文学部助教授  
谷 口 文 章

私たちの哲学研究室では、理論だけではなく、毎年現地における研修旅行を実践しています。その一環として、昭和58年7月26日、28日、淡路島モンキーセンターを訪れました。

現実には目の前でコータたち奇形ザルを見たことは、参加者すべてにとつて強烈な衝撃でした。そして予期しないこととしては、奇形ザルを含む群が予想外の明るさと健全さを示していたこと、つまり彼らは普通のサルと同じようにサル社会において当然の権利として自己存在を主張し、またそれが適切に認められていたことです。このことは私たちの奇形ザル一般についての暗いイメージを一掃し、むしろさわやかな、新鮮な驚きを感じさせました。研修後に行なわれた学生諸君の討論会においても

センターのサルたちから社会における人間関係やモラルを学ぶべきではないか、という意見が多数を占め、私たち人間の立場への反省が促されました。またセンター所長中橋美氏は一匹一匹のサルに深い愛情をもって接しておられ、彼の確固たる信念は一種の哲人としての雰囲気を感じさせました。

とはいえ、私たちは奇形発生の原因を究明し、その現象についての正確な事実を客観的に認識し、それに対する理論的価値づけ(哲学の任務)を行なわなければなりません。この原因は確定的なものとしては明らかにされていませんが、人間の利己的情念が原動力となつて、世界的な規模における経済的な富の追求と、その結果としての富の偏り——これがまた富の追求を加速する——によつて環境汚染や破壊が進められたことに依るといえるでしょう。便利さ、虚飾、見栄などに追われる現代人の心はまさに精神の貧困の状態にあると考えられます。私たちの心は真に何を指して活動しようとするのか、それを改めて問い直さねばなりません。奇形ザルの出現はこのような現代社会への警告の一

つでもあるといえましょう。

センターのサルたちは実に穏やかな集団でした。そして象徴的にも思える、一つの遊びを行なっていました。奇形ザルも含めて、彼らは水飲場で手を水の中に入れ、しきりと水の泡を作り、手にすくい上げ、ジッと眺める動作をしているのです。これは他のサル集団ではあまり見られない行動でしたが、私たちには水の泡に浮ぶ「にじ」を追い求めている「夢見るサルたち」のように思えました。このような温和なサル社会は、孤独で、ぎすぎすした、自己中心的な私たち現代人の夢のない生き方に痛烈な批判の矢を放つものでありましょう。

その後、私たちの研究室では奇形ザル問題を中心に、59年に自然農法家の福岡正信氏の農園を訪れ評論家の草柳大蔵氏との討論会をもち、60年には犬山モンキーセンター、京大霊長類研究所において資料を収集し、61年には好広真一氏の指導のもとに小豆島にて奇形ザルの調査を行ないました。

V .

卒業論文、ゼミナール論文、  
研究生論文要旨

カント「人倫の形而上学の基礎づけ」における道徳性概念について

文学部 4回生 房安 雄司

I. カント倫理学思想の特色

カントは道徳の問題において、善の定義から道徳法則を確立したのではなく、道徳法則の定義から善を確立し、道徳法則が責務の根拠として理性的存在者に認められるものであるならば、必ず絶対的な必然性を帯びねばならないと考えた。よって、道徳法則及び道徳の原理が経験的なものから区別され、そこに、道徳法則の持つ必然性や、人間の行状の持つ純粋性を保持しようとしたと言える。

II. 定言的命法の三つの導出法式

道徳的価値を持つということは、「義務」にもとづくことを指す。義務にもとづくとは、意志規定において、客観的には法則に従い、主観的には尊敬の感情に従うことを指す。よって義務とは、法則に対する尊敬の感情にもとづく行為の必然性を言う。

さて、意志を規定する上での必然的な、客観的な原理が意志に対する強制として働く。すなわち、「命法」は必然性を提示し、仮言的に命ずるか、定言的に命ずる。「仮言的命法」は、ある可能な行為がみずから意志する他のものに到達するための手段を持つところの実践的必然性を提示し、何等かの意図を条件として前提することにより行為を命令する。これに対して、「定言的命法」は、一つの行為を他の目的へ関係することなく、それだけで客観的＝必然性を提示する。法則というものが、無条件的な、客観的、したがって、一般に妥当する必然性の概念をみずから具えているという点より、定言的命法の提示する必然性は、意志に対する道徳法則の持つ絶対的な必然性なのである。仮言的命法と比較して、定言的命法は意志に対して無条件的な強制を示すのである。したがって、定言的命法の内容に、普遍性が含まれており、この普遍性は、自然法則を形式的に形づくることから、第一の定言的命法は、「汝の行為の格率を汝の意志によって普遍的自然法則とならしめるかのごとく行為せよ<sup>(1)</sup>」となる。定言的命法は、自己の格率が普遍的な法則となるように常に行為することを命じるのである。意志の客観的な原理において、形式が普遍的に立方する点であることと、

もう一点さらに、実質において客観的な目的があるとする。すなわち、理性的存在者はそれぞれが同等に、人格として本性そのものによって目的自体として存在し、単に手段であることを許されないと指摘する。自己が目的自身であるとする主観的な原理は、万人にとっても必然的な目的であり、意志の原理としての客観的な目的が、法則の根拠として十分であることを言う。そこで第二の定言的命法は、「汝の人格の中にも他のすべての人の人格の中にもある人間性を、汝がいつも同時に目的として用い、決して手段としてのみ用いないというように行為せよ<sup>(2)</sup>」となる。

さて、道徳の原理が、形式において普遍的立法である点と、実質において理性的存在者が目的自身である点とにあった。そして、カントはさらに、この二つの規定の統一として、十分な規定根拠を持つとする。その公式は自己目的たる個々の人格の意志規定が同時に普遍的立法となることにあり、すなわち、目的の国の概念へと導き、第三に、「あらゆる格率は、みずからの立法にもとづき、相互に調和してひとつの可能な目的の国 — ひとつの自然の国 — を為すべきである<sup>(3)</sup>」となる。目的の国は、共通の法則による体系的な結合であり、目的ならびに手段としての相互関係を示す。目的の国においての存在者は、普遍的に立法する立場においては元首として、法に服する立場としては成員としての地位であり、意志の自由によってのみ目的の国は可能となる。この目的の国の概念において、みずからに法則を与えかつ従うという理性的存在者の持つ尊厳さを示し、それ故、等価物としての交換が不可能なあらゆる価格を越えるという理性的存在者の絶対性を示すのである。

### Ⅲ. 定言的命法の可能性

意志とは、理性的存在者の持つ原因性の一種である。そして、自由とは、この原因性が意志を規定する外的原因から独立に働かう時、その原因性の特質を言う。意志の自由がみずから法則を与える、すなわち、自律であると前提されるならば、自由の概念の分析から道徳の原理が帰結する。このことが可能なのは、自由という点から考える場合に、我々が眼前にみる結果としての行為からは、我々自身を表象する場合とは異なる立場を採るためであり、物自体と現実との区別によってである。人間は純粋な活動を為す本来的自己と感性のもとにある自己を持つ。みずからを自由であるという時には、我々は知性界の一員であり、自ら義務に服するものとしては、感性界の一員であると言う。定言的命法はこのように両界に属する存在者に働くのだが、なぜ我々はこの強制に従わねばならないのかということに関しては、我々が抱きうる関心故にと考えられている。カントは、道徳法則に対して関心を引く故に妥当性を持つのではなく、逆に、道徳法則が人間に妥当する故に関心を引くのだと言う。なぜならば、それが知性としての我々の持つ本来的自己から発現されたものであるからとするのである。しかし、カント自身は、純粹理性がいかにして実践的でありうるかを考える時、哲学的根拠を離れ、もはや信念でしかないことを率直に認めている。しかし、このことを明らかにすることは、道徳の研究の最高の限界を明確

にし、理性にとっては許されたことだと考えるわけなのである。

### 結び

傾向性や感覚を持つことは我々の生きる上では無視できない条件のほずである。カントの倫理学思想はしばしば、形式主義と称されるように道德の主体の「生」の条件はまったく無視されている。それ故、非常に抽象的な人間像だと言える。しかし、我々はカントの言う通り、人間としての尊厳さ、他のものから区別される存在としての価値を持つ精神の働きがあることは忘れてはならない。

### 〈参考文献〉

本論文においては、「カント『人倫の形而上学の基礎づけ』（野田又夫訳）」（中央公論、世界の名著）を使用した。

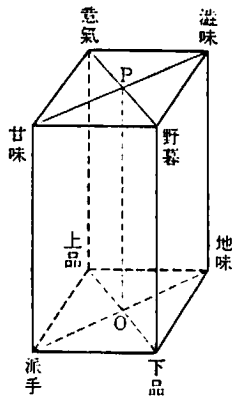
- ・和辻哲郎著、「和辻哲郎全集（第9巻）」（岩波書店）
- ・高峯一愚著、「カント講義」（論創社）
- ・矢島羊吉、「カントの自由の概念（増補）」（福村出版）
- ・和辻哲郎、「人間の学としての倫理学」（岩波書店）
- ・深谷昭三・寺崎俊輔編、「善の諸相とその本質（第10章 カント）」（昭和堂）

### 註

- (1) 「人倫の形而上学の基礎づけ」、P,266
- (2) 同上書、P,274
- (3) 同上書、P,282

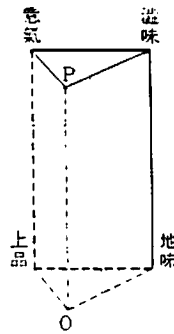
～九鬼周造の『「いき」の構造』をめぐって～  
 ——日本文化における「さび」を中心に——

文学部 研究生 小竹 代里子

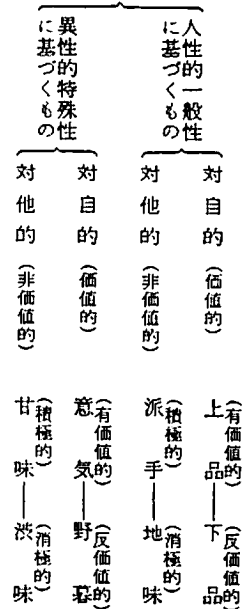


図①

(P. 44)



図③



図②

(P. 43)

(九鬼周造、『「いき」の構造』、岩波文庫、1985年より)

九鬼周造は『「いき」の構造』に於いて、「いき」という現象の構造を明らかにするため、「いき」を意識現象「内包的構造・外延的構造」と客観的表現「自然的表現・芸術的表現」とに分け、考察している。

小論では、九鬼が外延的構造に描いた「趣味体系の直六面体」(図1)をめぐって、趣味としての美的価値をもつ「さび」について論じていきたい。

九鬼によれば「いき」の外延的構造とは、「いき」と「いき」に関わる他の諸意味との関係のことで、他の諸意味として「上品」「派手」「渋味」

が、それぞれの対立者として「下品」「地味」「甘味」が挙げられている。それらを図2のように関係づけ、図形化したのが「趣味体系の直六面体」であり、九鬼はその図形が「他の同系統の種々の趣味をその表面または内部の一定点に含有する」（『「いき」の構造』P. 45。以下、書名省略。）と述べ、その例の一つに「さび」は「O・上品・地味のつくる三角形と、P・意気・渋味のつくる三角形とを両端面に有する三角柱」（P. 46。図3）と位置づけられ、その特色は「三角柱が三角柱のまま現勢的に存在する点」（P. 46）にあるとされる。

九鬼は「いき」の「内包的構造」についてその徴表を「媚態」「締め」「意気地」とし、「いき」を「垢抜けして（締め）、張のある（意気地）、色っぽさ（媚態）」（P. 29）と定義する。「さび」をこれに従って表現し、また、九鬼のいう「現勢的」という意味についても考えたい。

「さび」の考察に入る前に、「さび」に対するここでの立場を述べよう。従来の「さび」の研究では俳諧の松尾芭蕉を「さび」の完成者とするものが多かったが、ここでは復本一郎に従い、「さび」が不易の核を有しつつ、茶の湯・俳諧・和歌・連歌などのそれぞれの特質に応じて、また時代・個人によって最もふさわしい形に変質するという説（註①）を採りたい。

九鬼は「意味体験としての『いき』の理解を具体的な事実に特殊な『存在会得』でなくてはならない」（P. 18）と述べ、意味体験と概念的認識との間を不可通約的であるとしている。この立場をふまえた上で「さび」を考察し、私達の心の中で漠然としている、あるいは眠ったままの「さび」という意味体験を呼び覚ます足がかりとしたい。そして、このことは「いき」が「大和民族の特殊の存在様態の顕著な自己表明の一つ」（P. 17）であり、その研究が「民族的存在の解釈学としてのみ成立し得」（P. 92）たことに「さび」として通ずるであろう。

以下、復本の「さび」論を柱に九鬼の解釈学的な三角柱の「さび」を重ね合わせ、「さび」について考察していく。

「寂（さび）」はその成り立ちを心（ウカムリ）と叔（シャク）とし、家の中が人声もなくひっそりしている、ひいて「さびしい」意を表わす。内包的構造に於ける「さび」の第一の徴表は「孤寂」である。このように否定的なものが、どのようにして趣味としての「さび」となるのであろうか。このことを復本は「さび」を三つに分けて説明している。三つの「寂」とは、孤独をさびしいと思う人間味の強い「情思のさび」、荒涼の語で形容される自然現象としての「景趣のさび」、そして荒涼たるものを美として昇華し得る「境致のさび」である。復本によると、「情思のさび」は荒涼とした風景たる「景趣のさび」によってさらに深められる。しかし、その「情思のさび」は「景趣のさび」を美として昇華し得る「境致のさび」になる、というのである。

この昇華という一段高められた状態を禅の求める境地に譬えられはしまいか。その境地を『臨濟録』で「万法無生」（註②）と書かれた所があるが、この無は、有の反定立としての無ではない。生滅をこえた、有と無の総合・統一としての無である。また、禅家・秋月龍珉の言葉を借りるなら、

禪の求める境地は「人間存在成立の根源の自覚」（註③）である。この「人間存在成立の根源」への魂の憧憬の念が「さび」の根源といえよう。本来否定的である「孤寂」と肯定的である「さび」との間には、人間存在成立の根源に触れた喜びが横たわっている。このことを復本は「さび」の美を庶幾した人々の理想として次のように表現する、「孤独に徹することによって獲得される内なる『境致』としての『さび』と荒涼たる存在そのものとしての外なる『景趣』の『さび』との美的均衡」（註④）「内なる『さび』と外なる『さび』との交映・交感」（註⑤）と。否定的なものとの肯定的なものとの、内なるものと外なるものとの「総合・統一」、これが「さび」の第二の徴表出ある。

そして、このように否定的ものをその中に持つ「さび」は、それ自身暗く沈んだものと考えられ易い。しかし、そうではないのである。九鬼は光の影に「消極的影としてこの陰影と積極的影としての反映」（註⑥）を認めている。「さび」が暗い沈んだものとされ易いのは、消極的影としての陰影という様相を以って表現されることが多い（註⑦）からである。「人間存在成立の根源」は、暗く沈んだ仮の様相を以ってしても、なお積極的影としての反映という輝き（しかし、それは虚としての輝きではない）を放ち続けるのである。安田武は美的範疇に、さらに聖と俗という範疇を立て、「いき」は俗の美意識に入ると述べる（註⑧）。これに従えば「さび」は聖の美意識となろう。しかし、これは「神秘性」ではない。聖と俗との接点ゆえの「超俗性」である。この「超俗性」が第三の徴表である。

九鬼は「いき」を「わが国の文化を特色付けている道徳的理想主義と宗教的非現実性との形相因によって、質料因たる媚態が自己の存在実現を完成したものである」（P. 29）と述べる。これまでの「さび」の考察を重ね合わせ、これに習うなら「さび」は「わが国の文化を特色付けている禪思想という形相因によって、質料因たる孤寂が自己の存在実現を完成したもの」と言えるであろう。そして、この豊かな含蓄を持つ意識現象としての「さび」を「さびしさ（孤寂）をも包み込む（総合・統一）内に秘めた輝き（超俗性）」と表現したい。

ここで再び九鬼の「さび」にもどろう。繰り返すと九鬼は「さび」を「O・上品・地味のつくる三角形とP・意気・渋味のつくる三角形とを両端面に有する三角柱」と述べている。しかし、これまでの考察をもとに「さび」をより適確に表現するなら「人性的一般性と異性的特殊性を両端面に持ち、P・O・上品・意気の有価値的面と、P・O・地味・渋味の消極的面とに囲まれた三角柱」といえるだろう。ここで重要なのは、人性的一般性と異性的特殊性の総合・統一、外見的には消極的でありながらなおかつ有価値的であること、そして九鬼が趣味体系の具体的普遍者とするPO（P. 45）を含むことである。この三角柱の中で復本のいう「不易の核としてのさび」は三角柱からさらにPOへと集約されると考えたい。このことから私はPOを、不易の核としての含蓄を持つ「集積軸PO」と呼ぼうと思う。ただし、この「集積軸PO」は趣味の具体的普遍者としてPOにかえるのではない。「さび」が「さび」として内的に沈潜するのである。



そして「変質のさび」すべてが、三角柱に含まれるとすれば、P Oから三角柱内のある点あるいは範囲へと放散しつつ、茶の湯・俳諧などそれぞれの特色に磨かれて成立するといえよう。以上のことから九鬼が「現勢的」といったのは、さびしさから「さび」を感じる境地へ、さらにそれぞれの特色に磨かれていく「さび」の、その過程を示そうとしていると思われる。

九鬼は「『趣味』はまず体験として味わうことに始まる」(P. 85)とする。例えば、香の焚かれた茶室に於いて、釜のチンチンとたぎる音の中に静寂を聞き、障子に柔らかくされた光の中で花を軸を愛で、それらの共通感覚(註⑨)として茶の中に「さび」を「味わう」のである。

以上の考察から、九鬼の「さび」に関して、「さび」の持つ積極性を強調する必要があると感じた。三角柱において「消極性」は重要な位置を占めているが、九鬼が消極的といったのは「さび」の表現のみを捕らえたにすぎないからである。

「さび」についての研究は、これまでも数多くの人々によって為されてきた。それらの「さび」観と九鬼の解釈学的な三角柱の「さび」とを比較検討していくことで、相方の「さび」は相補われるであろう。そして相補われる点を明確にすることで、私達の意識現象としての「さび」は、より生き生きと輝き始めるのではないだろうか。そのことを経て、初めて私達は「さび」の客観的表現を理解し、それを九鬼とは別の形で、表現し得るのである。

#### ◎テキスト

- 九鬼周造：『「いき」の構造』 岩波文庫 1985年  
復本一郎：『芭蕉における「さび」の構造』 塙書房 1973年  
復本一郎：『さび—俊成より芭蕉への展開—』 塙新書 1983年

#### ◎註

- ① 復本一郎：『さび—俊成より芭蕉への展開—』 塙新書 1983年 P. 152。 及び、復本一郎：『芭蕉における「さび」の構造』 塙書房 1973年 P. 6~7。
- ② 『臨濟録』 岩波文庫 1984年 P. 55。
- ③ 秋月龍珉：『鈴木禅学と西田哲学』 春秋社 1971年 P. 51
- ④ 復本一郎：『さび—俊成より芭蕉への展開—』 塙新書 1983年 P. 121。
- ⑤ 復本一郎：前掲書 P. 121
- ⑥ 九鬼周造：『九鬼周造全集第四卷—文芸論』 岩波書店 1981年 P. 137。
- ⑦ 山口諭助：『美の日本的完成』 寶雲社 1944年 寂びの種々相参照
- ⑧ 安田 武・多田道太郎：『「”いき”の構造」を読む』 朝日選書 1986年 P. 21。
- ⑨ 中村雄二郎：『共通感覚論—知の組みかえのために—』 岩波書店 1979年 参照。

禅思想と自律訓練法  
——安定した精神のあり方をめぐって——

文学部研究生 植木通博

1. 序

私たちは、みな心楽しく生きてよきたいという願いをもっている。しかし、現実にはこの願いはなかなか適えられない。周囲の状況や他人の心あるいは自分自身の心にふりまわされてしまう。とくに、変化の激しい現代社会に適應するためには、私たちは緊張状態を強られて精神的動揺をきたしがちである。

この小論では、真に安定的な精神状況である「悟り」を示す禅思想と、心身の過度の緊張を緩和させる効果のある自律訓練法とを通して、現代社会において、安定した健全な精神を得るためにはどうすればよいのかを考えてゆきたい。

2. 涅槃——禅思想の立場から——

私たちの精神的苦しみの原因は、自分の実際の姿と、理想とする姿との間にギャップが生じてしまうところにある。(註①、②)

それでは、どのようにすれば、自己の分裂による精神的苦悩から脱出できるのだろうか。禅では、仏陀が菩提樹の下で得た宗教的体験を実際に追体験するきとによって、心の平安を得ようとする。(註③) 阿含経では、「涅槃」という言葉で仏陀の得た体験を表現している。涅槃とは、自由自在を体得した境地であるという。(註④) また臨済録では、

「他人の言葉や外境に惑わされぬことだ。平常そのままよいのだ。自己の思うところをせよ。」(註⑤)

と、説いている。

涅槃の境地とは、心が何ものにもとらわれず、まったく疑いをもたないことであろう。

この涅槃の境地へ至るためには、自分以外のだれの助けもかりることはできない。自分の力だけで進み、どうしようもゆかぬほど追いこまれた時、はじめて忽然と脱することができるという。このことを仏教では回心(えしん)といい、とくに禅宗では悟道とよぶ。(註⑥) 自分の心の奥底を厳しく見つめ通して、それを完全に信じきれた時、心の平安の境地である涅槃が訪れるのである。

「お前たちの一念一念が本来思慮分別を越えた心の働きであると悟れば、それはお前たちの報身仏そのものなのだ。」(註⑦)

3. 受動的注意集中——自律訓練法の立場から——(註⑧)

次に自律訓練法では、どのようにして心の安定を得ようとするのであるか。

自律訓練法は、自己催眠の一種で、筋緊張を緩和することによって、心

身をリラックスさせ、精神的緊張や過敏性を取り除く。具体的には、身体がリラックスした時に生じる変化を表現した短い公式を、心のなかでくりかえすことによって、自己暗示の状態を得る。このとき大切なことは、効果を得ようと頑張るはならないということである。「リラックスしなければ」という意識を働かせることは、かえって緊張をもたらす逆効果となる。すなわち「これから自分の体にどんな変化がおこるだろうか」というさりげない心構えとなる必要がある。この気持ちを「受動的注意集中」という。

受動的注意集中の状態は、軽い催眠状態で、このとき、意識のレベルがさがり、心身が未分離の状態にまで退行する。身体は、意志の力から解放され、身体自身の自律的機能によって、心身ともにリラックスする。そのようにして、日常抑圧されている無意識の流れに心をまかせることによっても精神の緊張をとり除くことができるわけである。

このように自律訓練法は、意識のレベルを下げることによって、緊張状態にある心身を解散させ、心の安定をとりもたせることができるのである。

#### 4. 結 論

精神の安定を得るための手法として、禅思想における榮榮の境地と自律訓練法の心身のリラックス状態とを比較して見てきた。両者は、宗教と心理学というまったく異なる立場に立脚しているが、そこには共通した考え方があるといえよう。それは、外部からの刺激に左右されることなく、自分自身の奥底にある「自己」を意識しそれに身をまかせることによって、安定した精神を得ることができると考えられることである。

この小論では、禅の修業法である座禅には、あまり触れることはできなかったが、座禅の境地である「調身」と自律訓練法の「受動的注意集中」は、基本的に同じであるという指摘もある。(註⑨)これを確認することは、禅および自律訓練法の体験を経た後の、私の課題である。

「自己が本来の自己であることが最も貴いのだ」(註⑩)(臨濟録 示衆第三節)

#### <参考文献>

- ①④⑥ 鈴木大拙著 「禅と日本文化」(岩波文庫)
- ② 氏原寛著 「臨床心理学入門」(創元社)
- ③ 鈴木大拙著「禅とは何か」(春秋社)
- ⑤⑦⑩ 朝比奈宗源訳著「臨濟録」(岩波文庫)
- ⑧⑨ 佐々木雄二著「自律訓練法の実際」(創元社)

## 「気」と日本人についての考察

文学部 四回生 合志 由美子

### 序論

日本語には「気」という語のつく言葉が多い。それらの言葉は、自分の感情を口にするをタブー視される日本文化の中で大きく育ち、我々の心を専有してきた。重要な決定事項や判断が、この「気」によって為され、今や日本は「気」の支配下にあると言えよう。では、この「判断の基準」であり、「最終決定者」たる「気」とは何か。その発生・作用から対策まで、考えてみたい。

### 「気」とはどのようなものか

「気」は日本にのみ存在するものではない。ヘブライ語の“ルーア”、そのギリシャ語訳の“プネウマ”、そのラテン語訳の“アニマ”。これらが、「気」と本質的意味を同じくするものである。目には見えないが、その場を包んでいると感ぜられるものが明らかに存在し、人の意志を左右している。これが「気」である。

### 「気」の醸成

物質から、心理的・宗教的影響を受ける、つまり、その物質の背後に何かあると感じること——臨在感。これが「気」を醸し出す原因である。

「気」の支配は、感情移入を前提とする対象の臨在感的把握に始まる。この把握が成り立つのは、感情移入を絶対化してそれを感情移入だと考えない状態である。感情移入が無意識化・日常化された世界、即ち、日本の世界である。そして、そういう状態になることを良しとし、そうさせないように阻む障害、または阻んでいると空想した対象を悪として排除しようとする心理状態が、感情移入の絶対化であり、これが対象の臨在感的把握、いわば「物神化とその支配」の基礎になっているわけである。

### 臨在感的把握の歴史的背景

明治の啓蒙家たちは、臨在感というものの存在に抵抗した。文明開化の科学的態度とは、野蛮な物質崇拜など否定棄却すること、そのため啓蒙的

科学的教育をすべきである、という姿勢であり、日本人が何故、物質の背後に何かがあるか、と考えるのか、また何故そこから身体に及ぶまでの強い影響を受けるのかを解明しようとはしなかった。明治の世に先進国学習はあっても「探究」の余裕は無かったのである。臨在感などというものがあると考えることは野蛮なことで、「無いこと」にしてしまうことが科学的であると考えた。しかし、「無いこと」にしても「在る」ものは在るのだから、「無いこと」にすれば逆にあらゆる歯止めが無くなり、そのため「氣」の支配は決定的なものとなり得た。

昭和期以前の日本人は、その場の空気に左右されることを恥と考える心的態度があったが、やがて政治的体制に「氣」の支配が出現する。天皇制とはまさに典型的な「氣」の支配の体制である。つまり、「偶像的对象への臨在感的把握に基づく感情移入によって生ずる支配体制」と言える。したがって天皇が現人神となって不思議はない。

### 「氣」の支配

「氣」の支配には一つの原則があることが明らかである。それは、一つの対象を対立概念で把握することを排除することである。対立概念で対象を把握すれば、たとえそれが臨在感的把握であっても絶対化はし得ないので対象に支配されることはありえない。この問題克服の鍵は「対立概念による対象把握」にあると言えるのではないか。

### 相対化による克服

対象の対立概念による把握とは、言わば相対化の一種である。相対化によって対象の被支配は無くなり、「氣」は消失してしまう。臨在感的把握の相対化こそ、「氣」への抵抗の一つの基本型であり、「氣」を醸成して支配を完成しようとする者が排除しようとするものである。

我々の世界は物神論の世界であるから、一神教の世界と違って、絶対化の対象が無数にあり、次々と移り変わることもある。多数決原理で決定が行われる民主主義社会では、決定の場における「氣」の支配は致命的である。そしてその場に臨んだ人々は平気で「氣」に責任を転嫁することができる。

以上のように、日本人の臨在感的把握の絶対化は、民族的・歴史的な原因があるということがわかった。しかし、民主主義社会に「氣」の支配は危険なものであると言える。醸成された「氣」の中で対象を対立概念として把握し、対象からの自由な位置に立つということは、可成り勇気のいることだと思われるが、それはロジス的判断によって可能となるのではないだろうか。

# 人工知能について

理学部 4回生 脇田 博代

## 序

今日、コンピュータの第5世代といわれ、コンピュータに人間のような頭脳を持たそうという不気味な時代がやって来た。「人工知能 (Artificial Intelligence, 以下AIと略す)」というのがそれだ。いったいAIとは何だろうか。AIの様相を表す応用例をいくつか記しながら、コンピュータに心的な諸性質を帰属させることができるのか、言及してみたい。

## 第1章 自動翻訳システム — 自然言語の曖昧性について 〔省略〕

## 第2章 コンピュータによる理解

コンピュータに”考える”機能を授ける作業の大部分は、コンピュータに物事を”理解する”機能を授けることともいえる。つまりコンピュータによる”理解”とは自分を取り巻く世界(外界)を理解できるということであり、そこにあるデータを意味を持つように組織化できるということである。換言すれば”理解”とは「人が自分の見聞きするものを自己の経験にあてはめるプロセス(シャンク、アベルソン共著『スクリプトと計画、目標、理解』)」と定義すると、ある記号を他の記号、あるいはそれらの記号の表す概念にあてはめる能力である、といえるだろう。しかし”理解の程度”については未解決となっている。

AI研究が始められて以来、心がどのようにはたらくのかという問題は、多くのAI研究者によって研究されている。心理学者が人間の思考方法を理論化するのに、人間そのものを実験に使って実証しようとするのに対し、AI研究者はコンピュータ・プログラムを作ることでそれを実証する。我々人間は言葉や洞察、意識、思考といった心が作り出すものによって心自体を知る。入ってくるものと出ていくものについては知っているが、その間のプロセスについてはほとんど何もわかっていない。ところがコンピュータの場合、状況はまったく反対である。プロセスについてはすべてわかっている。プログラマーはキーボードを叩くことによってコンピュータの機能を明らかにできるし、プログラムを0と1の機械語に翻訳し、二進法でそのプログラムがどう機能しているかを説明することもできる。

## 第3章 概念依存

自然言語を処理するとき、それが持つ曖昧性の問題にぶつかる。1つの単語や句がいろんな意味を持ち、それらのうちのどの意味なのかは文脈次第である。同じ構造を持つ文がまったく異なった意味を持つ場合もあり得る。例えばシャンクはこう指摘している。

1. "John shot the girl with a rifle."

ジョンはライフルで少女を撃った。

2. "John shot the girl with a long hair."

ジョンは長い髪の少女を撃った。

逆に表現は違うが意味は同じということもある。

1. "I like books."

2. "Books please me."

が、その例で、この二文とも「私は本が好きだ」という意味に他ならない。そこでシャンクの「概念依存 (= CD理論)」を紹介しよう。

CD表記はすべての行為をプリミティブ (知識表現の最小基本単位) のどれか1つに対応させる。一つ一つのプリミティブに幅広い意味を持たせているのだ。例をあげると、

"ATrans", 与えること (giving)、取得すること (taking)、買うこと (buying) 等、所有や支配といった抽象的なものの移転を意味する。

"PTrans", 歩く (walking)、乗る (riding)、行く (going)、置く (putting) 等、ものの実体的な移転を意味する。

"MTrans", 精神的な概念、すなわち会話、文章などを通じた情報の移転に使われる。

など計11個のプリミティブがあり、このうちのどれか1つの意味に英語で表現しうるすべての行為が含まれる。するとCD表記では

"We go to a restaurant."

→ "We PTrans ourselves to a restaurant."

"We give our order to the waiter."

→ "We MTrans our order to the waiter."

"We pay for our meal"

→ "We ATrans some money to the cashier."

と表現される。こうした表現は詩的な資質を失ってしまった代わりに、意味表現の曖昧さもない。

AI研究者の多くは、意味を表現することこそがコンピュータに知能を持たせられるかどうかの鍵だと考えている。それには人間が駆使する膨大な知識を明確にし、組織化しなければならない。人間が思いのままとする知識には、我々が知能と関連づけて考える複雑で高く洗練された知識と、"常識"と呼んでいるふつうに日常利用している知識とがある。常識は、人間の経験や能力の基礎となっているものであり、普段、常識を吟味する者はいない。しかし常識が人間であることの本質を規定している一つの要因であるとする、この本質をコンピュータに伝えなければならない。何千年もの間に世界中に蓄積された知識とその作用形態。この人類の経験全てを摂取し、コンピュータ・コードにこつこつと書き加えていくのである。さらに、与えられたデータを処理するだけでなく、コンピュータがそれを"理解"し、それから"学習"できるようにコードを体系化することも必要である。

#### 第4章 AIと社会実現

既存のAIプログラムも、それを走らせるコンピュータも、あらゆる面において人間の認知能力に対してはかなり劣るだろう。しかしながら、やはり様々な面において、コンピュータのする仕事の方が人間のそれを上回り、特定の目的のためには人間による制御では不十分である状態において、あたかも心がなすかのような制御能力を示す。このような可能性は軍事について、大きな関心を呼んでいる。将来、知能ある小型ロボット人間が戦場をかけめぐるともかもしれない。しかし一方で、人間には適さない環境や危険を伴う場所、例えば海底や宇宙空間等においての作業を代行してくれる。しかもコンピュータは人間のように、飽きたり怠惰になったりすることはない。単調で繰り返しの多い生産ラインの作業をこなすのに適してくる。そうすると経済全般に大きな変動を与えるであろう。しかしながら人間が、自らつくり出した社会に対応できるだけの資質を備えているのか、少しばかりの不安が残るといえる。

#### 考察

第5世代コンピュータは「社会において実際に人間の知的活動を助ける」ことを狙っている。ところがAIの最終的目標はちがう。「人間と同じ様な知的作業を機械にやらせることであり、究極には人間そのものを真似ることである。しかし認知的な心的状態 — 例えば信念 — のように、容易にコンピュータによって実現できたとしても、快楽や苦痛などの感覚質をコンピュータに実現することはできない。たとえ感じることでできるコンピュータがあると主張したとしても、それは例えば痛みが「真であるか否か」を明らかにすることであり、「真の痛み」にいかにか類似する行動を模倣することができるかを証明するにすぎない。

「来るべき世代は、人間がテクノロジーに対して支配権を握る最後の世代となるだろう。それから先は、テクノロジーが人間に対する支配権を握って離さなくなってしまう。一世代の持ち時間は短いが、まだいくらか時間は残されている。」(R・L・ハイルブローナー)

我々はコンピュータが選択の可能性を探る道具であって、実際の決定を下す道具ではない、と認識しておかなければならない。



## ～人間存在の二重性～

理学部 四回生 飯塚 陽子

人類は愛と憎しみ、やさしさと残虐性という相反する感情と性質を、個々の人格の中に、また集団の中にも持ちながら、社会をささえる様々な高度なくみも、独自に創りあげてきた。

動物学者からみると、人類という生きものは、あまりにも哺乳類というカテゴリーからはみ出す部分が多く、自らが創出した文化環境の中で、生活するようになった。そのため自然的存在という形態からはみ出してしまった。生物の一種であるはずなのに、どうしてこのような奇妙な生物が誕生したのかを、動物の進化の過程あるいは生活様式の中に、萌芽としてあるいは連続した性質として、認識していきたく思う。

人類の行動や社会を、生物学的に考察するためには、親類筋にあたるサル類に焦点をあててみます。サル類は一般の哺乳類とは、質的に異なり別のコースを歩んで進化してきたと考えられる。それは、まず、は虫類が生活の場として開拓できなかった森林の樹上に独自の地位を獲得した事に始まる。サルにとっては、この森という環境は食料も豊かで、温度・湿度等の変化が少なく競争相手は少なく、また捕食者としての天敵がいないという、いわば楽園みたいな所であった。そして、サル類が獲得した諸特性、それから由来したであろう人類の特性もまた豊饒な楽園からの所産としてとらえねばならないことになる。

「個性」は、人間にとっては「個人の社会的生命」のようなものであるが、一般の動物社会では、個性の持つ意味は小さく、個性はなくとも社会は成立する。多くのサル類は、気ままな遊動生活を行っていてゆるやかな群れで生活しているが、そのため個体の行動の自由度は大きく保証され、そこには個性が生まれる素地がある。また一方、学習能力が秀れていることも個性の獲得と発達に大きな土台となっているであろう。この個性の形成という問題は、文化現象の発生しうる生物的基盤について考える上で深い関連を持っている。

文化を支える基本的な機能は伝承であるが、動物社会では子供が母親から学ぶことが多い。つまり学習するためには親子関係の緊密な持続が必要となる。サル類においては、ポピュレーションの自己調節作用のため、出産数は一頭、成長速度は遅いといった適応が生じた。これは母子関係の持続を可能にした。さらにそのことは、文化の発生の大きな基礎となっていた。

「社会的な問題」と「文化の継承」に関しては群れ型社会では、文化をはぐくむ母体としては、豊饒であるといえる。そしてサル類は、文化を持つのに優位な立場にいたことになる。しかし反面、文化が個体の行動を拘束するということにもなり、群れを離れると、文化的制約から解きはなたれ、「盲目的な自由」の下に行動し、文化的な社会がなければ生きて行けな

くなる。

適応というのは、原則的には自然環境に対してとられる種としての反応である。ところが、動物が高等になって複雑な社会生活を営むようになり、社会そのものが一つの環境としての性質を強めてくる。特に集団生活をする動物には、そのことが著しく、サル類では群れをつくることも性行動も社会から学習することに依存するようになる。つまり、適応行動はいわば生命系のごく自然な運動であり、生物の世界はどのような種でも平等に生きる権利があるように自然の構造が出来上がっている。そしてそこには善も悪もなく、生命体の生活が全肯定されている世界なのである。しかし、文化環境の創出は、生物の自然存在の枠組を破る非自然を出現させた。つまり文化とは、プラスとマイナスの両面価値を含んでいるのである。進化していると思われる哺乳類においてであっても知能といってもまだ低く、遺伝的にプログラムされた方が優先していた。ところが高度に進化した人類は、様々な種が共存することを忘れ自らも従うべき自然の掟をも無視して、いわゆる文化の創造により、自分たちだけの幸福と安寧を中心とした大それた計画を実現しようとした。その結果、いずれ自分自身を滅ぼそうとしてしまうことにもなろうとしている。

人類における二面性の存在理由も、やはりサル類の中にみることができる。それは天敵がないという楽園の中で進化したために、ポピュレーションの調節を行わざるを得なくなり、自分の社会の中に自己の存在を脅かす者をつくる必要にせまられた。このことは草食獣的な性格と肉食獣的な性格をも持ち合わせたことになったことを意味している。これは一方で草食獣的な性向と考えられる思いやり、いたわりといった美德を生み出し、他方で肉食獣的な性向である攻撃性を残虐性へ転化させる動力となった、とたとえられよう。

以上の様に見てくると高度な精神活動や文化を持ち、一見すべての動物からかけ離れたかのようにみえる人類もいろいろな原型をサルの中にみることができたのであるが、やはりサルから進化したことも忘れてはならない。人類の中にある悪の原型はもともと、サルの進化の中のごく自然に芽生えてきたものであったように思える。そして人類における精神の豊かさ、高度な文明といった進化もごく自然に行われてきた。しかし、人類は自然に進化してきたにもかかわらず、反自然的存在でもある。そのような人間存在の二重性をしっかりと見つけ、謙虚に地球全体の生態系に貢献できるように反省しなければならない時期に来ているといえよう。

## 「近代的豊かさ」からの脱却

経済学部 4回生 能丸 耕太郎

産業革命以来、化石エネルギーの使用と機械化によってもたらされた、非常に大きな生産力を背景とする近代工業化社会（近代資本主義社会）は、人々にかつてない「豊かさ」と「文化的」生活を与えたとされる。

しかしその一方で、「近代的豊かさ」の追求は新たに深刻な問題を生み出し、また自然環境の豊かさや精神的豊かさや時間のゆとり等、多くの豊かさが、この「『豊かさ』に敵対するもの」として切り捨てられてきた。

拡大再生産とそれを裏付ける絶えざる消費の拡大の上に築かれた「近代的豊かさ」＝「文化的生活」はその代償として、自然環境の破壊をもたらした。その破壊は深刻であり、高度成長時代にはそれが人の命を奪うような事態を度々引き起こし、公害として社会問題化した。現在低成長時代に入り、一頃のように騒がれることは少なくなったが、今も環境破壊は地球の規模で進行している。

また、豊かさの追求のバイプロダクツとしての汚染問題のみならず、過大な生産力を手にした人類は、今や地球の大きさの制限さえ問題にしなくてはならなくなっている。19世紀初頭に英国の経済学者リカードゥは、土地の有限性からの制約により資本主義的発展は「終焉」としたが、この「収穫逡減の法則」が地球の全資源に言えることは、オイルショックを契機に資源枯渇問題が注目されるようになるまで問題にされることはあまりなかった。そのうえこの問題には、リカードゥの用意した「安価な穀物の輸入」というような逃げ道は無いのである。

また、しばしば環境保護と経済成長とは対立するものという観点に立って議論がなされる。もちろん今までの有形財の大量生産、大量消費によって成り立ってきた成長が環境を破壊してきたことは事実である。しかし逆に「環境保護は、経済成長を妨げる」、「環境破壊は『文化的』生活を送るための代償である」というのは、従来の（経済）財の観念や経済指標（例えばGNP）には、環境（例えばきれいな空気の価値）などが入っていない事が問題なのであって、その結果環境の保護が社会的損失をもたらす事になっているのである。ここに私達がいかに近代工業化社会（資本主義）的価値観に束縛されてしまっているかがうかがえるのである。

先進国では物質の洪水の中で生きており、現在の低成長は、消費の高度化、即ちモノ離れが進んでいるからで、これはもう魅力的な消費財がなくなってしまったからであると言った議論がなされたりする。しかしその一方で生活に必要な最低限の物資を手に入れることさえままならない人たちが大勢おり（そちらの人々の方が多い）、その中には生きて行く食料さえ確保できず、餓死して行く人たちも多いのである。このことを考えるとその第一の功績であるとされる「物的豊かさ」さえ現代社会は、十分に供給す

ることが出来ないのではないかと、思われるのである。

この問題をマルサスの（過剰）人口論に帰することは容易であり、気が楽なことであろう。しかし、先にリカードゥが海外から安い農作物を輸入することにより収穫逓減の法則より生じる資本主義の限界を乗り越えられるとした事について少しふれたが、近代工業化社会のこうした側面が、少数の先進中軸国とその原材料供給地としての多数の周辺国（発展途上国）といった歪んだ世界分業体制を生み出し、その搾取の体系がこの問題の原因となっていることも見逃してはならない。

現在、大変な努力がなされているにも拘らず、経済は世界的に停滞から抜け出せずにいる。その長期停滞の原因はいろいろと論じられているが上で述べたようなこともその底流の中にあることは事実であろう。

そうした中でもテクノロジーは進み続け、物の生産には益々人手はいらなくなり、失業問題は益々深刻化している。そこでワークシェアリングの必要が生じてきているのだが、人々が他人より多く稼ごうと思う限り、その実施は、事実上難しいようである。（レスター・C・サロー、『ゼロサム社会』182ページ）

サローは成長経済でパイを大きくすることに向けられていた人々の関心が、パイを大きく出来なくなってしまうと、奪い合う競争になって行き益々競争の激しい社会になると言う。

近代的豊かさの価値観にとりつかれた我々には、暇なことは価値のないことであり、それどころか罪であるようにさえ思われてきた。物質的ゆとりだけではなく、時間的ゆとりや、精神的ゆとりにも価値があるはずである。

最近になって精神的荒廃が問題になってきているが、これも、近代的豊かさの追求の裏で置き去りにされてきた価値＝豊かさからの報復なのかもしれない。

近代的豊かさから脱却し、新たな価値体系の創造がなされるべき時が来ているのではないかと。

#### 〈参考文献〉

- ・柳田侃、野村昭夫編著、『国際経済論－世界システムと国民経済』、ミネルヴァ書房、昭和62年。
- ・レスター・カール・サロー著、岸本重陳訳、『ゼロ・サム社会』、TBSブリタニカ、昭和56年。
- ・堺屋太一、『知価革命』、PHP研究所、昭和60年。

## 数学における証明の意味

理学部 4 回生 和田 浩一

### 序論

数学における中心課題は定理を証明することにあるが、真なる定理における証明の意味はいかなるものであろうか。

数学の定理は、推測によりその形が構成され、証明によってその真なることが示される。ある予想を立てることが、そのなされるであろう仕事の半分が終わったと言われるほど、真であると思われる予想の数学的な定式化は重要である。しかし定理として成立したならば、証明の素晴らしいアイデアとその方法は、真なる定理の内容以上にその価値は高いものと思われる。

以下において、私が論じることは、数学的証明が一般に感じられているほど論理的なものでなく、人間同志の共通の観念を通し、互いを“納得”させる人間的な手段であるということである。

### 〈何を証明とするのか。〉

いまある定理の証明が、与えられたとしよう。証明の理解は、その証明を理解しようとする人の、数学的知識水準により大きく左右されることは明らかであろう。ある人が、その証明を理解することができないと思うならば、その証明はその人にとっては定理の証明とは呼ぶことのできないものになるであろう。他方、この証明によって定理が真であると認識した人にとっては、定理が真であるという確信をもつものであろう。さらにもっと極端な場合に、定理を見てすぐに、この定理は真であると確信を得た人がいたとする。証明は、不必要であろうか？

以上のように、証明は人によって異なるし、また重要なこととして誤りを含んでいる可能性がある。こうした事態に対し、証明の形式化が行われるようになったのである。

### 〈歴史的考察〉

古代エジプトやギリシャの幾何学においては、“直観的に明らか”という判断がよく用いられていたが、これは“絶対確実”からほど遠いうえに、しばしば誤りを犯してきた。

その後、ユークリッドの「幾何学原本」以後、公理的方法がとられるようになった。しかし、19世紀から20世紀にかけて大きな変化が見られる。19世紀末まで証明の概念は心理的な色彩が強かったが、非ユークリッド幾何学の成立に刺激され「証明の概念をもっと深く解析し、“直感的に明らか”といった証拠を文脈中でも制限する必要がある」と考えられ始めた。証明の概念の深い解析は、ドイツの論理学者フレーゲを始めとする論理学

者達によって進められた。彼らは、“形式的証明”という新概念を導入した。ここで形式的証明というものにふれておこう。まず証明規則を公理に適用し、公理から直接に導かれる新しい文章を作る。次に同じ規則を新しい文章あるいは、新しい文章と公理の両方に適用し、さらに新しい文章を導き出す。以下、この操作を繰り返す。この操作を有限回繰り返した後、ある文章が得られたとしたら、その文章は形式的に証明されたという。

### 〈形式的証明の限界〉

証明というものを素直に見直すとそれは、文章（命題と考えてもよい）を真であると決めることである。このことから、証明において真という意味自体が、問題となることがわかるであろう。ここでは、真の細かい議論には立ち入らないが、簡単にその意味に対する考えかたを述べておこう。

真を定義すると

“P”が真であるのは、Pであるときかつそのときのみである  
(このPには文章がはいる)

となる。ところが、このような定義において普通一般の言語体形では、二律背反に陥る。例えば、次の文章を考えよう。

(1) 谷口研究室61年度年間活動報告書の91ページの(1)の文章は偽である。

この文章をSとすると

(2) “S”が偽であるのは、谷口研究室61年度年間活動報告書の91ページの(1)の文章が偽のとき、かつそのときのみである。

となる。さらに真の定義より

(3) “S”が真であるのは、谷口研究室61年度年間活動報告書の91ページの(1)の文章が偽であるときかつそのときのみである。

となる。(2)と(3)の比較より矛盾がわかる。

このような二律背反に陥るために新たな制限された言語体形を用いて、二律背反を避け、その制限された言語を用いることによって真を定義するのである。このような言語体形として“真の定義”が定式化され、その包含関係が議論される言語、メタ言語といわれるものが用いられる。

以上のもとに形式的証明の限界について考察する。もともと形式的証明を導入しようとしたきっかけは、集合論における逆理を発端とする基礎論の問題を解決する方法として数学を形式的なものと考える公理主義によるのだが形式的証明導入の大きな要因は次の2つと考えられる。

1. 数学の証明における証明という意味の不明確さを取り除く。

2. 形式化することにより数学的問題を効率的に解く。

ところがこの2つの要因は、形式化によっても解決されえなかったのである。

1. については、数学的に真である文章の集合と形式的証明可能な文章の集合が一致しない。即ち数学的に真であるという概念を形式的証明を行うという概念で置き換えることはできないのである。2. についても、形式

化することによって直感が効かなくなり、直感を働かせることは問題を解く大きな推進力になっているのであるから問題を効率的に解くことはかえって達成されえないように思う。また形式的証明の大変さは「1ページほどのプログラム形式化して完全に形式的証明をつけると600ページになった」という例もあるほどで2. のようなことは考えにくい。このような所に形式的証明の限界があるのである。しかし形式化による研究は超準解析の発端を与えるなど成果は大きい。

#### 〈まとめ〉

形式化の行きずまりにより証明の意味は確定されるようなものではないように思われる。ラカトシュその著書「証明と論駁」(Proofs and Refutations)の中で次のように書いている。

この事例研究の中核は数学の形式主義に挑戦するが数学的独断論の究極の立場には直接挑戦はしないその控え目な目標は、略式の擬一経験的数学が、疑う余地のない確立された定理の数を増加させることによって成長するのではなく、証明と論駁の論理によって思弁と批判による推測の絶えざる改良によって、成長するものであることを詳細に示すことである。

私たちは、ある性質をもったものの一般化された定理を証明する場合、まず特殊化した場合に証明を行いそのアイデアを一般に拡張して適応する場合がある。このことは、証明の意味付けに、大きな指針となる。上述のことをもう少し詳しく述べると、特殊化することによって定理に対する直感を養い、それによって定理の一般化に対する目を持つようにさせるのである。従って数学における証明の意味は、数学的訓練、言い換えるならば、数学的直感を自分自身の中に構成していくことによって得られる共通観念を追及することにあるといえるのではないであろうか。

#### 参考文献

- R. J. デービス/R. ヘルシュ著 「数学的経験」  
A. タルスキー著 「真と証明」  
岩波数学事典

VI

研究室活動概要



# ヒュームとスミスの会報 第9号

1987年2月20日

モラル・センスとコモン・センス

——板橋重夫『イギリス道徳感覚学派』と

篠原久『アダム・スミスと常識哲学』をめぐって——

コメント 1.

八幡清文

最近のスコットランド啓蒙研究では、ヒューム、スミスに限られぬ多様な関心から、新分野が精力的に開拓されているが、板橋、篠原両氏の著書は、それぞれモラル・センス学派とコモン・センス学派について多面的な把握を意図した労作である。両書のテーマは深い関連性をもつが、ここでは板橋氏の著書に関して若干の論点を提起してみたい。

本書のキー・ワードである「モラル・センス」が一体いかなる性格をもつのかは、コモン・センスとの比較の上でも重要な問題であるが、板橋氏はシャーフツベリも（P.51）、後期のハチスンも（PP.204-05）、モラル・センスに理性的要素を認めたと主張し、また、バトラーの言う良心（＝理性）はモラル・センスと呼びうるものであると解釈している（P.148）。そうすると、合理主義との対抗で生成したとされるモラル・センス学派の「モラル・センス」は単なる感覚ではないことになる。これにはモラル・センス学派において、広く理性と感覚あるいは理性と感情という基本問題が存在することが示唆されていよう。ヒューム、スミスはそれぞれ、これら三者と比べて道徳理論への感情論的接近をさらに徹底させたのか否か、という点も重要な問題となるであろう。

本書は各思想家における自己愛（利己心）の把握にも注意を払い、シャーフツベリ、バトラー、ハチスンはホップズ＝マンドヴィルの利己心の体系に対抗して仁愛の原理を強調しながらも、利己心の社会的意義をそれぞれの仕方で承認していたと

分析している（PP.52,142,219）。だがこの分析からは、彼らでは利己心の社会性の理論化がまだ未熟であり、したがってホッブズ＝マンドヴィルを十分に克服しえなかったことを確認できるとともに、彼らとヒューム、スミスとの明らかな距離を読みとることもできよう。ヒューム、スミスの同感理論は、相互の相違点を含みながらも、シャフツベリらの限界をモラル・センス学派の内部から越えることによって、マンドヴィルを克服することを一つの意図としたものであり、モラル・センス学派に新たな階段を画したとも考えられよう。本書の成果を踏まえてヒューム、スミス研究がさらに進展することが期待される。

## コメント 2.

谷口文章

<はじめに> 評者に与えられた仕事は、標題の二著についてのコメンテーターであった。しかし分担量と時間の制約のため、篠原氏の著作を中心としてコメントすることになり、従ってこの紙面でもそのようになる。しかし板橋氏の著作について一言述べるなら、シャフツベリ、マンデヴィル、バトラー、ハチスンという、従来まとまった研究がなされていない分野を開拓したことの意義は大きいといえよう。

<本書（篠原著）の意図> 本書は、コミュニケーション論（レトリック、論理学、道徳＝性格論、外部世界の認識）にみられる、スミスの基本的思想構造を再検討することを目的とし、同時にスコットランド常識哲学の形成・展開過程にスミスを紹介させて、スコットランド啓蒙思想における動態過程への接近を試みようとするものである。

<本書の構成> 第1章では、十八世紀スコットランドの宗教界と文芸諸団体を考察することにより、スコットランド啓蒙思想が開花する前提条件が示され、著者のいわゆるコミュニケーション論が導入される。第2～第4章では、コミュニケーション論の展開で、レトリック論、論理学、外部感覚論の分析の後、スミスの思想

構造が明らかにされ、彼の常識哲学的思考の特徴について言及される。第5章では、当時のスコットランド民兵論が紹介された後、スミスのそれとの関係に触れられ、常識哲学への橋渡しとなる。第6～第7章でケイムズとリードの常識哲学の形成・展開が究明された上で、彼らのスミス批判がなされる。そして第8章でスミスの実践道徳体系を、性格論を中心にスミス自身の常識的思考性を強調して総括される。

<書評> 本書は、コミュニケーション論を軸とした、スミスの道徳哲学体系を展開したユニークな労作である。すなわち前半において、哲学論文集や文学論の中に『道徳感情論』の論理的伏線を見出し、後半において、ヒュームでは割合論じられてきたが、スミスでは正面から殆ど研究されることのなかった、ケイムズやリードの常識哲学との連関が明らかにされる。この意味で、本書はスミスの初期の作品の精緻な解明と、常識哲学の思想史的研究として画期的な業績であるといえよう。ただ、望蜀の感がなくはないが、以下の点について少し評者と見解の相違が見られるように思われる。法学講義新版(1762～63年)とコミュニケーション論との関係、民兵論の章が本書の構成からやや異質な印象を与えること、リードのスミス批判をスミスの章よりも先に配列したこと、若干の哲學術語の用法等である。ただし、それは10年にわたる論文を集積したこと、また思想史的観点の分析によるためと推測される。

ともあれ、本書は、著者の文献を渉猟する力量を示しており、文献的にも価値が高く、また未開拓な分野を拓いたものとして、スミス研究に新しい光を投じたものと評価されよう。

[1986年10月10日 国学院大学にて行われた

社会思想史学会インフォーマル・セッションでの報告要旨]

---

<ヒュームとスミスの会報発行> 〒236 横浜市金沢区六浦町 4834

関東学院大学経済学部 星野彰男 TEL.045(781)2001

題目：円形脱毛症の心理療法  
——箱庭療法と催眠・自律訓練法との併用の試み——

1. 目的と方法

〈目的〉円形脱毛症 alopecia arcata の心理療法の治癒過程を報告すること

〈方法〉箱庭療法、催眠法、自律訓練法を次の三段階に分けて進める

(A) 箱庭(治療前)——他者催眠——箱庭(治療直後)

(B) 箱庭(治療前)——他者催眠——自律訓練法——箱庭(治療直後)

(C) 箱庭(治療前)——自律訓練法——箱庭(治療直後)

2. 本例

1) クライアント：19才から20才になった男子、4人兄弟の長男  
高等専門学校5年に在学、神経質、真面目、頑固で自己主張が強い

2) 家族歴：

(i) 家族構成

父、死去(昭和52年、45才、本人高校2年の時)

母44才、次男18才、三男16才、長女13才

(ii) 両親の性格

父親はよく気がつき、子供好きであったが、厳格であった。母親は我慢強く、協調性があり真面目であるが、他方あまり社交的でなく、物事にこだわり自我意識が強くて友人が少ない方である。

(iii) 兄弟関係

次男とは割合にうまくいくが、三男とは気があわない。妹とはあまり話をする機会がない。

3) 成育歴：正常産で著患なし。

4) 現病歴：円形脱毛症(小学6年から脱毛し始め現在に至る)

症状：頭頂部 長径12cm 短径6cm

；右側頭部 長径12cm 短径7cm

### 3. 治療過程

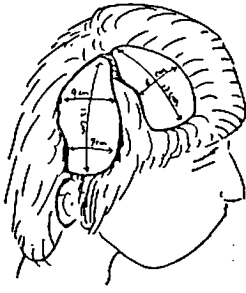
| 面接 | 日付け   | 箱庭         |               | 催眠                      | 発毛                 |
|----|-------|------------|---------------|-------------------------|--------------------|
|    |       | ◎治療前       | ☆治療後          |                         |                    |
| 1回 | 5月2日  | ◎お地蔵さん     | ☆長い髪の毛の少女のテーマ | 他者催眠                    | 0 cm               |
| 2回 | 5月23日 | ◎無機的な感じ    | ☆生命的なものへ      | 直接暗示<br>禁止事項「ストップ」      | うぶ毛                |
| 3回 | 6月10日 | ◎マンダラの要素   | ☆自我の高まり       | 禁止事項<br>重感の感得           | 約1.5cm             |
| 4回 | 6月24日 | ◎長い髪の毛の女の子 | ☆駅            | 覚醒暗示、運動・知覚<br>催眠を確定に    | 約1.9cm             |
| 5回 | 7月4日  | ◎自我肥大      | ☆渡河           | 治療的退行による絵画              | ①2.1cm<br>②2.5cm   |
| 6回 | 7月11日 | ◎自我の分裂から   | ☆統合性へ         | 他者催眠中に自律<br>訓練法         | ①2.3cm<br>②2.5~3cm |
| 7回 | 7月26日 | ◎エネルギーの循環  | ☆落ち着いた楽しさ     | 深催眠(運動・知覚・<br>幻覚)、自律訓練法 | 散髪                 |
| 8回 | 8月1日  | ◎立体交差、駅    | ☆飛行機、旅立ち      | 自律訓練法<br>標準、特殊          | ——                 |

…注意… ①；頭頂、②；側頭

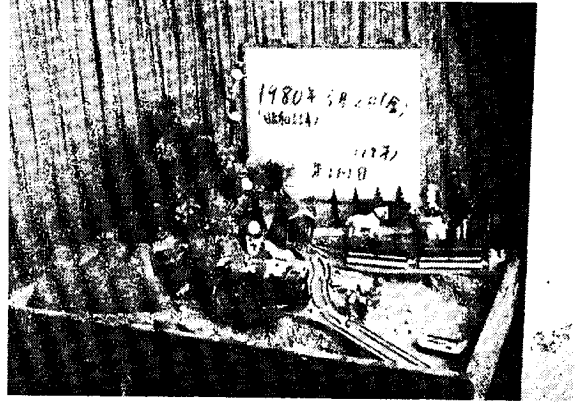
上の表の中で特に注目すべき場面を写真で示そう。予備面接では、写真①の状態、第1回の面接の箱庭の作品は写真②である。ここでは中央の「髪の毛のない」お地蔵さんと右上コーナーの長い髪の毛の少女が注目される。この時の状態は写真②のような症状であった。

第2回(写真③④)では、催眠治療の前後に箱庭を作り治療効果を比較してみた。治療前の写真③は、無機的な材料を使ったあまりにも整いすぎた作品であるが、治療後の写真④では、有機的な野菜、果物や力強い汽車などが注目され、治療効果が明確に表れている。

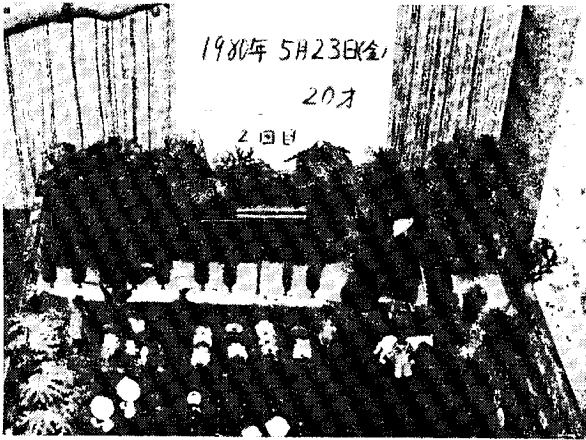
第5回(写真⑤)の作品は治療前のもので自我肥大をおこしたものである。そのため催眠治療で、退行現象を起し幼稚園前に一度もどしそれから順次小学校6年生まで成長させた(写真⑥)。その中で嫌いなものを書かせると、数分考えた後「先生」と書き、次にそれを消し、「学校」と訂正し、最後に「勉強」と書いた。彼の心的外傷は6年の時に、学校の「先生」から「将来何になりたいか」と聞かれた時、「ボクは科学者になりたい」と答えたが、先生から「あんたなんか、なれへん」といわれたことがあった。嫌いな物を順番に消す過程はその心的外傷を抑圧するプロセスを示す行動である。写真⑦は第2回面接時の症状で、写真⑧は第6回面接の時のもので完治した状態である。



①； 予備面接、脱毛症状



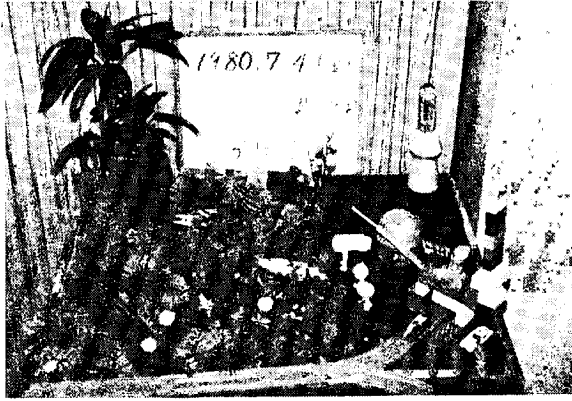
②； 第1回面接、初回の作品



③； 第2回面接、催眠治療前



④； 第2回面接、催眠治療後



⑤； 第5回面接、自我肥大の作品



あいつ、えおかきくけこ  
さしすせそたちつてと  
こんたちは

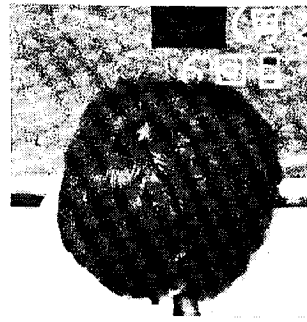
好きな物(ニレロ)  
きらいな物(ニレロ)  
勉強

6年生

⑥； 第5回面接、小学校6年に退行した時の絵



⑦； 第2回面接時の症状



⑧； 第6回面接時治癒



# JAPAN JUNG CLUB NEWSLETTER

編集発行 日本ユングクラブ事務局 東京都大田区山王1-37-3山王教育研究所内 ☎03-775-8155

## 深層心理学研究会

### < 第1回公開講座のお知らせ >

前号のニューズレターでお知らせしましたとおり、私たちの研究会では、森 茂起先生をお招きし、公開講座を下記のように開催致します。講演のあと、茶話会も予定しております。会員の皆様の多数のご参加をお待ちしています。

### 記

講師：甲南大学講師 森茂起先生（心理学）  
題目：夢 分析

場 所：甲南大学10号館（正門入ってすぐ右）  
日 時：61年7月5日（土）午後3時～5時  
参加費：500円（コーヒー＋ケーキ）  
\*参加手続きは、6月30日までに次のところまでおハガキで、名前・住所・電話・職業を記載の上申し込んで下さい。

神戸市東灘区岡本8-9-1（㊟658）  
甲南大学文学部哲学教室 谷口研究室  
電話：078-431-4341（内線 553）

ユングレターNo.10 より転載

### 第1回公開講座の報告

谷 口 文 章

去る7月5日（土）に、甲南大学において第1回公開講座が開催され、森 茂起先生（甲南大学・心理学）に講演をして頂きましたので、当日の状況を報告致します。

88名という予想外の多数の参加者を迎え、盛況の中、主催者（甲南大学谷口研究室・哲学）側からの公開講座開催の主旨説明および森先生の「夢分析」についての講演が行われ、茶話会でしめくられました。

講座の主旨は、ユング、フロイト、アードラーなどの深層心理学に関心をもつ人たちが集まり、心理学、哲学、文学その他に現れる

「人間の深層」についての学際的な討論ができるよう各分野の専門家をお招きし、たがいに啓発しあう場をもとうということです。

森先生の講演は、まず概念的にフロイトおよびユングに関しての夢概念の説明があり、続いてユングの見た「無意識という地下に降りて行く夢」を要（かなめ）としながら、8例の臨床事例を織りまぜて展開されました。無意識の「心の地下」を探ることの魅惑と恐怖、自己対決後の再統合へと向かう自己実現の過程を解説され、また分析的には初回夢と継続する夢の分析の大切さを強調されました。

後半では、スライドによってユングの成育歴や家系・生活環境を通じて、彼の人物像を視覚から訴えられ、「ユング自身の深層」を知



ることができたのでした。最後に活発な質疑  
応答がなされました。

講演の後、臨床心理学一般の話や参加者の  
経験談などが、和やかな中にも熱心にかわさ  
れました。テーブルを囲んで、中心部に箱庭  
が置かれ、ほんの少しの箱庭体験もできまし  
た。

深層心理研究会

<第2回公開講座のお知らせ>

私たちの研究室では、今夏スイスのチュー  
リッヒでユング派のP.ヴァルダール博士の教育  
分析を受けてこられた氏原寛先生をお招きし、  
公開講座を下記のように開催致します。講演  
のあと、茶話会も予定しております。会員の  
皆様の多数のご参加をお待ちしています。

記

講師：氏原 寛先生

大阪市立大学教授（心理学）

題目：ユング心理学をめぐって

場所：甲南大学10号館（国鉄・本山駅、また  
は阪急・岡本駅下車、西へ徒歩10分）

今後、半年に一回の割合で公開講座を行う  
予定ですので、皆様の御参加をお待ちしてい  
ます。（深層心理研究会世話役）

ユングレター No.11 より転載

日時：62年1月17日（土） 午後2時～5時  
参加費：講演会のみ 500円

茶話会希望者 500円プラス

◎参加手続きは、1月10日（土）までに下記  
宛おハガキで、名前・住所・電話・職業・茶  
話会参加の有無記載の上申し込んで下さい。

神戸市東灘区岡本8-9-1（〒658）

甲南大学文学部哲学教室 谷口研究室

電話：078-431-4341（内線 553）

ユングレター No.12 より転載



～深層心理研究会～  
第二回公開講座の報告

谷口 文章

去る1月17日(土)に、甲南大学において第二回公開講座が開催され、氏原寛先生(大阪市立大学・心理学)に「ユング心理学をめぐって」という題目で講演をして頂きましたので、当日の状況を報告致します。

心理専門家、教育者、深層心理に興味をもつ一般の人たちや学生など100名を超える人々が参加されました。

講演は、氏原先生御自身が解釈された「ユング心理学をめぐって」先生の臨床経験を踏まえて、ユーモアたっぷりに展開されました。テーマとして、ユング心理学の今日的意味、ウロボロス、英雄、永遠の少年、個性化等についてお話しされる予定でしたが、時間の関係上、ユング心理学の今日的意味に焦点を絞られ、茶話会で、残りのテーマが討論されました。以下要旨を記載します。

今日、日本ではユング心理学が一種のブームになっているが、それについて考えてみたい。心理学が要求されるのは、ヨーロッパ的合理主義、棄天主教の限界が明らかになってきたためである。そのような考えでは物質主義が幸福の基本と考えられている。ところが、物質が満たされても「存在の不安」は解消されるわけではないことに現代人は気づき始めている。

そのような人間存在の根源的不安を乗り越えるためには、まず、人間には他人と自分を「比較」する性癖があるが、その相対的比較を超えた「基本的安定感(自信)」を獲得すること——個人的な比較なしに「皆同じ」という考えにしがみつくとのは「永遠の少年」である——が第一であり、次に死の自覚が究極の問題となってくるが、それに対処する「構えの形成」が必要となる。

そこで認識論的視点から再考する必要があると思われる。そのような合理主義の源は、デカルト哲学であって、彼は主体と対象を切り離して二元論的哲学を確立した。しかしながら、我々の日常生活では「バラはバラでも自分が水をかけて育ててきたバラは、特別に可愛い」(サン＝テグジュベリ)といわれるように「主観的思い入れ」を通して、客観的価値を把握している。このような認識は現代哲学では「パトスの知」(中村雄二郎)といわれるが、近代合理主義的思考では、このような感情機能が切り捨てられてきた。そこでユング心理学は日常的な表層生活の奥にもっと深い象徴、記号、構造といったものがあり、上述の思考機能のみならず感情機能も包括的に分析しようとする。ここにユング心理学の現代的意味があるといえる。

ところでユング心理学の基本シェーマである意識—無意識は、相反するものではなく、相補的なものと考えられる。ものごとには客観・主観の両面があっても上下の価値秩序があるわけではなく、両者の均衡が要求されるように、意識・無意識もバランスが必要である。現代人が「パトス的知」

ることである。そこで両者のバランスが問題となるわけだが、実は両者の交流がスムーズな時のみ意識的世界の意味は明確となり、個性化は実現される。

以上のようにユング心理学の今日的意味とメカニズムをお話しされましたが、講演で述べられなかったところを質疑応答の形で補われました。

質問：自由連想、瞑想その他でアニマ・アニムス等という元型を意識できないか？

氏原：可能かもしれないが、元型そのものは意識できない。種々の解釈はあろうが、元型にはレベルがあるとは思わない。元型は混沌であって、必要な場面でアニマ・アニムス等の象徴が現れると思う。

質問：自我と元型の関係は？

氏原：自我と元型の関連でいうなら、自我は意識的世界の中心であり、セルフ、グレートマザー、アニマ・アニムス等の元型は、集合的無意識がイメージのレベルで意識化されるときの一側面である。したがって元型は、象徴として対象にプロジェクトされており、その上でしか我々にはわからないものと考えられる。

質問：個性化とは？

氏原：ヨーロッパ近代合理主義による、ギラギラした知的光が、私たちの心を照らせば照らすほど見えなくなる部分がある。そのような無意識的世界に内在する可能性を高次の全体性へと志向する努力の過程が「個性化する」という意味である。

以上のような公開講座の講演と質疑がなされ、後半茶話会に移り、前半では触れられなかった臨床ケースを含めて実践的側面が討論されました。

さらに茶話会的一端も紹介しましょう。

質問：もし個性化という意味が、その人の自己実現は自らに委ねられていることであるとすると、極端に表現すると何もしなくても実現できるのではないか？

氏原：カウンセリングの現場では、悩むことそのものに意味があって、介入しない方がよい時がある。その意味で形式的にセラピーには矛盾したことが現象として多くあると思う。

質問：カウンセラーとクライアントには相性があるのではないか？

氏原：あると思う。そしてカウンセラーはカウンセリングの限界を自覚し、自分の能力の範囲を知る必要がある。カウンセリングはあくまでも役に立てそうな人とそうでない人を見極めることが大事だから。

質問：カウンセラーとクライアントとの関係について。

氏原：アメリカなどでは、人格のレベルに応じて、グループ治療を希望するクライアントならロジャース流のエンカウンター・グループ、早く症状がよくなりたなら行動療法、そして個性化をめざすタイプのクライアントならユング派の分析などがあり、各派が分担して治療している。一つですべて治るとは限らず、効果と限界を自覚すべきであろう。

質問：今日の講演では人生前半の課題だったが、人生後半の課題とは？

氏原：従来の発達心理学では青年心理まで研究されることが常で、中年以降の問題は、青年期までの課題で為残したことが原因であったとみなされるが、ユングでは年齢ごとに乗り越えなければならない問題があると考えられる。人生の後半では、人間は歳をとり衰え死を迎えねばならない。もし死を「死ねば終わり」と捉えるならニヒリズムに陥るが、それを「死につつ生きる」と理解するなら、死に直面した時に生きることの喜びを見出すことができる。

このように、活発な討議がくり返される中、人生にはどんな生き方にも無意味な生き方はなく、それが彼にとって個性化のプロセスだと考えられ、人間は皆精一杯生きるようになっている、という氏原心理学の主旨が主張されました。

今回、ヨーロッパ近代合理主義の限界およびユング心理学のメリットが示される内容でしたが、さらにユング心理学の方法だけでなく、当日参加されておられた佐藤明雄教授（甲南大学・哲学）からも、カントによってすでに合理主義の限界が指摘され、後世の科学者はそれを忘れてしまっている、という意見も出されました。

次回の公開講座では「ユング心理学の神秘主義をめぐって」という題目で合理主義のアンチテーゼについて、哲学、心理学、文学の関係者によってシンポジウムを行う予定です。

（深層心理研究会世話役・甲南大学）

ユングレターNo.13 より転載

現実幻想 ～宮澤賢治「銀河鉄道の夜」をめぐる～

甲南大学 理学部 三回生 小谷 英子

宮澤賢治の描く「幻想第四次の銀河鉄道」は現実という三次元空間から「ほんとうの天上」へと走る。現実と幻想の連続する中に賢治童話の世界は広がる。

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの穴だよ。」カンパネルラが少しそっちを避けるようにしながら、天の川のひとところを指さしました。

ジョバンニはそっちを見て、まるでぎくっとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくらな穴が、どほんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら目をこすってのぞいてもなにも見えず、ただ目がしんしんと痛むのでした。(註①)

私達が五官で捉える宇宙が外的世界に、そして自我から自己につながる「私」を媒体として内的宇宙が広がっている。この内的宇宙を「観る」感官によってビジュアルなイメージとなった「穴(縁)」の通じる先が、「ほんとうの宇宙」である。外的宇宙の小さな存在に過ぎない人間は、その「穴」を介して反転すればこの宇宙全体を一つの点存在として内部に浮べている、「もう一つの宇宙」への通路を秘めた存在と言える。

現実と幻想はしばしば相反する世界として用いられるが、果たして両者は明確に区別できるものであろうか。五官による感覚、言語で組み立てられた概念、科学で証明された法則や現象などを、現実であり真理であると、近代合理主義は認識する。客観性に基づき対象を抽象化することは、捨象の中に主体の感覚や感情を取り残してしまう。主体と対象の切り離された世界において、私たちは矛盾存在とならざるを得ない。しかし賢治にとっての世界は、現実も幻想も同質のものであった。童話の中で賢治の「影」はこの世界の在り様を次のように顕示している。

「一ぼくたちは、ぼくたちのからだだって考えだって、天の川だって汽車だって歴史だってただそう感じているのなんだから。」

一ジョバンニは自分というものが、じぶんの考えというものが、汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぼかっと光って、しいんとなくなると、ぼかっとともってまたなくなると、そしてその一つがぼかっとともとあらゆる広い世界ががらんとひらけ、あらゆる歴史がそなわり、すっと消えると、もうがらんとしたただもうそれっきりになってしまうのを見ました。(註②)

所謂「本当」として定義されているものは、ヒトという「種」によって限定され、言語を媒質とした知識によって形成され、人為的に作り上げられた枠組の中で表現される。明在系（註③）の三次空間を横切る「時代」という平面のうちの一枚に、無数の主観と客観の場が入り乱れる。ここで、私たちの日常生活は営まれている。ある人は虚無的な悲しみのうちに絶望し、また諦めを知り死の影に怯えながら生活を担う。彼は時空の狭間に観念的に囚われの身となり、翻弄される。けれど、幻想世界を知ったとき、マクロ的視点を持ちながらも、逆説的なミクロ的一存在であるという「豫覚」を得ることができる。時間と空間から成る閉じられた系は、私たちの認識の遙かに及ばない開かれた系のうちに包括される。こうして人は、因果律の中であっても自由でいられるのである。現実と幻想の区別以前の混沌に身を沈めていると、カイロスを訪れる。外因によって誘発されることなく、どこかわからない遠いところから訪れる未分化な感情—全ての有機体無機体を流れるエネルギー—を知り、眼前には新しい世界が開ける。それは、「在るまま」の、既にそこにあった現実である。何の修飾もなされていないにもかかわらず、寧ろ単純で自然な姿の現実は、確かな存在感をもって横たわっている。もはや現実は、「心象風景」そのものになるのである。幾つものかなしみも、幾つかのよろこびも、全てを宿したまま、「存在」を愛するようになる。この現実が、五官を超えた万物の共通感覚の場となり得るためである。

「一僕はもう、あのさそりのようにほんとうにみんなの幸いのためならば僕のからだなか、百ぺん灼いてもかまわない。」

「うん。僕だってそうだ。」——

「けれどもほんとうのさいわいはいったい何だろう。」（註④）

この眩きは、同時に私たちの心の奥底に秘められたものの現れであり、賢治自身の祈りともいえる「想い」と源を同じくする。人は誰しも、現実と幻想を行き交う銀河鉄道に乗った旅人であり、無意識に「ほんとうの幸い」への道を辿るのである。

☆註

- ① 宮澤賢治；「銀河鉄道の夜」 岩波文庫 P. 298～29
- ② 前掲書 P. 301～302
- ③ 河合隼雄；「科学と宗教の接点」 岩波書店 P. 57～58 参照
- ④ 宮澤賢治；「銀河鉄道の夜」 岩波文庫 P. 298

三島由紀夫「豊饒の海<sup>1</sup>」に寄せて  
——意識・無意識。そして夢——

甲南大学O. B. 石田 智子

「清頭という方に、ほんまにこの世でお会いにならっしゃたのですか。私とあなたも以前たしかにこの世でお目にかかったのかどうか、今はっきりと仰言えますか。」「たしかにここへ上がった記憶がありますから。しかし、もし清頭君がはじめからいなかったとすれば。それならだれもいなかったことになる。この私ですらも。」

こころこころ  
「それも心々ですさかい。<sup>2</sup>」

「豊饒の海」は夢と転生の物語である。転生という、実現を超えたところのものを夢が導いていく。

四つの転生は松枝清頭に始まる。彼は綾倉聡子との恋の果てに生命を落すのだが、夢は彼の生活の一部として語られ、夢日記に残される。このノートは彼の死後、友人である本多に託される。清頭の間際の言葉と夢日記の言葉通りに転生にめぐり逢った本多は、自らの死の近いことを感じた時、今は門跡となっている聡子と再会した。冒頭の文章はその時の会話である。

夢の導きによって成就したはずの四つの生とそれをとりまく人々との時間がすべて夢に帰す。否定的な夢が肯定的な夢を呑み込んでしまった。

第一部「春の雪」の後註に、「豊饒の海」は「浜松中納言物語」を典拠にしたとあるが、三島は後にこの物語が大系本に編まれるにあたって、「夢が現実に先行するものならば、われわれが現実と呼ぶもののほうが不確定であり、恒久不変の現実というものが存在しないならば、転生のほうが自然である、と言った考え方で（この物語は）貫ぬかれている」<sup>3</sup>と記している。夢は先行するのだろうか。

ユング心理学の中に、「心の平衡」という問題がある。非現実的な理想を抱いたり、自分自身にあまりに過大な評価をしたりする人が、空を飛んだり落ちたりする夢を見ることがある。夢はこのように人の心の欠陥を補償したり、また、同時に現実の道が危険であることを警告して、心の平衡を保たせようとしていると考えられる。こうしてみると、夢の相補的な性質にはなにかしらを知らせる予知夢的な性質があり、また、一種の願望充足的な性質があるといえよう。<sup>4</sup>

これで転生を受け入れる素地ができた。

それでは次に、転生の思想、生れ変りの意味するところを明らかなのしたい。

「一つの思想がちがう個体の中へ時を隔てて受け継がれてゆくのは君も認めるでしょう。それなら又、同じ個体が別々の思想の中へ時を隔てて受け継がれてゆくとしてもふしぎはないでしょう。」

「同じ個体ですか。人間と白鳥と鶉と鹿とが。」

「生れ変りの考えはそれを同じ個体と呼ぶんです。肉体が連続しなくても妄念が連続するなら同じ個体と考えて差支えありません。個体と言わずに『一つの生の流れ』と呼んだらいいのかもしれない。人間を静的な存在として考えず、流動する存在としてつかまえる考え方はありうる。そのとき一つの思想が別々の『生の流れ』の中に受けつがれるのと、一つの『生の流れ』が別々の思想の中に受けつがれるのとは同じことになってしまう。」

生と思想との同一化。これをさらに広げれば生の流れの巨大な円環、

「輪廻」というものも一つの思想であると考えられよう。円環するもの。瞬時には一点であるにしてもそこに流れがあるなら、約束された転生をそれと認めることができよう。大いなる意志を感じる。しかしそれが「生」の流れであって、一瞬、つまり一つの個体に与えられた時間の連続であることを再考するに、その一瞬において輪廻をたち切ることも、あるいは意識しないことも——次元を換え、単位を個にもどし、夢の無時間性を意識の世界においてもとらえられるならば——簡単なことかもしれない。「心々」というならば、そういう言葉で落ちつけることはできるだろう。

意識と無意識の循環を宿命とすれば、夢は意識と無意識の媒介としてあり、意識を追いやる。転生の思想がどこに浮かんだか、夢——無意識を思うに、転生のたしからしさに至るのであり、またその円環の収束——無時間性の極みを思うに、輪廻の崩壊に至るのである。あるもののくずれる音を聴くのである。

#### ◎註

- 1 「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」の四部からなる。
- 2 「天人五衰」最終部より
- 3 岩波「日本古典文学大系」月報「夢と人生」より
- 4 以上、心の平衡については、鐘幹八郎著「夢分析入門」  
P. 198～P. 199を参考とする。
- 5 「春の海」より。「本生経」の話をしていて、仏陀が菩薩であったころの二度の転生にまつわる話。金の白鳥、鶉、猿、鹿の王などにつきつぎと生まれ変わったという。



◎講義概要

哲学 (B) : 4 : 通年 :

谷口文章

「人間は明らかに考えるために作られている。それが彼のすべての尊厳、彼のすべての価値である。そして彼のすべての義務は、正しく考えることである。」(パスカル)と言われるように、私たちは社会や人生の諸問題について正確に認識し、考え、行為することが必要となる。それはすなわち「哲学する」ことであり、そのための資料を講義で提出できれば、と考えている。

まず、ノート講義で哲学的な基礎理論を提起し、他方テキストでプラトンの古典に触れながら、エロス(愛)について共に哲学していきたいと思う。

教科書：プラトーン著「饗宴」(新潮文庫)

演習I・II : 4 : 通年 :

谷口文章

「象徴」に関する哲学的研究

本年度はランガーの「シンボルの哲学」(岩波書店)を中心に、象徴に関する哲学的諸問題について検討する。テーマは、サインとシンボルの論理、言語、聖礼典・神語の起源、音楽・芸術論、意味論等を取り扱う。この書物は発表形式で進める。

そして、これと並行して、論文・レポート作成のための哲学的術語を獲得する手段として、昨年度に引き続き、三輪正著「議論と価値」(法律文化)の第4部から精読していく予定である。

文献演習(B類) : 4 : 通年 :

谷口文章

David Hume, A Treatise of Human Nature (Oxford)

ヒュームの「人間本性論」の第三部道徳について、を講読する。ヒュームには「理性は情念の奴隷である」とか「人間は知覚の束である」というような有名な言葉があるが、彼の業績はイギリス経験論を徹底的に遂行した点に心ろう。18世紀の社会哲学の偉大な古典に直接あたって、その思想を味わってみたく思う。

テキストはプリントを配布する。

VII

6 1 年度ゼミ活動報告

## 1. セミナール合宿

①第十二回ゼミ合宿（昭和61年3月7日～9日，於：IUSK）

研究発表会(1)哲学系・・・ルソー「エミール(第三編)(岩波文庫)

(2)心理学系・・・樋口和彦「ユング心理学の世界」(創元社)

(3)教養系・・・石牟礼道子「苦海浄土・わが水俣病」(講談社)

VTRによる討論会

②第十三回ゼミ合宿(昭和61年7月12日～14日，於：小豆島) 寒霞溪から銚子溪  
セミナール研修旅行として小豆島の寒霞溪と銚子溪を訪れ、討論の機会を  
もつ。

③第十四回ゼミ合宿(昭和62年3月13日～15日，於：IUSK)(予定)

研究発表会、谷口助教授による催眠実演及び心理学実習(箱庭療法、自律訓練  
練) ※IUSK=関西地区大学セミナーハウス

## 2. セミ構成員

小竹代理子(文研究生)・植木通博(文研究生)・北村真(法修2)

合志由美子(文4)・房安雄司(文4)・山田美紀(文4)

飯塚陽子(理4)・上野純一(理4)・脇田博代(理4)

能丸耕太郎(経4)・杉浦薫(文3)・古市亮平(文3)

榊井靖之(文3)・池田美喜子(理3)・井上友雄(理3)

岩田哲郎(理3)・川上義雄(理3)・北詰由美(理3)

小谷英子(理3)・高木敏宏(理3)・馬道佳代(理3)

前田幸俊(理3)・万井敏寛(理3)・美馬啓一(理3)

村松義伸(法3)・山下裕幸(法3)・大内雅勝(理2)

呑海友子(理2)・益田浩子(理2)・山下智実(法2)

## 3. 受講生

岡保利佳子(理4)・迎真弓(理4)・和田浩一(理4)

大嶋利枝(理3)・小林究(理3)・藤田清士(理3)

西村由美(理1)

## VIII . 編集後記

夏休みも終わり、前期試験が近づく頃、今回の報告書の作製計画がたてられました。そして、目標は次回の合宿の日までに完成を！というものでした。しかし、計画はあくまで予定、予定は未定で決定ではありませんのであります。前期試験、後期試験を乗り越え、遊びという誘惑にも負けず、雨の日も風の日も雪の日も日夜、哲学・倫理学共同研究室にとじこもり、タイプやワープロを動かすことに専念(!?)・・・このような苦労をものともせず、私達は頑張ってきたのです。ところが今年もズルズルと・・・。みなさま、原稿の提出期限は守りましょう。

今回も、谷口先生には、いろいろな方面で御指導して頂きました。奈良高専 O. B. の藤松氏には、表紙の件でお世話になりました。甲南コピーセンター、文学部事務室をはじめ、甲南大学の方々、御迷惑をおかけしました。こうして報告書完成の日を迎えることができましたのもみなさまのおかげです。本当にありがとうございました。そしてゼミ生のみなさん、御苦勞様でした。次回も頑張ってください。

これからやって来る春本番のやわらかな光のように暖かく、かつ、厳しい目でお読み下さればうれしく思います。

編集代表者 川上義雄  
山下智実  
岩田哲朗

昭和61年度活動報告書

編集者 小竹・植木・和田・脇田・房安・合志・飯塚  
能丸・上野・山田・岩田・馬道・万井・高木  
川上・古市・村松・松木・小谷・北詰・山下(裕)  
井上・野方・藤田・益田・呑海・大内・山下(智)  
西村・北村

発行所 甲南大学文学部谷口研究室  
TEL (078) 431-4341

発行日 昭和62年3月24日 初版発行

印刷所 甲南大学コピーセンター

## IX. 追補

小豆島の合宿で、好広先生にお願いしておりました原稿がネパールから届きましたので、掲載します。先生には御多忙中、御玉稿を頂きましたことを深く感謝致します。

谷口 文章

## 授業概要追加

哲学特論 I：4：通年：

谷 口 文 章

「正義論」に関する哲学的研究

前期において、正義論の歴史を次の順序で概観する。

1. 古代正義論（ソクラテス、プラトン、アリストテレス、キケロ、セネカ）
2. 中世正義論（キリスト、アウグスティヌス、アクナイス）
3. 近世正義論（ホッブズ、デカルト、ヒューム、ルソー、カント、ヘーゲル、ベンサム）

後期において、現代正義論の最大の古典と評価されているJ. ロールズの正義論を詳細に検討していく予定である。

## 1986年小豆島ニホンザル調査報告

龍谷大学 経営学部助教授 好広 真一

1986年 7月12日から14日まで私の奇形発生についての継続観察と、谷口ゼミ（甲南大学）の野外実習をかねて、小豆島のニホンザルの調査をおこなった。調査者は29名で、銚子溪群の個体数及び奇形個体の把握をこころみた。寒霞溪へは行ったものの、群れは観察出来なかった。

### 1. 日程

1986年 7月12日

10:20 神戸発

15:55~18:55 銚子溪にて観察

7月13日

7:36~ 8:45 銚子溪群個体数調査

~12:00 銚子溪群奇形調査

昼食後 寒霞溪へむかい、表十二景を降る。

14:35 老杉洞餌場を経て、紅雲亭。表十二景を登りかえして再び銚子溪。

~18:45 個体数及び奇形数調査

7月14日

8:30 銚子溪餌場

~11:00 個体数及び奇形数調査

11:45 谷口ゼミ銚子溪発

12:15~16:25 好広のみ銚子溪群奇形調査

16:40 好広銚子溪発

### 2. 調査者


好広真一（龍谷大学）、谷口ゼミ（甲南大学）ゼミ旅行参加者28名

### 3. 銚子溪群

今回の調査と、好広の1984年の調査の間に、調査溪（銚子）群は2度目の分裂をみせ、3群となっていた。これにともなって、サル達の空間配置および移動のしかたにも変化が見られ、これを概念図で示すと次のようになる。





小豆島S群の奇形個体の記載(1986年 7月12~14日)




1. 4♀ 右手S<sub>3</sub> 他N + 0♂N 初産  
 小柄、白毛、毛がわり中  


2. 5♂ 四肢M  
 右手U 左手S<sub>2</sub> 広い  
 両足S<sub>3</sub>交差

7♀ 両手左足M 3と同じかどうか?

右手S<sub>2</sub> 左手S<sub>3</sub>  
  
 右足N? 左足S<sub>4</sub>  
  
 広い

3. 7♀ 四肢M  
 右手U 左手S<sub>3</sub>か?

  
 広いS<sub>2</sub>の様に  
 見える  
 歩くときは手首を  
 つくように見える  
 右足Br 左足S<sub>4</sub>  
  


体小さい、顔逆三角形  
 + 0♂N  
 この子抱いて他のメスから攻撃されていた。他人の子か?  
 四肢で歩くと前肩が少し落ちる。

4. 7♀ 四肢M

右手 S<sub>2</sub>

左手 S<sub>3</sub>

右足 U

左足 U

5. Ad♀ 両手M 両足N

右手 U



左手

+ 0 ♀ N、+ 1 ♀ N、

短い



曲がったまま

+ 2 ♀ N

よく動く このIIのみでgr

Ad♀ 両手M 両足N → Sか?

白毛

右手

左手

歩くとき右手内反手



10♀ 両手M

+ 0 + 0 ♀ N

右手 U

左手 → S だろう

白毛

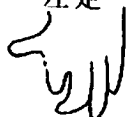


IIばかり使う

6. 10♀ 左手 両足M

右足

左足



右手 N

左手 S<sub>3</sub>か?




広い

7. 10♀ 右手のみM 他N  
 右手S<sub>3</sub>

体大きい  
 め的な顔と体つき

8. 10♀ 四肢M  
 右手U

左手  


右足Uか?  


左足Br, C  
  
 てのひら側へ曲がりこむ

+ 1♂N  
 乳首吸う、むずがる  
 顔小さい

10♀ 右手のみM→Sか? 他N


7だろう

10+♀ 右足足首よりなし 他N

首に赤輪

9. 8♂ 両手M 両足N  
 右手A d


  
 ここをついて動く

左手S<sub>2</sub>  



  
 コムギをここでつまんでくう

10. 8♂ 四肢ともMらしい

右手b<sub>III-V</sub>

  
 そろって短い


左手b, c

  
 c 短い

右足O<sub>4</sub>らしい



左足c

  
 c IVが小さい

11. 10♂ 両手M 右足N 左足?

太って腹出ている

右手S<sub>3</sub>

左手S<sub>3</sub>



II曲がる

12. 15+♂ 両手S<sub>3</sub>

7/13は見えていない。7/12に見る。

13. 10+♀ 四肢M

太る

右手S<sub>2</sub>

左手S<sub>2</sub>

+ 1♂N + 2



右足S<sub>3</sub>

左足S<sub>3</sub>



14. Ad♀ 両手M 両足N

毛がわり完了前

右手U

左手S<sub>2</sub>

+ 0♂



小さくて黒いアカンボウ



毛が抜けている



体大きい 太り、腹出ている

Ad♀ 両手左足M 右足AN

3と同じか?

右手S<sub>2</sub>

左手S<sub>2</sub>

でなければ別個体だ。



強く曲がる

15. 7♀

左手両足M

右手N

3と同じかどうか？

左手S<sub>4</sub>か？

左足

↓

別だろう



右足

左足S<sub>4</sub>



+1

A♀

右手M 他N

7か別か？

右手S<sub>3</sub>らしい

顔小さい、毛バサバサ

首に赤輪、+2♂



A♀

左手AN 他N

(10+)

左手IIIなし→奇形でなく外傷だろう +0



以前から見ている個体。これがひっかかってきたのはかなりよく見れていることの傍証になる。

体小さく、赤輪あり

表 1. 銚子溪の個体数調査(1)

(1986年 7月13日 朝の行列計数 7:30~8:45)

| 調査者* | 性・年齢層       |    |     |    |         |    |    |     |    | 計     |
|------|-------------|----|-----|----|---------|----|----|-----|----|-------|
|      | オトナ 小ナメ 小ナメ |    |     |    |         |    |    |     |    |       |
|      | 0           | 1  | 2   | 3  | 4 (5~6) | 7+ | 5+ | 不明  |    |       |
| 好広①  | 0           | 2  | 3   | 8  | 2       | 8  | 3  | 1   |    | 27    |
| 好広②  | 3           | 2  | 1   | 1  | 0       | 2  | 13 | 21  |    | 43    |
| 岩田   | 34          | 4  | 16  | 7  | 15      | 6  | 14 | 43  |    | 139   |
| 高木   | 5           | 10 | 15  | 6  | 8       | 0  | 1  | 11  |    | 56    |
| 村松   | 0           | 2  | 4   | 5  | 1       | 1  | 1  | 2   |    | 16    |
| 古市   |             |    |     |    |         |    |    |     | 94 | 94    |
| 杉浦   | 19          | 25 | 16  | 6  | 2       | 3  | 35 |     |    | 106   |
| 飯塚   | 10          | 10 | 3   | 2  | 2       | 2  | 6  | 18  |    | 53    |
| 益田   | 36          | 10 | 21  | 19 | 3       | 9  | 15 | 61  |    | 174   |
| 杉林   | 4           | 5  | 4   | 7  | 1       | 2  | 2  | 17  |    | 42    |
| 万井   | 2           | 0  | 5   | 5  | 5       | 2  | 4  | 11  |    | 34    |
| 上野   | 0           | 1  | 6   | 1  | 1       | 4  | 2  | 2   |    | 17    |
| 川上   | 1           | 0  | 0   | 1  | 0       | 3  | 3  | 1   |    | 9     |
| 植木   | 0           | 0  | 0   | 0  | 0       | 0  | 4  | 0   |    | 4     |
| 好広③  | 2           | 0  | 2   | 1  | 4       | 6  | 7  | 4   |    | 26    |
| 小計   | 116         | 71 | 96  | 69 | 44      | 48 | 75 | 192 | 94 | 840** |
| 好広④  | 17          | 23 | 13  | 5  | 11      | 9  | 13 | 42  |    | 133   |
| 総計   | 133         | 94 | 109 | 74 | 55      | 57 | 88 | 234 | 94 | 973** |

\* 調査時の順番どおり。東から西へ配列。

\*\* 性不明のオトナ35頭を含む。この小計はS<sub>1</sub>群とS<sub>2</sub>群を含むもの。

好広① 行列計数する前にすでに餌場に入っていたサルの数。

好広② 行列計数時のサル。

好広③ 行列計数後、計数線より下にいたサルのうち、下の鳥居・荷物預かり所よりも上にいたものの数。S<sub>1</sub>群またはS<sub>3</sub>群と考えられる。

好広④ 行列計数後、計数線より下にいたサルのうち、下の鳥居・荷物預かり所よりさらに下にいたものの数。S<sub>2</sub>群と考えられる。

表2. 銚子溪群の個体数調査(2)

(1986年7月13日 夕方の行列計数 16:40~18:40)

| 調査者*           | 性・年齢層       |    |    |    |    |       |    |     |    |     |
|----------------|-------------|----|----|----|----|-------|----|-----|----|-----|
|                | ♂オス ♀メス ♀メス |    |    |    |    |       |    |     |    |     |
|                | 0           | 1  | 2  | 3  | 4  | (5~6) | 7+ | 5+  | 不明 | 計   |
| 和田             | 1           | 0  | -1 | -6 | 7  | -8    | -4 | -1  |    | -12 |
| 房安             | 1           | 2  | 1  | 1  | 3  | 2     | 3  | 1   |    | 14  |
| 山下 }<br>大内 }   | 1           | 0  | 1  | 2  | 1  | -20   | -6 | -3  |    | -24 |
| 松木             | -2          | 4  | -2 | -2 | -4 | 0     | -5 | -2  |    | -13 |
| 馬道             | -6          | -2 | -9 | -7 | 2  | -2    | -1 | -16 |    | -41 |
| 杉林             | 17          | 13 | 14 | 13 | 6  | 0     | 4  | 20  |    | 87  |
| 益田             | 20          | 8  | 15 | 29 | 26 | 5     | 20 | 27  |    | 150 |
| 飯塚             | 0           | 0  | -1 | -7 | -5 | 0     | 1  | 1   |    | -11 |
| 植木             | 0           | 0  | 1  | 0  | 4  | -3    | 3  | 3   |    | 8   |
| 高木             | 3           | 24 | 14 | 15 | 2  | 2     | 1  | 2   |    | 63  |
| 万井             | 4           | 9  | 9  | 17 | 7  | 1     | 6  | 13  |    | 66  |
| 村松             | 5           | 3  | 4  | 7  | 9  | 1     | 1  | 6   |    | 36  |
| 古市             |             |    |    |    |    |       |    |     | 29 | 29  |
| 小計             | 44          | 61 | 46 | 62 | 58 | -22   | 23 | 51  | 29 | 352 |
| 上野** }<br>好広 } | 9           | 8  | 6  | 9  | 8  | 22    | 40 | 42  |    | 144 |
| 総計             | 53          | 69 | 52 | 71 | 66 | 0     | 63 | 93  | 29 | 496 |

\* 調査時の順序どうり。北から南へ、そして西へと配列。

\*\* S<sub>3</sub>群

表3. 銚子溪群の個体数調査(3)

(1986年 7月14日 テープセンサス他)

| 調査者 | 調査時間     | 性・年齢層 |    |    |    |         |    |    |    |     |
|-----|----------|-------|----|----|----|---------|----|----|----|-----|
|     |          | 0     | 1  | 2  | 3  | 4 (5~6) | 7+ | 8+ | 計  |     |
| S1群 |          |       |    |    |    |         |    |    |    |     |
| 植木  | 10:10    |       |    |    |    | 345     |    |    |    | 345 |
| 高木  | 10:15    |       |    |    |    | 609     |    |    |    | 609 |
| 杉林  | 10:15    | 62    |    |    |    |         |    |    |    | 62  |
| S2群 |          |       |    |    |    |         |    |    |    |     |
| 植木  |          | 21    | 19 | 28 | 16 | 6       | 20 | 37 | 42 | 189 |
| 植木  | 8:30     | 18    | 16 | 28 | 12 | 9       | 11 | 25 | 47 | 166 |
| 好広  | 8:45     | 17    | 17 | 11 | 9  | 8       | 1  | 23 | 68 | 154 |
| 好広  | 8:34~38  | 21    | 14 | 13 | 10 | 17      | 5  | 24 | 66 | 170 |
| 高木  | 8:38~42  | 8     | 20 | 24 | 22 | 24      | 9  | 7  | 35 | 149 |
| 村松  | 8:30     | 19    |    |    |    |         |    |    |    | 19  |
| S3群 |          |       |    |    |    |         |    |    |    |     |
| 植木  | 10:40    |       |    |    |    | 341     |    |    |    | 341 |
| ?   | ?        |       |    |    |    | 311     |    |    |    | 311 |
| 杉林  | 10:45~48 | 25    |    |    |    |         |    |    |    | 25  |
| 高木  | ?        | 57    |    |    |    |         |    |    |    | 57  |
| 好広  | 15:45~48 | 23    |    |    |    |         |    |    |    | 23  |
|     | 15:52~54 | 22    |    |    |    |         |    |    |    | 22  |
|     | 16:01~04 | 28    |    |    |    |         |    |    |    | 28  |

④ いずれも餌場にひろがっているサルを数えたもの。

テープレコーダによる。他はカウンターによる。

表4. 銚子溪群の個体数(A)

(1986年 7月12~14日)

| 群れ             | 0才  | 1才以上 | 計    |
|----------------|-----|------|------|
| S <sub>1</sub> | 62  | 609  | 671  |
| S <sub>2</sub> | 28  | 341  | 369  |
| S <sub>3</sub> | 21  | 168  | 189  |
| 総計             | 111 | 1118 | 1229 |

主に表3による。

表5. 銚子溪群の個体数(B)

(表4を一部修正)

| 群れ             | 0才  | 1才以上 | 計    |
|----------------|-----|------|------|
| S <sub>1</sub> | *88 | 609  | 697  |
| S <sub>2</sub> | 28  | 341  | 379  |
| S <sub>3</sub> | 21  | 168  | 189  |
| 総計             | 137 | 1118 | 1255 |

\*S<sub>1</sub>群の28よりかなり確からしいので、これを116より引いた値。



表6. 小豆島S群(鏡子溪群)の奇形個体

(1986年 7月12~14日)

| 推定年齢・性 | 右手                     | 左手             | 右足                                    | 左足             | 今回のNo. | 個体No.     |
|--------|------------------------|----------------|---------------------------------------|----------------|--------|-----------|
| 4 ♀    | S                      | -              | -                                     | -              | 1      | 35-038    |
| 5 ♂    | U                      | S <sub>2</sub> | S <sub>3</sub>                        | S <sub>3</sub> | 2      | 35-039    |
| 7 ♀    | U or 広い S <sub>2</sub> | S <sub>2</sub> | Br                                    | S <sub>4</sub> | 3      | 35-028    |
| 7 ♀    | -                      | S <sub>4</sub> | 不明だが O <sub>4</sub> or S <sub>4</sub> |                | 15     | 1983の?? ♀ |
| 奇形     |                        |                |                                       |                |        |           |
| 7 ♀    | S <sup>2</sup>         | S <sup>3</sup> | U                                     | U              | 4      | 35-026    |
| 10 ♀   | U                      | b I c n - v    | -                                     | -              | 5      | 1981の⑨    |
| 10 ♀   | S <sub>3</sub>         | -              | -                                     | -              | 7      | ?         |
| 10 ♀   | -                      | S <sub>3</sub> | S <sub>3</sub>                        | b n c n        | 6      | 1983の?? ♀ |
| 10 ♀   | U                      | Sy II - v      | U                                     | Br m c n       | 8      |           |
| 10 ♀   | U                      | S <sub>2</sub> | -                                     | -              | 14     | 1983の9.25 |
| *10 ♀  | S <sub>2</sub>         | S <sub>2</sub> | b n                                   | S <sub>4</sub> | 3と同じ?  | -         |
| 10 ♀   | S <sub>2</sub>         | S <sub>2</sub> | S <sub>3</sub>                        | S <sub>3</sub> | 13     | 1983の9.25 |
| 8 ♂    | Ad                     | S <sub>2</sub> | -                                     | -              | 9      | 35-037    |
| 8 ♂    | b n - v                | b n c n        | O <sub>4</sub>                        | b n c n n      | 10     | 35-037    |
| 10 ♂   | S <sub>3</sub>         | S <sub>3</sub> | -                                     | -              | 11     | 35-020    |
| *15 ♂  | S3                     | S3             | -                                     | -              | 12     | 同一?       |

\* 他と重複の可能性あり。

Ad:無指, U:短指, S:裂手裂足, O:欠指, Sy:ヒフ性合指,

Br:分枝, b:指が短い, c:指が曲がっている,

2-5:残った指の数, II-V:第2指~第5指,

個体No.:全国の奇形個体の登録No.

35-は小豆島のコード番号

表7. 小豆島S群の奇形個体の性・年齢構成

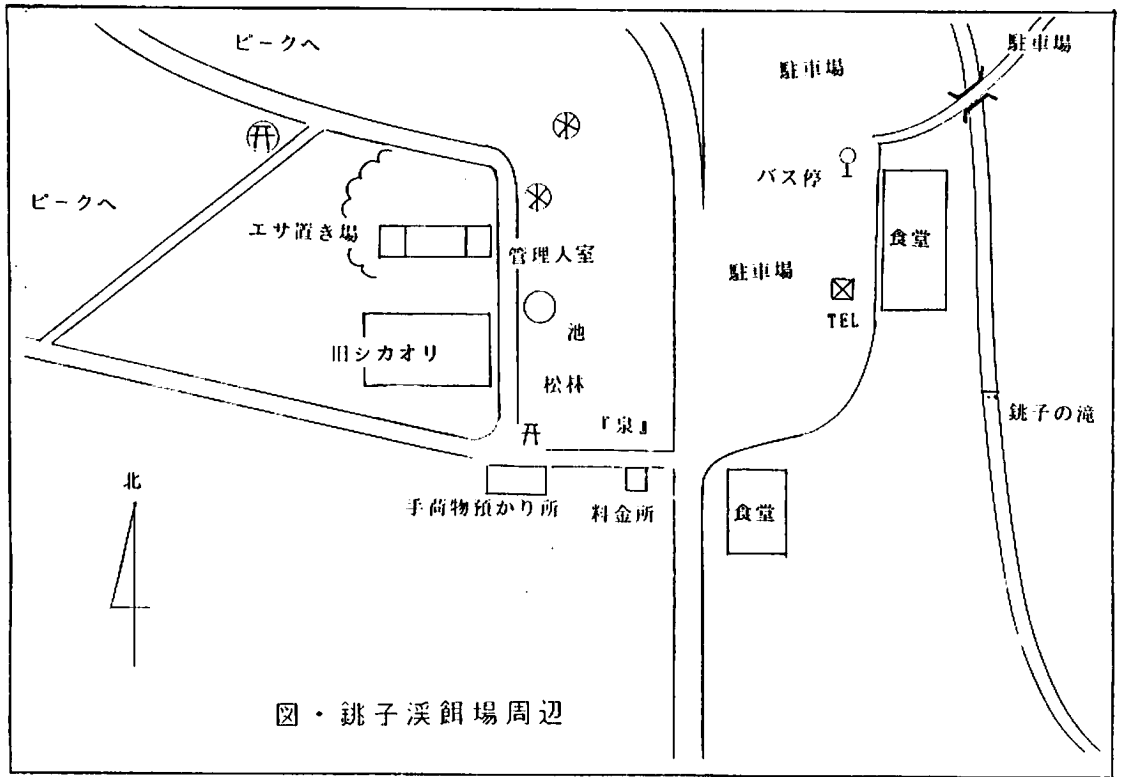
| 年齢層  | メス | オス | 計  |
|------|----|----|----|
| 0~3才 | 0  | 0  | 0  |
| 4    | 1  | 0  | 1  |
| 5    | 0  | 1  | 1  |
| 6~   | 3  | 2  | 5  |
| 10~  | 6  | 1  | 7  |
| 計    | 10 | 4  | 14 |

表8. 小豆島S群に見られる奇形の形態と出現数

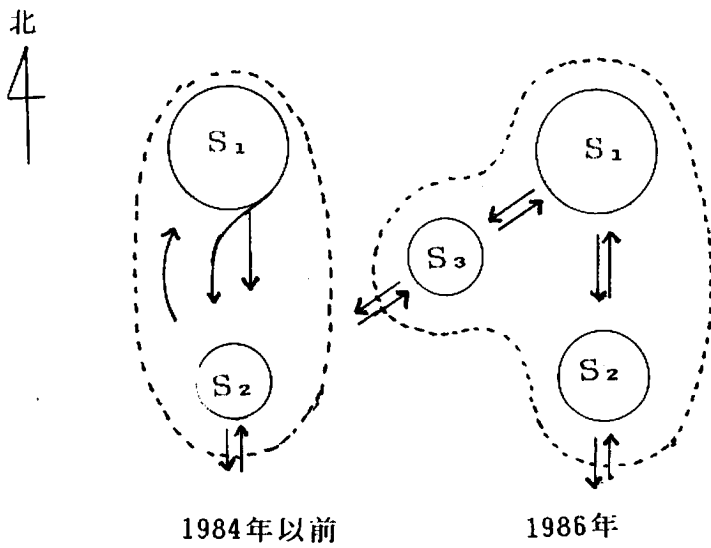
| 形態             | 右手 | 左手 | 右足  | 左足   |
|----------------|----|----|-----|------|
| Br             | 0  | 0  | 1   | 1    |
| O <sub>4</sub> | 0  | 0  | 1   | 0+1* |
| S <sub>3</sub> | 0  | 1  | 0   | 0    |
| S <sub>4</sub> | 0  | 1  | 0   | 1+1* |
| S <sub>3</sub> | 3  | 3  | 3   | 2    |
| S <sub>2</sub> | 3  | 4  | 0   | 0    |
| U              | 4  | 0  | 2   | 1    |
| Ad             | 1  | 0  | 0   | 0    |
| Sy             | 0  | 1  | 0   | 0    |
| 計              | 11 | 10 | 8** | 6    |

\* どちらか不明

\*\* 形態不明の1個を含む。



p.14の注1より概念図



1984年以前には、 $S_1$ 群と $S_2$ 群はそれぞれ南と北に位置していた。そして、時には $S_1$ 群が夕方に南西へ移動するということがあったが、両群とも泊りは南、採食は北で、夕方また南の泊り場へというような1日に南北方向へ一往復(約500m)という動きを繰り返していた。今回の調査時には $S_2$ 群の位置と移動は1984年以前と同じだったが、新たに生じた $S_3$ 群が $S_1$ 群の南西ないし西に位置し、夕方南西へと移動した。 $S_1$ 群は12日の夕方は南へ移動したが、13日には西南へ移動した。ところが西南域はウバメガシ(1~3m)の低木林で見通しが悪く、そのために正確な計数が出来なかった。

#### 注1

なお、概念図において $S_1$ などの外側に点線を描いた。これは個体識別をしていないので断言できないのだが、 $S_1$ 、 $S_2$ 、 $S_3$ の境界または一部の個体の群れ所属意識がそれほどはっきりしたものでないことを意味する。多くのメスと中心的な一部のオスについては所属意識は明確であるが、一部のメスと中心的でない多くのオスたちは2つの「群れ」の間において、どちらに属するかははっきりしないように思う。

#### 注2

性年令層はすべての場合において次のように区分した。オトナメス(5才以上)、オトナオス(7才以上)、ワカオス(5~6才)、4才、3才、2才、1才、0才の8つである。

### 4. 固体数

#### (1) 方法

##### ① 7月13日朝

南の泊り場から北の餌場に入るサルを数えるべく、旧鹿檻の北端を計数線に設定して、13名の調査者で直線を作り、隣の調査者との間を通るサルの性・年令を記録した(注2)。ところが南からすぐに北へ向かうであろうとの想定を裏切って、多くのサルが北西へ向かい、餌場(西~西南)にたまったため、2名で、残りのサルを道ぞいに歩きながら数えた。あらい計数であり、漏れ落ちがあると思われる。また、 $S_1$ 群と $S_3$ 群を区別できず、両者を含めて計数している。

##### ② 7月13日夕方

餌場から泊り場へ南下するサルを数えるべく、餌場下の道に「」型の計数線を14人でつくり、となりの調査者との間を通るサルの性・

年令を記録した。前日の夕方南から南東へ向かったS<sub>1</sub>群は、この日は西南へ向かったため、上野・好広で道沿いに数えたが、低木林に多くのサルが入っていて数えられず、この計数は失敗であった。

③ 7月14日

7月13日の経験から、サルの動きが以前と違っており、道などの見通しのよい所を多数のサルが通らないことが分かったので計数線をつくっての行列計数法は止め、餌場へ来てひろがっているS<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub>群のそれぞれを、テープレコーダーまたはカウンターを使って性・年令を記録、または0才とそれ以外にわけて数えた。方法からみて、特にS<sub>1</sub>群については漏れ落ちがありそうだ。

(2) 結果

個体数調査の結果を表1～3にあげた。表3の計数結果が最も確からしいので、表3からそれぞれの群れの年令層についての確からしい最大数を取り出したのが表4である。

総数はS<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub>各群が671、189、369頭で計1229頭、うち0才の数は計111頭である。

この表4と表1、2の7月12日の計数結果との間に矛盾はないか？表2は失敗だから除くとして、表1と比べてみると表1の小計はS<sub>1</sub>群とS<sub>3</sub>群を含み、好広④がS<sub>2</sub>群と考えられる。

表4のS<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>の和と表1の小計とを比べれば総数は後者の方が少ないが、これは表1調査の条件を考えると数え落としとして理解できる。しかし0才児の数は表4で90に対し、表1で116と、後者で多くなっている。これには表1調査時に1才児をも0才児に含めて数えてしまった数えすぎと表4調査時の数え落としの両方が関わっていよう。ここ(=表3)では、表4調査時はサルがかたまっていて、0才児は見落としやすい条件にあることから表1の116がより真実に近い値と考えられる。これらのことから表4の値を一部修正すると、(表5)S<sub>1</sub>+S<sub>2</sub>の0才児数は90ではなく116となる。したがって0才児の総数137頭、総個体数1255頭というのが、一応のまとめである。

もとよりこれは荒い不正確な計数結果であり、ほぼこのくらいであるという参考にとどめたい。

## 5. 奇形

今回の調査時に観察した奇形個体についてのみ述べることにする。

### (1) 調査方法と奇形個体一覧

餌場およびその周辺を繰り返し歩き回り、また個体数計数や泊り場と餌場との行き帰りのときも目をこらして奇形個体の発見につとめる。そしてその奇形箇所と形態、性・年令、子供の有無と子の性・

年令、体毛や顔の色などの特徴を記録し、写真を撮影した。現場調査終了後、奇形個体についての一覧表をつくり重複を除いた。このようにして作成したのが表6である。

### (2) 奇形個体数と性・年令構成

今回確認できた奇形個体は表6より16頭いたが、うち\*をつけた2頭は他と重複の可能性が高いので除くと14頭である。うちわけは(表7)、メス10、オス4で、0~3才には1頭も見付からなかった。これ以前の調査結果と照らし合わせると、4才以上の年令層、0~3才の年令層とも、以前見かけた奇形個体で今回見られなかったものが何頭かある。これらについては、今回の調査が不十分で未発見なのか死亡あるいは移出なのか断言できない。今回記載した14頭のうちの7頭は既に個体No.をつけていたものであり、ほかの5頭も、1981年、1983年調査時に記載した個体のようである。一方、表6の10才メスのうちの2頭はこれまで記載していない今回新発見の奇形個体の可能性があるが、これについては過去の記載および写真とよく照らし合わせてみなければならない。

### (3) 奇形箇所と形態

表8に今回観察された奇形の形態・出現箇所、出現数をあげた。他の地域と同じく裂手・裂足(S<sub>5</sub>~S<sub>2</sub>)や単指(U)が多い。なお、各個体ごとの形態の詳細は巻末の記載を参照されたい。

## 6. まとめにかえて

今回の調査は、多くの目で探したとはいえ初心者でもあり、個体数を正確に把握し奇形個体を記載しつくすには、日数も含めて不十分であった。また、ある時点での小豆島S群についての記録としても不備な点が多い。例えば初夏の時点では0才児が母とくっついていいる時間が多く、0才児における奇形の確認がしにくいため計数が不正確になった点が挙げられる。しかし、晩夏になれば母から離れるため、0才児の観察も行い易くなる。この調査を1つの意味ある試みとして残すためには、秋または冬にせめて4日間の追加調査が必要であろう。しかしこのように考えている間に1987年の春になってしまった。この年こそ、がっちり押さえねばならない。

今まで不十分な点ばかり指摘したがサルを見るのが初めてでは無かったとしても、サルの調査は初めての人ばかりであるにも拘わらず、熱心な調査であったこと。また不正確とはいえ2日間とは思えぬほどの調査結果が報告されたことは評価し、素直に喜びたい。

## 7. 小豆島S群の奇形個体の記載(1986年 7月12~14日調査)

別紙 1/6~6/6

The "FOURTH" was expressed.  
and, only Lord knows what is acquired.  
no,  
I see it the force.  
so, we always declare the victory.